

# 日本醫史學雜誌

第 21 卷 第 4 号

昭和 50 年 10 月 30 日発行

---

## 原 著

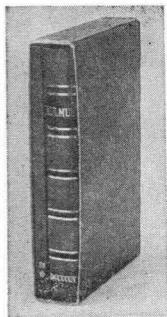
- 『ショメール百科』（『厚生新編』）・『植学啓原』・『植学独語』  
の関連……………矢部 一郎…（ 1 ）
- 奥医師保見家累代の記録および四代保見隆敬の肖像写真  
……………前川久太郎…（ 15 ）
- シーボルト事件と土生玄碩將軍家紋服贈与について  
……………福島 義一…（ 30 ）
- ブレンキの『産婆術原理』（蘭訳本）について……………大島蘭三郎…（ 36 ）
- 医家先哲追薦会について……………小川 鼎三…（ 45 ）
- The History of the South Manchuria Medical College of the  
South Manchurian Railway  
……………John Z. Bowers and Akiko Kobayashi Bowers……………（ 1 ）
- 医史学関係論文目録……………（ 53 ）
- 日本医史学雑誌第21巻総目録……………（ 83 ）
- 雑 報……………（ 79 ）
- 

通 卷 第 1402 号

日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷 2-1-1  
順天堂大学医学部医史学研究室内  
振替口座・東京 15250 番  
電話 (813) 3111 内線 544

# クルムスターヘル ・アナトミア



校閱および解説  
東大名誉教授 緒方 雄三  
東大名誉教授 小川 富鼎

蘭学事始で主役を演ずるターヘル・アナトミアは解体新書翻訳の原著で、ドイツ語の原著第二版の蘭訳本である。今年は解体新書出版二〇〇年にあたる。この歴史的な機会を一層意義あるものとするため、われわれの先駆者が使用したのと同一版のターヘル・アナトミアを復刻。別巻として小川・緒方両先生の解説と、解体新書全四巻の縮写版を添付。

付・別巻  
解体新書(縮写版)  
限定五〇〇部  
価二五、〇〇〇円  
送料 四五〇円

# 和蘭景 和蘭景 網提範医 全3巻 網提範医 全1冊

内象銅版図

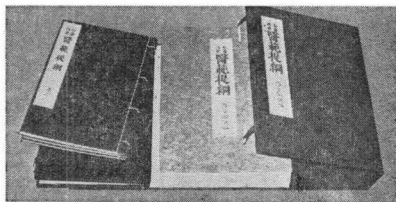
医範提綱本文

土佐楮手漉和紙・精巧オフセツ印刷・濃紺地布貼特製帙入

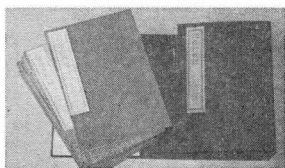
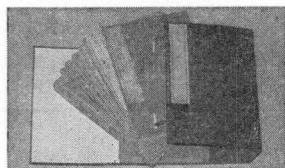
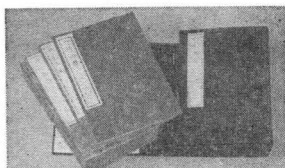
内象銅版図

福井手漉局紙厚紙芯折帖仕立・精巧コロタイプ印刷・濃紺地布貼特製帙入

価額 限定版三〇〇部 三八、〇〇〇円



# 本間玄調 内科秘録 瘍科秘録 続瘍科秘録



全14冊

本文Ⅱ特漉因州楮和紙・コロタイプ印刷・和綴じ 帙函Ⅱ内科秘録 金茶緞子織 瘍科秘録・続瘍科秘録 紫紺紋布装・豪華特製 上質紙張美麗箱入 価額Ⅱ内科秘録 拾七万円 続瘍科秘録 八万円

全12冊

本書は、華岡青洲・シーボルトに師事して出藍の誉れ高い日本外科学の先覚者、稟軒・本間玄調の著作である。当時医師の金科玉条とされ、特に正統瘍科秘録は、華岡流の外科学の奥義の秘法を公開したもので、天下の耳目を聳動させたといわれている。内科秘録は、玄調六十一才の著で、漢方内科に非凡の学識を示し、再度当時の医学界を驚嘆させたものである。

瘍科秘録・内科秘録共に稀覯本として、入手・閲覧が困難で、現在も尚医学教課の資料・参考書としても高く評価され、医学の高度に進歩した今日も依然として光彩を放っている。この巧芸版は用紙・印刷・製本等に現代技術の粋をつくして、原本に忠実に復刻したもので、医学者の研究・教育資料として、また、古典籍愛好家の鑑賞用・保存用として、貴重な文献である。(矢数道明氏蔵)

全5冊

解説

『シヨメール百科』（『厚生新編』）  
『植学啓原』・『植学独語』の関連

矢 部 一 郎

一、はじめに

江戸後期に舶来した『シヨメール百科』蘭語版は、それを読解した蘭学者達の西欧科学受容に直接的に大きい影響を与えたが、さらには、幕府の『厚生新編』への翻訳事業により、その翻訳者達ばかりでなく、その門弟、友人などの周囲の人達にまで間接的に大きな影響を与えたと思われる。<sup>(1)(3)</sup> 宇田川榕菴（一七九八—一八四六）は文化十四（一八一七）年二十歳の折、『シヨメール百科』蘭語版を読み、始めて西欧近代植物学を知った。<sup>(4)</sup> それ以後、彼は西欧植物学の受容紹介に努める事となる。<sup>(5)</sup> さらに、彼は文政九（一八二六）年から、『シヨメール百科』蘭語版の『厚生新編』への翻訳に参加している。<sup>(4)</sup>

本稿の目的の一つは『シヨメール百科』蘭語版の日本への影響の一例として、宇田川榕菴の場合を示すと共に、『植学啓原』（天保四〔一八三三〕年成刻、天保五〔一八三四〕年刊）の参考書の一つが『シヨメール百科』蘭語版であることを明らかにすることである。

榕菴の手書き本『植学独語』は『植学啓原』以前に書かれたものであると推定されている。<sup>(6)(8)</sup> 論者は、『植学独語』が『植学啓原』のための習作本の一つではないかと考えた。今回、両書の本文中の共通対応する記述を採し出し、その説の

証拠の一つとして示すことも本稿の目的の一つである。

## 二、『シヨメール百科』と榕菴の植物学書との関連

『シヨメール百科』蘭語版と榕菴の植物学書との関連を追及するためには、『シヨメール百科』蘭語版の原本そのものを検討せねばならないが、論者には現在その余裕がない。それ故、その第一段階として、『シヨメール百科』蘭語版の翻訳書『厚生新編』<sup>(9)</sup>と榕菴の植物学書の中から、それぞれ共通対応する個所を探して見た。榕菴の植物学書としては、『植学啓原』<sup>(10)</sup>と『植学独語』<sup>(11)</sup>を用いた。

### 1

『厚生新編』第四十九卷（大槻茂楨玄沢・宇田川璞玄真訳校）には、「乾腊花良法」という章がある。

「乾腊花の製法は既に此書の二百十一葉の花の条に集録すと雖も今又花類の生色を失はず乾し貯ふる良法を左に述て好事家の賞翫に備ふ。是即ち「リットル、ローベルト、ソウトーウエル」名人の發明し示す法なり。即ち左の如し。

鋳版二枚を作り長さ八寸、或は一尺許、潤ぬはその長さに応じて適宜にす。厚さは撓よみ勾かることなき程にし其版の四隅に穴を穿ち是に各々螺旋ネジを設け二枚合して是を転振ネジして能く緊固に押着せしむるやうに作るべし。

湿雨なき晴和の日に其乾腊して貯んと欲する花を摘み採り紙に載せ、其弁萼茎等を能く伸のび揃へて折れ縮むことなからしめ、殊に毀損する所なきやうに意を用ふべし。又其茎柄甚だ太きものは押して扁平にすべし。次に其花の上下に紙を覆ひ敷き是を右の鋳版の間に夾み、四隅の螺旋ネジを転振して緊切に押搾し、是を温煖気甚しからざる竈内に入れ置くこと一時許にして取り出し、焼酒と「ステルクウォーター」と等分に合和したる液を筆シに沾しして綿密に其花に塗り、是を綿布の間に夾みて徐々に押して其湿気を尽く除き去り、次に少許の血竭キリシヤクを水に溶し毛の細き筆を以て其花卉に遍く塗るべし。但し

甚だ濃く塗ることなく且つ厚薄なきやうに塗布し、花の上下に清き紙を当て、又右の鍔版に夾み暫くして取出すべし。」

さらに、第五十八卷（宇田川榕菴、宇田川璞玄真訳校）には、「腊葉帖」という章がある。

「左に腊葉帖の造法を略説す。腊葉帖を造るに四個の要件あり、学者須く知るべし。即ち、

第一 採取の時宜、

第二 植物を乾腊する法、

第三 腊草を紙に膠する法、

第四 腊草を腊葉帖に編する順序、

等なり。」

右の引用の如く、この章の内容は腊葉帖作製法を述べたものである。次に、この章の中の腊葉にするための植物の採取法の記述を引用する。

「第一 採取の時宜。凡そ植物は種属に従て花実の時を異にす、故に花時を候て花を連ねて採り、又結実の時に於て其熟実子室を連ねて採るべし。是れ其大意なり、又採取の時刻に於ては大抵晴好の日を択み、日出の後二三時より午後七時、或は七時半に至るべし。雨露等に濡れざるを貴ぶ。濡れたる者を取り乾腊すれば自然への美色褪して乾けば、皆黒色となる故なり。

又、夏月盛暑の候、草葉、木枝も採て堆積沍鬱せしむること勿れ。乾腊して美ならず、故に採葉家筒子の彼此に小孔を鑽開き、其内面に水を濡して此に草花の枝を納め携ふべし。一日、或は其余も萎衰すること無し。」

次いで、この章の「第二 植物を乾腊する法」を引用する。

「植物の小なる者は全苗、大なる者は適意の枝を取りて葉不潔なるは水にて洗淨し、土あるをば其掃ひ去り、漉紙粗厚の紙の上に置いて、花葉を展開し、勉て自然の形状に倣ひ、毎葉の上に鉛の小鎮子を置て是を日光に乾すこと、少時其後鉛の鎮子を徹て、草上に漉紙一帳を覆ひ、哆囉絨ツラヤは紙冊の間に挟み平坦なる卓上に排置し、鎮子を以て圧定すべし。鎮子は初めは軽きを宜しとし、漸く重くすべし。或は圧車シヤにかくべし。如此して日々重紙を去りて日光に曝し乾し、又押し乾し、

又庄す。数次の後全く乾くを候ひ、腊葉帖に膠貼すべし。

別種の草木を同く庄車にかけ、或は鎮定するには其草の間に哆囉絨、或は漉紙数重を置いて鎮定すべし。

草茎木枝、或は花頭の球大なる者は刀を以て半面を截り薄くし、其截処を紙に貼すべし。」

ところで、『植学啓原』卷之二の「花」の章に、腊花の方法の記事がある。

「近世、腊花の法有り。其の法は鉄板兩片を造る。方各々尺許、其の四隅に牡螺各一を穿つ。花を腊さんと欲する者、日中花枝を取り其の枝の粗なる者は刀を用ひ之を削り、薄きこと紙の如くならん、其の大なる者も亦此の如くす。厚紙之を夾み、更に粗紙三十帳を以て上下より之に襯て、之を鉄板の間に夾み、牡釘螺旋定し、軽々と爐上に烘ること一二時。花、乾腊するを候ひ、放開して花を取り、軟毛筆西は駝毫を用ふ。を以て薬水燒酒・消露(せうせき)を塗り、乾きて後、紙冊の間に貯ふ。紅白黄紫、日を経て渝らず、真に奇法なり。」

また、『植学独語』の「西洋には腊葉のみならず腊花もある事」の章で、榕菴は腊花腊葉法を述べている。

「西洋の腊葉もさして異なる事あらず。たゞなるたけ花を添て腊し、刷紙を多く重き物にて鎮庄たるのみにて腊法に仔細なし。又花のみ腊し、久をへて色の変せざる法もあり。腊花の法と称すべし。其法方八寸或は尺許の鉄板二枚を造り四隅に螺釘を施し、扱腊んと思ふ花を日中の露なき時に花輪計摘み、或は茎葉を連て採り、粗き枝は利刀にて両面より刮きて薄くし、ふたつにおりたる厚紙に挟み、其両面より淨紙二三十枚をあてて右の鏡板の間に挟み四隅の螺釘を旋定め、火桶の上にて適宜く炙ること一時計、よく乾きて後腊たる花を燒酒、強水各半の薬汁を駝毛筆にて塗り乾きたる綿布にて薬汁を乾し、又淨白の紙間に貯ふ。如是すれば久しく蔵して天然の美色変する事無し。萼大にして厚き花は萼を去る。其他時に取りての意匠あるべし。」

これらの引用文を比較照合して見ると、『厚生新編』第四十九卷「乾腊花良法」と『植学啓原』卷之二「花」及び『植学独語』の「西洋には腊葉のみならず腊花もある事」にある文章が大変類似共通していることがわかる。この事から、榕菴は『植学啓原』や『植学独語』の腊花腊葉法の記述に、『シヨメール百科』蘭語版の当該記事を参考にしたものと考え

られる。

また、『厚生新編』第五十八巻の「腊葉帖」の記事は「乾腊花良法」とはやや異なった内容であり、より詳しい。だが、『シヨメール百科』蘭語版のこの項についても、前記の『植学啓原』や『植学独語』の記述の内容、例えば、刀で枝をけずる事などの記載から見て、榕菴は、或程度参考にしたのではなからうか。

『植学独語』の「植学及び採葉旅行に有用とする書籍器械の事」の章で、榕菴は、腊葉帖もその一つに挙げている。

「腊葉帖は糊気なき堅紙を綴<sup>ト</sup>て書冊の如くし、薄板を表紙とし腦の処より緒を付て、毎次にかたく縛するやふにすべし。」

さらに、ここで、榕菴は薬鏡と花筒を挙げ、『厚生新編』の「腊葉帖」の「第一 採取の時宜」の末尾の記述に対応する記載をなしている。

「薬鏡花筒は採葉旅行の時、殊に携ふへし。薬鏡は常にも此方にあり。花筒は銅にて竹筒の如く造り、上下を閉鎖し其筒の身三分一許を扉とし開閉自在ならしめ、扉に牝牡針を設く。これに採得たる草木の枝を納るゝなり。よく水を噴灌すれば三四日を経ても萎まず。」

2

『厚生新編』第四十九巻（大槻茂楨玄沢・宇田川璞玄真訳校）の「葉説の二」に、「葉及び実の腊骸を造る法」という項目がある。

「好事の人、葉の腊骸を造り愛玩せり、これを以て全葉の筋脉の条理を明らかに観ることを得るなり。

其法葉の能く成長して菁々たるものを取り桶に入れ水を注ぎ加へ浸すこと数十日にして漸々朽腐するに至る。但し是を浸す間に其水減ずるときは益々加へ其葉常に能く水に浸るやうにすべし。斯の如くして一個月、或は二個月を経るときは

自ら軟柔となり、葉の表膜自ら離れ去るなり。是に於て鉢に温湯を盛り是に葉を入れて洗ふこと半時許に至れば葉の肉尽く脱去して終に其筋脉のみ残りて即ち葉の骸骨となるなり。此術の巧拙あるは専ら其葉の腐り加減に因るものなり。但し葉の性に因て腐るに日数の長短あり、故に各々水に浸し試みて腐敗の度を計るべし。

其葉能く腐りたらば先づ其表膜を徐々に剥ぎ去り次に其肉様の鬆軟のものを除き骸骨と為し、是を紙上に排列し風乾し其後徐々に捫み振ふて鬆軟の質を去り、腊骸のみと為すべし。

此法に由て林檎、梨子、桃李、等の果実も腊骸と為すべし。(後略)  
さて、『植学啓原』卷之一には、「葉の骸骨」なる章が見られる。

「葉は其の表被と巴連パレンを除去すれば、則ち存する所の者は止気脈・液脈のみ。此を骸骨と名づく。物理を好む者、各種の骸骨を造る。其の法は葉の蟲蝕無き者を択んで、枝を連ねて桶水に溼ひたす。数日の後、其の表被と巴連パレンと自ら糜爛めいらんするを候ひて、器に納れ温湯を灌ぎ、筆を以て細心さいじんに之を洗へば、則ち表被と巴連と腐り去りて泥の如く、脈絡独り質を存すること羅網あみの如し。之を紙冊の間に挟み、水気乾浄を俟ち、取りて玻璃板びんぱんの間に貯ふと云ふ。」

この場合、『厚生新編』の翻訳文は玄沢や玄真によるもので、榕菴によるものでないため、『植学啓原』で用いた用語と異なるものが見られる。例えば、榕菴は、表膜を表被、肉を巴連、筋脉を脈絡とし、さらに脈絡(葉脈のこと)のつくりを具体的に気脈・液脈からなるとしている。

しかし、両者の文脈はほぼ類似共通している。また、『植学独語』の「西洋には腊葉のみならず腊花もある事」での末尾にも、葉や実の骸骨の記述がある。

「其他葉或は実の脈絡計りを取り、貯ふるの法あり。これを葉の骸骨、実の骸骨と称す。初学児輩に益あらざるが故に、ここに略す。」



さらに、『厚生新編』第四十七卷（宇田川榕菴・大槻茂植玄沢・宇田川璞玄真訳校）の「卵巢」には、植物の受粉についての文章がある。

「諸草木の花に於ては其雄花、甚だ雌花と遠く離る様子は下に懸垂する雄花を以て雌花と離れて種子を生ぜしむ。楊樹も亦雌雄相離ると雖も雄花を以て雌花に種子を生ぜしむ。又黄楊樹の類は雌雄相隔つこと数里なれども雌花に雄花の蕊粉を受けて実を結ぶこと恠しむに足らず」

ところで、『植学啓原』卷之二の「花精、柱頭に入る」では、

「榛・栗・榲の如き、則ち雌性の莖莢は必ず上枝に在り。雌莢は必ず下枝に在りて、而して其の粉雨を受く。

菠薐菜・大麻の如きは則ち雄木、雌木有り。雄雌は地を異にして能く種子を生ず。或は云ふ、雄木の花精は風に吹かれ、僅に十五里以外に達するのみ。」

という記述がある。

両書の挙げる植物は異なるが、説明している内容は全く同一のものである。

一方、『植学啓原』の記述の最後の所は、伊藤圭介の『泰西本草名疏』附録下（文政十二、一八二九）の「二十四綱解」の文章、

「雄本雌本ノ遠ク隔タルモノニ於テ彼ノ花粉ノ及ブヤ十五里（彼ノ十五里ハ我ニ十二里半余ナリ）外ト雖モ感通シ此ニ達ス。」

と殆んど同一であり、彼等が参考にしたものの共通性を思わせる。

以上僅か三例であるが、『厚生新編』と榕菴の植物学書『植学啓原』・『植学独語』との間で類似共通する個所を挙げて見た。比較照合した結果、腊花腊葉法と葉や実の腊骸（葉や実の骸骨）については、両者の類似共通性が非常に強く、

榕菴が『シヨメール百科』蘭語版も参考にした事が推測される。受粉のしくみについても、その可能性が大いにうかがえる。

### 三、『植学啓原』と『植学独語』との関連

『植学啓原』と『植学独語』の記述の中からも、お互いに、非常に類似し、共通対応する個所を見出すことが出来る。

#### 1

『植学啓原』巻之一の『属種』の章の中には、分類検索法の記事がある。

「万類を記載するは、すべからく属を分ち種を分つべし。これを一卒を大軍中に索るに譬ふ。ただし其人年庚幾十、何色の冑を被り、其面貌某生に肖たりと言ふは則獲易すからず。某人、大将某君の旗下第幾隊にありと言ふが如し。しかして後、年紀・冑色・面貌を挙て、しかして之を物色れば、則ち索め易し。第幾隊と言ふは、即ち種属を分かつなり。」

一方、『植学独語』の「物の形状を記するは徒に詳密ならんよりは、ただ其徴を記するを宗とすへき事」の章の中に、『植学啓原』の記述と非常に類似している記述がある。

「三者の形状を記する。猶肖人書を記するか如し、其要する処は物色し安からしむるに在り。最丁寧詳密を宗とす。然れとも先ッその要とする徴を挙て大経を建て、経中更に若干の緯を設け緯中数多の本類を分ち、本類中又幾多の分類を別ち、而して後其形状を詳にせざれば其詳密の形状転して、却て疑惑の媒となる。これを大軍衆の中にて一歩卒を索るにたとふ。肖人書を以て其人年齢幾何。鼻高く眼小く口大に色黒くなどいかに詳に記すとも俄に其人を得ず。又相似て非なる人ありて是非決し難けん。若先ッ其大経を挙て其兵卒は大将某の旗下に属すといひ、次に緯を挙て第幾位に居るといひさて年齢は幾何容貌は然くといひ、容易に其人を索めつべく且ッ決し難きのうれへなし。其如く三有は先ッ其確徴を挙て大

経を建、而後に形状を詳にすべし。大経を加刺撰といひ、緯を阿別垵といひ、本類を「ゲストラクト」といひ、分類を「ソールト」といふ。此次第なければ、たとひ幸にして其物を的識する事あるも所謂偶中なり。」

『植学啓原』では、綱・目・属・種という分類段階名を統一して用いているが、『植学独語』では、大経Ⅱ綱Ⅱ加刺撰、緯Ⅱ目Ⅱ阿別垵、本類Ⅱ族Ⅱ属Ⅱゲストラクト、分類Ⅱ種Ⅱソールトとし、属という用語を単独で用いていないが、内容は全く同一のものである。

2

榕菴は、『植学啓原』の「属種」の章に於て、属名と種名の解説として、

「既に綱を建て目を分てり。今、又更に属と種とを分つ。喩へば第五綱第二目の草は其の萼五弁あり。五稜蓋状にして花卉無く、一種子を結ぶときは之を撰諾剝セノボ刺ボ刺ザウム母ボ、灰菴、土荆芥の属と謂ふ。撰諾剝は属名なり。撰諾剝に白有り、臭有り。白き者を藜あかざと為し、臭き者を土荆芥るうだそちうと為す。白と曰ひ、臭と曰ふは其の種名ソールトナームなり。属名は公称そうみせうの如く、種名は私号こなの如し。」

と述べているのに対し、『植学独語』の「本類の事」では、

「本類とは一ニ族と訳す。初に大経を建、次に緯を設け、而して後是を建るなり、苗字といふもののごとし。此本類の分ち方古今の異同あれとも林娜斯の説に従て心蕊、鬚蕊、花卉、萼、実実に抱るを宜とす。たとへば索刺肉謨の族は其徴花五弁五鬚蕊一心蕊あり。其葯合生して一体をなし頂に二孔あり。実軟、実内有数核と云が如し。蜀羊泉、白英、竜葵、竜珠、馬鈴薯、紫茄、珊瑚茄等は皆右の徴あるゆへに索刺肉謨の一種とすへし。此索刺肉謨といふ如き族名を公称といふ。和蘭に所謂「ゲストラクトナーム」是なり。」

とし、さらに「分類の事」に於ては、

「分類とは一に種と訳す。本類中にて更に細別するものにて名の如きものなり。これは前の本類と異りて花実にて抛て徴を取らず、葉の形状対互、鋸齒の有無、花の色、茎の方円、根の状態、花実の色等によりて徴を索む故に葉の形状、花の色等を分類の徴といふ。和蘭に所謂「ソールトテーケネン」なり。前の索刺肉謨の内にて根に芋状の塊あるにて馬鈴薯の徴とし、実黄色なるにて黄茄の徴とするか如し。或は竜葵といひ、竜珠といひ、紫茄といひ、黄加といふ皆私号なり。和蘭に「ソールトナーム」といふ。」

と述べ、「公称私号の事」に於て、次の様に、さらに詳細に解説している。

「公称は広き名にて名ありて其物なし。苗字の如きものなり。たとへば、ただ佐々木棍原などいふ人なきともし。ただ索刺肉謨とのみいへば前の八種の内いづれが是なる事しるべからず。私号を添へて索刺肉謨、需兒加麻刺といへば蜀羊線なる事を知り、索刺肉謨、去別羅須謨チムベロシムタといへば馬鈴薯とするなり。然れども書典には公称のみ記して索刺肉謨とあり。私号は無けれどもよく其物を知る。これは其書医方のことを記する書なれば竜葵と定め、食次冊シヨクジなれば馬鈴薯と茄なるかとし。宇治川の事を記する書にたゞ佐々木とのみ公称すれども、往昔其川を先登せし佐々木の事と心得るがごとし。何れも推量の沙汰なり。欧羅巴にてむかしよりかくは慣し来れとも往々誤解するの弊あるを以て近晩の書には公私リンナと書せり。「リンナ」とは林娜斯の定められし名といふの略なり。」

以上、属名と種名が公称と私号にあたるという説明が両書に於て共通類似性を示すことを中心に紹介した。

3

ところで、既に本稿の「二章」で紹介した様に、『植学啓原』卷之二の「花」における腊花の方法と『植学独語』の「西洋には腊葉のみならず腊花もある事」の章の腊花腊葉法の記事は、『厚生新編』の記事と類似共通しているが、それのみならず、『植学啓原』と『植学独語』の間でも、ほぼ対応共通していることがわかる。

さらに、『植学啓原』巻之一の「葉の骸骨」の章の記述と、『植学独語』の「西洋には腊葉のみならず腊花もある事」の末尾の葉や実の骸骨についての記述も、既に本稿「二章」で示した。『植学独語』では詳述を避けてはいるが、脈絡(脇)、葉の骸骨、実の骸骨の語は共通している。

#### 四、おわりに

##### 1

『シヨメール百科』蘭語版は、江戸後期にかなりの数が輸入されており、公私ともに、需要が大きかったと言われている。<sup>(1)</sup> 例えば、博物学者飯沼慾齋の蔵書にも見られる。<sup>(2)</sup> また、『シヨメール百科』蘭語版は、榕菴の父宇田川榛齋<sup>(3)</sup> 定、宇田川榕菴校集『和蘭薬鏡』、同『新訂増補和蘭薬鏡』、さらには、宇田川榛齋著、宇田川榕菴校補『遠西医方名物考』、同補遺、そして『舍密開宗』の引用書である。<sup>(3)</sup>

榕菴の手書き本『動学啓原』(天保六、一八三五)は、榕菴が『シヨメール百科』蘭語版の『厚生新編』への翻訳中に、関係項目を拾って行ったことにより出来たものであり、その内容は『厚生新編』の第三十九卷(宇田川璞玄真・大槻茂楨支沢・宇田川榕菴訳校)の「虫属の説」及び「林娜斯の学則」などの記事と対応している。<sup>(13)</sup>

『植学独語』の「本邦に舶来ありて植学に益ある書籍」の中には、

- 一 肖墨盧<sup>シヨメール</sup> 二 千七百四十三年
- 一 同後集 七
- 一 同続集 九

とあり、二冊本、七冊本、九冊本の三種の『シヨメール百科』蘭語版が見える。<sup>(14)</sup> さらに、本稿「二章」に於ける検討からも、『植学独語』執筆に際して、『シヨメール百科』蘭語版が参考書の一つに用いられていることが判明した。

また、『植学啓原』は、榕菴がその参考書をはっきりと明示していない所から、その参考書は今まで推測の域を出なかつたが、論者は近年、巻末にある「植学啓原図」をたよりに、その参考書の幾つかを示すことが出来た。<sup>(15, 18)</sup>さらに今回、本稿「二章」における『厚生新編』の記事との照合検討から、『シヨメール百科』蘭語版も参考書の一つに数える事が出来た。

そして、『シヨメール百科』蘭語版の江戸後期における蘭学（西欧科学技術の受容）に対する大きな影響を示す具体例の研究が少ない現状にあたり、菅野の銅版画技術における事例<sup>(16)</sup>に加えて、ここに、宇田川榕菴の生物学における事例を示した。

2

『植学独語』の執筆年次は、現在具体的には、はっきりしていない。先に、論者は、大ざっぱに、シーボルト来日以後で、『植学啓原』刊行以前であろうと推測した。<sup>(6)</sup>杉本は、本文中の「文政九年の春西医シーボルト等入貢」の記事などから、文政十（一八二七）年頃と推定している。<sup>(8)</sup>論者が『植学啓原』刊行以前に執筆されたものであるとした理由の一つは、『植学独語』の内容や用語が『植学啓原』に比べて、未整理で未成熟であるということであった。

執筆年次の具体的な証拠は挙げる事が出来ないが、両書の内容や用語の類似共通性から考えて、『植学独語』は『植学啓原』執筆のための習作本の一つとも言えるのではないかと思われる。

この疑問の解決のために、今回、『植学啓原』と『植学独語』の内容で、お互いに共通対応する箇所を探した。その結果、本稿「三章」に見られる様に、直接的な具体例は多いと言えないが、該当する記事を幾つか見出す事が出来た。そして、その共通対応する記述の中の用語の共通性、例えば心蕊、鬚蕊などを示すとともに、『植学独語』に比べて、『植学啓原』の中の用語の成熟さ、例えば、現在も使用されている分類段階名の門・綱・目・属・種の確定などと、内容の整然

さを示すことが出来た。

(本稿の一部は昭和四八年第二十回日本科学史学会年会、<sup>(2)</sup>昭和四九年十一月生物学史分科会例会、<sup>(18)</sup>昭和五十年第二二回日本科学史学会年会<sup>(19)</sup>で発表したものである)

注

- (1) 矢部一郎 江戸時代における西欧遺伝学の受容と紹介、日本医史学雑誌、第二十卷第二号、一二五～一三三頁、一九七四。
- (2) 矢部一郎 江戸生物学史に於ける『厚生新編』と『ショメール百科』の役割、第20回日本科学史学会年会予稿集、四～五頁、一九七三。
- (3) 向井 晃 ショメールの伝来とその影響、蘭学資料研究会研究報告、第一六〇号、一～三頁、一九六四。
- (4) 岡村千曳 『紅毛文化史話』、創元社、二七二～二七八頁、一九五三。
- (5) 矢部一郎 宇田川榕菴と植物分類、法政大学教養部紀要、第20号、一二九～一四九頁、一九七四。
- (6) 矢部一郎 宇田川榕菴の植学独語、蘭学資料研究会研究報告、第二五三号、一～九頁、一九七一。
- (7) 矢部一郎 植学独語から見た宇田川榕菴、日本医史学雑誌、第十八卷第四号、二七五～二八一頁、一九七二。
- (8) 杉本つとむ 『植学独語』の解説、植物と文化、第十号、一〇四～一〇七頁、一九七四。
- (9) 引用は厚生新編刊行会刊行活字本(一九三七)による。
- (10) 引用は日本科学古典全書、第八卷、朝日新聞社(一九四八)による。
- (11) 引用は国立国会図書館白井文庫及び伊藤文庫本による。
- (12) 『慶応元乙丑平林荘所蔵諸品目録』
- (13) 上野益三 宇田川榕菴の「動学啓原稿」、科学史研究、八号、二二八～一三六頁、一九四四。
- (14) 上野益三 「宇田川榕菴の動物学」、『明治前生物学史』第一卷、三六三～三七七頁、一九六〇。
- (15) 『ショメール百科』蘭語版については、菅野陽『ショメール』オランダ語版、有坂隆道編『日本洋学史研究Ⅲ』、創元社、七一～一二二頁、(一九七四)を参照。
- (15) 矢部一郎 宇田川榕菴の『植学啓原』の原因について、科学史研究、一〇八号、二一九～二三三頁、一九七三。

矢部一部 宇田川榕菴の『植学啓原』の原図について(2)、科学史研究に投稿中。

(16) 菅野 陽 『日本銅版画の研究、近世』、美術出版社、一九七四。

(17) 引用は国立国会図書館伊藤文庫本による。

(18) 矢部一郎 江戸生物学史雑話Ⅱ、生物学史研究、二七号、四四～四五頁、一九七五。

(19) 矢部一郎 『植物啓原』『植学独語』『厚生新編』(シヨメール百科)の関連について、第22回日本科学史学会年会予稿集、八  
～九頁、一九七五。



## 奥医師保見家累代の記録

### および四代保見隆敬の肖像写真

前 川 久 太 郎

自蔵の資料の中に、「保見家先祖書」と題する幕府奥医師初代保見玄泰より四代保見隆敬に至る経歴を記したものを見出したので、若干の考察を加えつつ紹介したい。半紙二ツ折四枚綴じのものながら、随所に細字の朱筆を以て書込みがあり、かつ、四代隆敬（慶応二年没）の写真が副えられており、奥医師の相続、任免、転属、賞罰などを知るとともに、巷間伝えられるところのこれら諸制度の考証資料ともなれば幸である。

筆を執った者は四代隆敬であると思われる。理由は四代隆敬の項に「私儀云々」とあるからであり、朱の書込みも同一筆跡である。系譜として浄書する前の段階のものか、あるいは、しかるべきものの提出を必要としたときの草稿のたぐいと見られる。ただし、表紙裏に写真を貼付したものは、その裏面に楷書の別の筆跡を以て隆敬の俗名、法名、卒年等を書いてあるところから見て、隆敬の嗣子か何らかの縁者と考えられる。以下、はじめに墨書きの部分をついで朱書きの部分を転載し、終りに著者の考察を加えた。文中、（朱〇〇）とあるのはその朱筆書込みの位置を示したつもりであり、（註〇〇）としたものはその考察を加えた箇所を示す。

保見家先祖書

高四拾石拾人扶持(朱一)

内元高四拾石(朱三)

初代

保見玄泰

宝歴九己卯年十二月清水江新規召出(註一)

奥御医師被仰付高現米四拾石拾人扶持被下(註三)

安永七戊戌年一月廿九日跡式奉願置病死(註二)

仕候

二代

保見玄泰

安永七戊戌年五月十一日於表御三之間初

御目見被仰付(註五) 同年同月十七日從部屋住

被召出奥詰御医師被仰付勤候内御扶持分

拾人扶持被下置(朱六) 同年八月廿三日父跡式無相違(註七)

被下置(朱八) 寛政五癸丑年御納戸(註八) 弘之節時服(註九)

御紋服拜領仕 同七乙卯年七月八日

中納言様被遊御逝去候ニ付同年八月廿九日(註九)

御本丸江被召抱清水ニ而取成元高之通御宛

(宋十一)行被下置(註10) 小普請入被仰付御目見以下可為

(宋十三)格上下席之旨於清水表御書院御目付失部彦(註12)

五郎出席柘植長門守殿被仰渡 文化二乙

丑年十二月二日

貞章院(註11)樣御醫師見習被仰付(宋十四) 同八年未年(註15)

七月十六日

菊千代樣御診居殘骨折候ニ付為御手当年々(註12)

金拾兩被下置(宋十六) 同十一甲戌年十一月廿一日(宋十七)

貞章院(註13)樣御醫師被仰付(宋十八) 文政三庚辰年

十二月二日

式部(註14)正樣奧醫師被仰付(宋十九) 御宛行之儀ハ是

迄之通被下置 同七甲申年十一月廿四日跡式奉

願置病死仕候

### 三代

保見玄知

文政七甲申年六月十日從部屋住被召出奧詰

御醫師見習被仰付御扶持分七人扶持被下置(宋二十)

同八乙酉年正月廿二日父跡式無相違被下置奧

(宋三)詰御醫師被仰付(宋二十一) 同丁亥年六月十日

式部正樣被遊御逝去候ニ付同月十一日清水附

被仰付 同年十月十五日

恒之亟樣江被為附 天保八丁酉年跡式奉願置

十一月二日病死仕候

四代

保見隆敬

天保八丁酉年九月養父玄知儀男子無御座候付

私儀統者無御座候得共養子仕度段奉願候処

(宋三四) 同年九月六日願之通被仰付 同年十二月廿五日

(宋三五) 養父跡式高四拾石被下置小普請入被仰付 同十二

辛丑年九月十七日奥詰御醫師被仰付 同十三壬

寅年十一月十三日奥御醫師並勤方被仰付

(宋三〇) 弘化二乙巳年四月廿五日御鍼科兼心得被仰付

(宋三三) 同年五月十二日奥御醫師被仰付勤候内五人扶持

(宋三四) 御足扶持被下置 同三丙午年正月妊婦取扱

御誕生樣御七手□被仰付 同年壬五月八日

清水附被仰付 同年六月当分之内紀州

御屋形江御借人被仰付御宛行之儀者是迄

之通清水渡被御心得候樣阿部伊勢守殿被仰渡

同月紀州御屋形ヨリ銀□枚ツ、年々被下置候旨

御同所御用人衆申渡 同四丁未年十一月

紀州家江借人被仰付候以後出情相勤

恭真院様御診度々罷出候ニ付御足扶持五人

扶持被下置 嘉永二己酉年

紀伊大納言様被遊御逝去候ニ付同年十一月

廿五日先々之通可相勤旨於御用部屋人見

縫殿介殿被仰渡候

(朱一) 家之紋 左三ツ巴  
釘 抜

(朱二) 本国伊勢  
生国武蔵

(朱三) "内元高四拾石"との墨書きを抹消

(朱四) 。 旨 永井主膳正殿被仰渡

(朱五) 旨 本多讚岐守殿被仰渡

(朱六) 旨 本目権右衛門殿被仰渡

(朱七) 旨 柘植長門守支配

(朱八) 。

(朱九) 。

(朱十) 。

(朱十一) 。



- (朱十二) ○
- (朱十三) 松平伊豆守殿被仰渡
- (朱十四) 附
- (朱十五) 旨 井伊兵部少輔殿被仰渡候段小野安芸守殿被仰渡
- (朱十六) 宛
- (朱十七) 旨 牧野備前守殿被仰渡候段泉本正助殿被仰渡候
- (朱十八) 旨 小野安芸守殿被仰渡
- (朱十九) 旨 白須甲斐守殿被仰渡
- (朱二十) 旨 花村但馬守殿被仰渡
- (朱二一) 旨。
- (朱二二) ○ 荒川土佐守殿被仰渡
- (朱二三) 旨。
- (朱二四) ○ 於奥御鎗之間御家老衆列座御用人衆侍座三上筑前守殿被仰渡
- (朱二五) 旨 於桜之間御家老衆列座御用人衆侍座本多佐渡守殿被仰渡
- (朱二六) ○
- (朱二七) 小普請組杉浦○支配
- (朱二八) 旨 於桐之間御家老衆列座御用人衆侍座荒川豊前守殿被仰渡 同年十一月廿日御納戸扨之節時服御紋服拜領仕
- (朱二九) 旨。
- (朱三十) ○ 於奥御鎗之間御家老衆列座御用人衆侍座荒川豊前守殿被仰渡
- (朱三一) 於御鎗之間御用人人見縫殿介殿被仰渡
- (朱三二) 旨。
- (朱三三) 於御鎗之間御家老衆御列座御用人衆侍座曲淵甲斐守殿被仰渡
- (朱三四) 同年十二月廿一日御紋付御羽織御納戸扨之節拜領仕

(註1) 初代保見玄泰は宝暦九年十二月に清水徳川家へ新規召抱えになっている。清水家はいわゆる御三脚の一であり、將軍吉宗が継嗣の絶えることをおそれ、嗣子家重(九代將軍)の弟の宗武と宗尹を城中に置いて所謂田安家と一橋家とし、家重またこれに倣つてその次男嗣子十代將軍家治の弟重好に同格の清水家を立てさせた。それぞれ十万石格であるが藩をつくらず蔵米十萬俵を給せられるもので、いわば部屋住である。俗に田安家、一橋家、清水家と称せられているが、御三家と同じくあくまで徳川姓を名乗るものであり、それぞれの通称は江戸城の田安門、一橋門、清水門内に邸を構えていたからにすぎず、ここで敬称を用いず単に「清水」に召出さるゝとしてゐることは敢て異とするに足りない。幕府内部では通常斯様な名称で呼ばれていたものであろう。ちなみに、この玄泰召抱えの宝暦九年はその九月二十七日に清水初代の重好が元服し従三位左中將に任ぜられ、正式に徳川宮内卿重好と称せられた年であり、また元泰が任についた十二月は清水邸が落慶し重好が本丸から新屋形(清水屋敷)に移つた月である。玄泰は清水家の創家と同時に奥醫師として召抱えられたこととなる。医師に関する限り、各藩の藩医や市中の名のあるものが召出されることは決して珍らしいことではない。なお、少くともこれ以前の武鑑には保見姓のものを見ない。

(註2) 召抱えと扶持に関する沙汰は(朱五)に永井主膳正なる者より申渡されている。この宝暦九年の少し後の明和四年版武鑑では、永井主膳正武氏と吉川式部少輔從弼が清水徳川家の御附衆、すなわち家老として記されている。清水家創立のこの宝暦九年にもおそらくはその職にあつたものであろう。三脚の家老は各原則として二名、二、三千石級の旗本がこれに任ぜられ、御役料二千俵がつくことになつてゐた。布衣で枯槁の間席である。

(註3) 四十石の蔵米は百俵に当り、もし蔵米取りでなく知行取りならば四公六氏として百石取りに当る。奥醫師は御番料(御役料)がつくのが普通であり、以後の記載から見て十人扶持は御番料相当のものによる。一人扶持は一日玄米五合が原則。とすると十人扶持は四十五俵に当り、結局合せて百四十五俵ということになる。これは本丸勤めの法印、法眼医師の二百俵と番料二百俵の計四百俵はともかくとしても、一般奥醫師や小石川養生所のものに比べてもかなり低く、同じく奥醫師と呼ばれながらも御三脚附のものが低い処遇に終つてゐたことを意味する。勿論、後に述べるごとく支配系統もまったく異なるのである。武家ならば、さしづめ「百俵六人泣暮し」といわれた小十人組あたり、一般には旗本の下、御家人格であらうか。

(註4) 新燕石十種第五所取の村山撰津守の「大奥秘記」によると、医者はたとえ功があつてもその身一代の名誉とし、家禄は加増しないのが幕府の基本方針で、家康の、医師の子弟の技術を低下させないため遣訓だといふ。それだけに奥醫師



の跡式相続にはいろいろと問題のあったことが想像出来る。原則的に奥医師は世襲でなく一代限りのものであり、この点、法印、法眼医師と同格の、奥絵師の狩野四家、土佐二家とともに世襲であったのとは大きな違いである。初代玄泰のみならず、二代玄泰も、三代玄知も、いずれもが「跡式願イ奉り置キ」死亡したことになっている。大名でさえも、継嗣の御目見えが済まぬうちに当主が死亡すると家督相続はきわめてむづかしいものになり、いろいろな逸話も伝えられているが、本資料のごとく、奥医師が先祖書を作り、またこれをいずれかへ提出すると、この跡式願の有無は逸すべからざる事項であったことであろう。

(註5) 御目見医師なる言葉があり、新規採用の者を意味するが、ここでは初御目見とあるので清水家当主へ始めて拝顔が許されたという程度に解すべきであろう。勿論、この御目見は家格の御目見格を意味するものではない。また表三の間が、本丸の表三の間なのか、あるいは清水邸に同名の間があったのか不明。以下随所に御鎗の間、桜の間、桐の間など任免、昇任などの申渡しにその部屋の名が記されているが、そのいずれもが本丸に実在したものであり、たとえ清水家家老や用人からの申渡しであっても、斯様な場合は本丸において行われた可能性がある。また、武鑑などによると、清水家の各種役職名がほとんど幕府のそれを小規模にしたかたちでそのまま用いられているので、あるいは清水邸内の部屋の名称も、本丸の表、奥のそれに倣って名付けられていたとも見られる。

(註6) 部屋住みから奥詰医師に任じ、先代同様の扶持の行われることを申渡した本多讃岐守は本多讃岐守昌忠であり、この時期の清水家家老である。

(註7) 亡父初代玄泰の跡式相違なく下しおかる旨の申渡しは本目権右衛門からであるが、この少し後の寛政二年武鑑では清氏家御用人であり、家老に次ぐ地位で、家格から見てこの時期にもその職にあったと見られる。

(註8) 小野子肅(清)の「徳川制度史料」(大正十五年刊)や明治の「旧事語問録」中の旧幕御小姓頭取坪内定益や御小姓御目付の松浦信寔の談によると、御三家はじめ諸大名が端午、重陽、歳暮に献じた葵紋付の時服は、納戸払いと称して折につけ幕臣に下賜されることになる。時服を賜わるとは履歴にのこすべき名著であり、後にも四代隆敬の項にその記述がある。時服は仮仕立てになっており、別に袋入りの真綿五百目が添えられているので、これを親類縁者に頒つて喜びとしたものだという。

(註9) 「中納言様御逝去」とあるが、清水家初代の重好である。「徳川諸家系譜」などによると「嗣子依<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>之御賄料被<sub>二</sub>召返<sub>一</sub>」とある。これに伴って玄泰は本丸に召抱えられることになり、清水家での元高四十石だけが保証されている。柘

植長門守支配とあるが、柘植正寔は清水家時代は家老職ながら、主人死亡の後は本丸でどの様な職にあって保見支泰らの支配をしたのであろうか。ちなみに、後年にも清水家当主の欠けた時代があり、その時には「清水小普請組」なるものを構成し、小普請支配の下に小普請組頭がおかれて、本丸の小普請とは別の組織になっている。

(註10) 結局、支泰らも小普請入りとなる。出仕に及ばずであり、その代り元高だけとなって御番料を失う。

この申渡しは、直接ではないが、この前後二十年あまりの老中であつた松平伊豆守信明からであり、幕府目付の失部彦五郎なるものの出席のもとに先述の清水家附家老の柘植長門守正寔より受けている。幕府の小普請組ならば、当然老中ではなく若年寄の支配であるはずであるが、江戸城中とはいへ清水家を一つの大名として見るために、この小さな人事も老中から出ることになるのであろう。当然といへば当然ながら、老中系と若年寄系に劃然と二大別された幕府の命令系統がうかがわれ、面白いところである。

(註11) 小普請入り十年、文化二年に再び貞章院様御医師見習として出仕することになった。貞章院とは清水徳川家の初代故重好の正室すなわち御簾中であつた人で、伏見一品兵部卿貞建親王の姫宮から重好に嫁したが、重好没後落飾して貞章院と称して城中にいた。死亡は文政三年であり、ずつと後年のこととなる。

問題は、この指示が若年寄の井伊兵部少輔から清水家家老の小野安芸守近義を経て伝えられていることである。しかし、武鑑では貞章院は清水家とは離れて独自の存在となっており、また、御台様、御簾中様、姫宮様方はいずれも若年寄の職掌の中に含まれている。若年寄から申付があるべきであつたのだろう。

(註12) 菊千代様に尽くした功で年々十兩を戴くことになつたとあるが、菊千代は清水家三代の斉順卿の幼名で、後、清水家を出て紀伊徳川家を継いで紀伊大納言と称せられた人。清水徳川家の二代は將軍家斉の四男敦之助が継ぐことになるが、三才で病没し、ついで同じく家斉の第十五子第六男の菊千代が入る。享和元年の生れで、文化二年から清水屋形住いになつていたので、先の二代支泰が同じ文化二年に小普請を解かれ再度出仕することになつたことと関連するものと思われる。なお、牧野備前守忠精は時の老中、泉本正助は貞章院様御附御用人として記録されている。

(註13) 貞章院付の見習医師から奥医師への昇格である。小野安芸守源近義は清水家家老である。

(註14) 式部正様付の奥医師とする旨を清水家老白須甲斐守政雅より受けているが、式部正は文政十三年紀伊大納言治宝の婿養子として紀州入りをした清水三代斉順の弟、つまり將軍家斉の第二十七子第十男、幼名保之丞、元服して従三位左中将兼式部卿齊明と呼ばれた人物である。文化十三年兄の斉順の紀州転出直後に清水家に第四代として入るが、文政六年、か

ねて婚約中の伏見貞敬親主の教官姫と結婚し、文政十年には早くも病没している。御簾中は後述の恭真院となられた。保見家の方でもこの間に二代玄泰が死亡し、三代玄知が部屋住から召出されて奥詰医師見習となっている。父玄泰の跡式承認は清水家家老荒川土佐守義行の申渡し。

(註15) 次に名が出る清水家五代は恒之亟である。これまた家斉の子息で実には四十七子二十男、東京大学の赤門とともに記憶される前田斉泰に嫁した溶姫の少し下の弟に当り、天保四年元服後、中将兼宮内卿となり斉彊(強)と称することになった。後、清水を出、兄斉順のあとを継いで紀州徳川家の主となるが、これで清水と紀州の両徳川家の関係はさらに密接なものとなったはずである。

(註16) 一方、医師保見家の方でも、三代玄知に男子がなく、四代隆敬は養子あるいは婿養子として後を継ぐことになる。もちろん、この願は、少くともかたちの上では、玄知が生前に願出たことになっている。すなわち、玄知の死亡は天保八年十一月二日であり、養子承認は同年九月六日とある。ここで始めて「私儀」なる言葉が使われており、この先祖書の手製者が四代隆敬であることを思わせるが、それだけに、以後の相続・任免等の記述はその申渡しを受けた部屋の名まで記されていて詳細なものとなる。まず、三上筑前守(役職不詳)より養子相続の承認の申渡しを受け、ついで清水家家老の本多佐渡守正牧より小普請入りの言渡しを受けるが、天保十二年になって初めて清水家家老荒川豊前守賢練より奥詰医師に、翌十三年暮に同じく荒川豊前守からやつと奥医師並への昇任を伝えられている。

(註17) 保見家四代が、今日様というならば果して何科の医者であったのか。これは各代の履歴を通じて全く判らない点である。

本丸勤めの医師については、詳細な武鑑ならばこれを明示していることが多い。奥、表とその勤務場所の区分、奥詰医師、寄合医師、御目見医師などの職階とともに、外科、内科、鍼科、眼科、時に足科、女科などの職種も見られる。もちろん専門科目の特に明記されていないのは本道(内科)であろう。

御三卿付については同じ奥医師でもこの専門科目が記されていない。しかし四代隆敬の項に至ってここにはじめて、弘化二年に「御鍼科兼心得」を命ぜられたこと、翌弘化三年に「妊婦取扱」を仰付けられたこと、の二つの記載に会う。鍼科はあくまで兼務であり、また妊婦云々から直ちに女科または児科担当とも断じかねる。なぜなら、過去に特に主筋の人達の診療に当たった際にはこれが明記されていたことがあり、その対象は幼主あり老御康中でありかつたはずである。四代ともに本道医であったと考えるのが至当であろう。なお弘化二年四月の御鍼科兼心得は清水家用人人見縫殿介より、同年五月の御医

師への昇任の際の曲淵甲斐守景山は清水家家老（別掲嘉永三年版武鑑写参照）である。

〔註18〕 「御七手口」についてである。脱字部分は虫喰いで判然としない。七は匙であり、御匙頭という言葉が主治医師のような意味で使われていることがある。この場合も一つの名譽の履歴として記されているところから、何かこれらを意味するものであろう。

〔註19〕 ここで再び興味ある記録に出会う。「御借人」である。清水家附とはいえ江戸城内勤め、老中支配、清水家家老支配の下にある隆敬が、老中阿部伊勢守正弘からの申渡しで、城を出て一門とはいえ紀州徳川家に借りられたかたちとして勤務することになるのである。しかも給米は清水家渡しとある。弘化二年から嘉永二年までの四、五年間ではあるが、極めて異例のことと思われる。

しかし、これも清水徳川家と紀州徳川家の積年の関係をおもうと、ある程度納得が出来る。時の紀伊大納言はかつての清水第三代の斉順と第五代斉彊の兄弟であり、菊千代、恒之亟時代から保見家は側近く仕えて来たはずである。斉順の死亡と斉彊の襲封は弘化三年閏五月八日であり、御借人医師隆敬は短期間ながらこの二代に仕え、しかも紀州家ではこの二人の相次ぐ逝去がこの間にあった。後に記されている如く、嘉永二年三月の斉彊の死亡と共にこの御借人から再び清水家に戻っている。

〔註20〕 清水より紀州家への出向の時期に、恭真院への累年の出情（情はこの場合精に同じ）の勤務に対する褒賞として足し扶持、五人扶持を受けるのであるが、恭真院とは、かつての清水家第四代斉明の御簾中（正室）であった人である。これについては〔註14〕の斉明の項において多少触れた。

終りに、清水徳川家の奥医師について総括的に見てみたい。

御三卿附には、同じ江戸城中とはいえ、法印、法眼のごとき高位の者が召抱えられることはなく、また一般の奥医師に比べても給米、役料ともに低かったようである。少なくとも武鑑で見る限りそうである。しかし、本丸の表および奥に出仕するものと画然とした区別、差別があったわけでもなく、本記録に見るように、本丸への勤め替え、またそれに伴って老中支配から若年寄支配への移動もあった。

相続、任免、賞罰の権はすべて武家の手にあり、同役または上司の医師の名はまったく現われない。奥医師、奥詰医

師、奥医師並、醫師見習など、職階を示すものもしばしば現われるが、実務上の上下関係が存在したかどうかとも疑わしい。

医師は一代限りを原則とされながらも、結果的には半ば世襲が認められていたことも、本資料の示すところである。時代々の武鑑や役人附けなどで清水徳川家の医師の名を拾って見ても、かなりの数の同姓の世襲らしい者を認める。

清水附の医師の数については、結論的に言うならば初期より後期にかなりその人数が増えている。清水徳川家が一応十万石とされながらも、その実知行地を持たず御蔵米十万俵を受けるといふ変則的なものであり、しかも初代重好以来七代のすべてが実子相続ではなく、二―五代がいずれも家斉の子、次の六、七代は水戸徳川家から迎えられた昭武と甥に当る篤守という具合で、しかも当主不在の時代もあって盛衰がはなはだしい。しかし、この奥医師数の漸増は比較的家督が安定していた同格の一橋家、田安家にも共通して見られるところである。ちなみに、宝暦九年の創家以来、明和四年五名、安永二年八名、文政六年四名、天保四年十八名、天保十四年十六名、弘化四年十六名、嘉永三年十五名、以下嘉永、安政、万延、文久、元治の幕末は十名乃至十五名の間で終始している。一方清水家は終始十萬石格であり、十萬石格の大名に課せられた軍役令の定むる数の家臣団を抱えていたはずである。すなわち、患者数が増えるはずもないにもかかわらず医師数を増員していることになる。何を意味するのであろうか。

なお、この記録は嘉永二年、隆敬が御借人の紀州徳川家から元の清水徳川家に戻るところで終っている。これ以後隆敬の没年の慶応二年までの十七年間にについては、詳細は不明ながら、武鑑等に見るかぎり常に清水家の十人余の奥医師の中に名を連らねている。清水家の創始と共に召抱えられ、四代、幕末まで常に清水家と共にあったといえるであろう。

蛇足ながら、天保四年武鑑に清水家附奥医師として保見玄疇の名を見る。本篇に紹介した先祖書では、この年は三代の保見玄知が清水家にあつたはずにもかかわらず、武鑑にその名はない。武鑑作製時の誤りか、あるいは玄知が玄疇と称していた時期があつたと見るべきであらう。



卒年六十二

法諡

義法院殿隆敬日養居士

慶応二寅丙年八月廿三日卒

空東京深川浄心寺中

かなり変色し薄れているが、これにコントラストをつけて複写したものがここに掲げたものである。十徳ではなく左三ツ巴紋の羽織を着、脇差を帯び白扇を手にした座像で、剃髪して僧形である。幕末の隆敬晩年のものであろうが、奥医師の江戸期の風俗を伝えるものとして、併せてここに紹介する次第である。

本篇の初めに記した如く、この先祖書には誰か後人の手によって四代保見隆敬の写真が付されている。江戸末から明治はじめに流行した湿板紙焼法によるものと思われるが、名刺版大の薄い印画紙に焼付け、これを厚紙に貼布した上で表紙裏上端が糊付けされている。裏を反すと朱筆で明瞭に次の如く書かれている。

保見隆敬源正直

(東京医科大学解剖学教室)

Antecedents of Four Generations of Doctors Yasumi,  
Shogunal Patrimonial Physicians,  
and Photograph of Ryûkei Yasumi in Edo-period

Kyutaro MAEKAWA

A pedigree of Yasumi's family, patrimonial physicians of Shogunate government, was found. The first Gentai Yasumi had been employed in the 9th year of Hôreki (1759) as shogunal doctor so called "okuishi". The second Gentai Jr., the third Genchi and the fourth Ryûkei always held the same or similar positions throughout the latter half of the Edo-period. They were mostly the physicians for the Shimizu-Tokugawa family which was one of the three important relatives of tycoon and had their mansion in the shogun's Edo-castle. The pedigree has shown that they were placed under the control of Rôju, a member of the tycoon's council of elders, or directly under Karô and Yônin, namely minister and subminister and subminister, of Shimizu-Tokugawa family.

This pedigree was accompanied by a sheet of photograph of Ryûkei Yasumi. Because he closed his life in the 2nd year of Keiô (1886), it is thought to be photographed at the Edo-period. According to the rules of the physicians in feudal times, in the portrait, he is tonsured as bonze, wears one short sword at his side and takes a white folding fan in his right hand.

## シーボルト事件と土生玄碩 將軍家紋服贈与について

福 島 義 一 (徳島市)

日蘭兩國にとって甚だ不幸な出来ごとであったシーボルト事件は、文政十一年(一八二八)九月シーボルト乗船予定の  
コルネリウス・ハウトマン号難破によって突如として起つたものではない。

このことは、呉<sup>(1)</sup>、板沢<sup>(2)</sup>その他の先学が注目したところで、例えば、当時国禁品であった將軍家紋服が蘭人(外国人)によつて所持されている事實は、既に、江戸参府の節、江戸において幕府側に探知されていた。シーボルトが当時国法を無視した行為のあつたことも、間宮林蔵、大阪の画工某などの密告によつても知られていた。しかし長崎奉行は政治的配慮から、学問的探究の熱意のあらわれと称して、隠密に監視をつづけていたのが事實であらう。

即ち、本事件は、シーボルト渡来後間もなくおこり始め、江戸参府後はその摘発検査も既に時間の問題であつた。ただ幕府高官は国際問題を考慮して、コルネリウス号難破によって発覚まで極力そのモミけし運動を続けていたことは否定できない。

土生玄碩(一七六一—一八四八)は、文政九年(一八二六)江戸参府の節、シーボルトから散瞳薬伝授の目的を以て当時国禁の將軍家紋服を三回にわたつて、外国人に贈与するという常識では考えられない大胆な行為によつて、国禁を犯し



る。

この理由について、小文において私論を試み、史実に補遺を加えたいと思う。

## 二

文政六年（一八二三）シーボルトが長崎出島に到着すると間もなく医療を開始したが、彼が眼科の奇薬・妙薬を所持しているという風評は、主として当時の西国在任の医師たちの間に伝えられるようになった。<sup>(3)</sup> その本態は散瞳薬で、*Atropa Scopolia*, *Hyoscyamus* などの *belladonna alkaloid* であつた。*mydriatica* は一八〇一年ヒムリー (Karl Himly 1772—1838) によつて発表されたもので、シーボルト渡来当時には既にヨーロッパ眼科医の常備薬で、けつして秘薬ではなかつた。

しかし、わが国ではシーボルトが伝授したのが最初で、ベラドンナ *Atropa* を持参したが、これが欠如すると *Scopolia* 時には *Hyoscyamus* を代用した。彼は、はじめ国産のハシリドロコを *Atropa belladonna* と鑑定したが、後日植物学者の *Sabatier* によつて *Scopolia japonica* と訂正された。なお、彼は「薬品応手録」（京大本による）の中に *Hyoscyamus* を掲げたが内用薬とし、莨菪を散瞳薬として収載していない。この点、彼も散瞳薬は、鳴滝塾門下生以外には秘密にしていたようである。しかし、彼の高弟眼科医高良斎（一七九九—一八四六）はその訳著「眼科使用」においてシーボルト伝授の散瞳薬を公開している。当時、シーボルト又はその門下から散瞳薬の伝授をうけた日本人医師たちが何れも極秘にしていたことを考えると、良斎の業績は日本眼科学史上特筆に値する。

文政九年四月二十五日（旧三月十九日）シーボルトは江戸において医師たちをあつめて散瞳薬の実験を行った。その効果を玄昌からきき知つた玄碩は、その少量を入手して実験したが無効であつたので、自らシーボルトを訪ねてその効果を確認した。玄碩は更らに散瞳薬を所望したがシーボルトは断つた。それから將軍家紋服外国人贈与となるのであるが、本

項<sup>3</sup>については拙著「日本眼科史」（日本に於ける散瞳薬の歴史二二—二六頁）を参照されたい。

当時幕府医官として眼科医最高の地位に在った玄碩が、未だ良齋著「眼科使用」を読まず、また、散瞳薬の製法を識らなかつたのであるから、江戸参府の機会にシーボルトから直接その伝授を速いであろうとした心情は容易に推測される  
ところである。

シーボルトは鳴滝塾生には散瞳薬を教示したが、その他の者には容易に公開しなかつた。試みに、彼の門下生数をその出身地別に分類してみると大分表示のようになる。

地 域	九 州	中 國	四 國	中 部	近 畿	關 東	東 北	計
人 数	17	10	4	5	0	1	4	41

即ち、当時の西国出身者が過半数を占め、江戸を含む関東は一名にすぎない。シーボルトの眼科智識は東漸したが、江戸の玄碩にとどくには大分時間がかかったことが判る。

### 三

シーボルト事件関係史料は、主として現存の幕府側申渡書に拠ることが多く、被告側史料は極めて少ない。就中、玄碩紋服関係史料は、殆んど完全なまでに失われていることは不思議である。その理由として、事件発生以前から、その発覚を考慮して、連座がないように工夫した疑いが濃い。江戸に同行した高良齋、名古屋（宮）で面接した水谷豊文（一七九—一八三三）伊藤圭介（一八〇三—一九〇一）らとの関連史料もみつからない。

(1) 何故玄碩は短期間に蘭人（外国人）に対して将軍家紋服を三着も贈与したか？

玄碩申渡書によると、御召葵御紋服之羽織をカピタンへ、御紋附御帷子（かたびら）と御紋附小袖表（こそでおもて）

をシーボルトへ贈った。当時、御紋服は国禁の品で、一着でも外国人に贈与は死罪にあたることは当然である。申渡書に「居合候者之教に任せ、何之思慮も無之」玄碩ほどの人物が簡単に紋服を外国人に贈与したというようなことは到底考えられない。而も、シーボルトがその筋の注意人物であるから、発覚も十分考えられる。しかし、国禁品所持の証拠がなければ、当然発覚のおそれも無いわけである。そこで、玄碩は外国人に紋服を贈与して散瞳薬の伝授をうけてその目的を達した後に、なるべく早く国禁品を奪取することを思いついたのではないかと考える。

紋服贈与の事実は、玄碩から進んで幕府高官に申立て、その奪取を願出たのではないかと考える、これが事実とする  
と驚いたのは、むしろ、幕府側であって、はたして外国人紋服所持の事実が探知されて、長崎奉行にその奪取を内命したのは当然の処置とみられる。

従来土生玄碩伝の史料となった「医史料」（呉本）や「師談録」に、上記の史実を欠くのは、彼を神格化するのに、いささか都合が悪いので収録しなかったのではないかと思う。もし、計画通りに紋服奪取が成功しておれば、玄碩はシーボルト事件とは無関係な人物として、史籍に名をとどめなかったかも知れない。

## (2) 事件以前に既に外国人が將軍家紋服を所持することが探知されその奪取をはかった事実

蘭館長スチュレル江戶参府の節、長崎奉行の配下で附添検使をつとめたのは水野平兵衛という人物である。この人は、事件後一行に対する監督不行届の罪によって押入申付ける判決をうけたが、その申渡書の要旨は次ぎのようである。長崎屋源右エ門方に逗留中、甲比丹スチュレルが御紋服所持のことが判り、蘭人部屋小使藤平(8)をしてその奪取をはかった。江戶とその道中ではどうしても奪取することが出来なかったが、長崎出島へ帰着してやっと奪取に成功した。水野が検分したところ、葵小サキ御紋附御羽織一着と蘭紙に包んで糸で結んだ御紋附黒倫子御単物一着とであった。このような品は出島外に持出すことも出来ないもので、藤平に命じてひそかに焼捨させた云々。

要するに、監督不行届ではあったが、蘭館長紋服所持一件は証拠の煙滅に成功したので押込の軽罪をうけた。この申渡

書には、シーボルトに関する紋服奪取については触れていないが、その理由は不成功に終わったからだと推測される。焼捨  
てられた紋服の中、御羽織一着は明らかに玄碩が贈与したものであるが、蘭紙に包んだ御単物一着は贈与者が不明のまま  
事件がかたずいている。玄碩以外にも紋服贈与者がいた疑いが濃いのである。

#### 四

シーボルト事件のなかで、少なくとも将軍家紋服が外国人に所持されていたことが探知されたのは、既に江戸滞在中で  
あった。このことは、水野の申渡書によって明らかである。また、幕府当局は検挙することなく、彼等のスパイ役である  
附添検使水野をして国禁品奪取を命じ、遂に蘭館長所持の品は全部奪取に成功して焼捨させている。その贈与者につ  
いては深く探究することを差しひかえた。シーボルト所持紋服については一切奪取に触れたものがない。極力奪取をはか  
たが、遂に、シーボルトが国禁品の隠匿保持に勝利をおさめた。その結果、玄碩の罪科があがり、玄碩、玄昌父子が悲  
惨な結果を招くことになったのである。

(本稿の要旨は、第七十六回日本医史学会総会において発表した)

#### 注

- (1) 呉 秀三著 「シーボルト先生その生涯及び功業」東洋文庫平凡社(昭和四十二年)
- (2) 板沢武雄著 「シーボルト」人物叢書四五(昭和三十五年)
- (3) 福島義一著 日本眼科史、日眼全書第一巻第一分冊(昭和二九年)
- (4) 福島義一著 日本眼科学史上のシーボルト、日本医史学雑誌第二十巻第一号(昭和四十九年三月)
- (5) 久米康生著 「近代日本の光源」(木耳社、昭和四十九年)
- (6) 中泉行正著 シーボルト事件土生玄碩・高橋作左衛門等に対する申渡書について、臨床眼科第十九巻第八号(昭和四十年八月)

(7) 福島義一 土生玄碩のシーボルト散瞳薬伝授に関する一考察、日本医史学雑誌第二十一卷第二号(昭和五十年四月第七十六回日本医史学会総会抄録)

(8) 幡崎 鼎(一八〇七一—一八四二)

はじめ藤市或は藤平と称し、蘭人部屋付小使としてシーボルトに親炙して蘭学を修めた。

シーボルト事件に関係して入牢したが、天保元年脱走した。変名して幡崎鼎と称し、大阪で蘭学塾をひらいた。後、水戸藩に登用せられ西学都講となり、藩命によつて長崎滞在中、脱獄の旧罪によつてとらへられ天保十三年七月病死した。

(9) 伊東昇迪(明治二十一年—一八八八没)

米沢市の人、文政七年上京して土生玄碩に入門、間もなく長崎にいたつてシーボルト鳴滝塾におること三年にして帰郷した。間接ではあるが、玄碩とシーボルトとを結んだ最初の人物である。昇迪のシーボルト関係史料の探査も必要と思う。玄碩は昇迪からシーボルト眼科について教示をうけ、散瞳薬についても若干識つていた疑いが濃い。

## プレんキの『産婆術原理』（蘭訳本）について

大 鳥 蘭 三 郎

—

ウィーンの医家 Joseph Jacob Plenck (1738—1807) はその著書を通じて、江戸時代後期に最もよくその名を知られていた西洋医家の一人であるということが出来る。杉田立卿が訳述した『瘍科新選』と『微瘡新書』および『眼科新書』はいずれもプレんキの原著の蘭訳本を重訳したものであることがわかっている。プレんキにはまた産婦人科に関する著述があり、蘭訳本を通じて日本へ紹介されているというが、その論拠は前にあげた三者の場合ほど明快でないように思われる。プレんキの産婦人科説を日本へ紹介した本といわれているものは船曳卓堂が嘉永三年（一八五〇）に訳述、刊行した『婦人病論』であるとされているが、これについては疑問がある。この点につき、私が調べたところを述べることにする。

—

一昨年のことであったか、わたしは Plenck の産科学書といわれる一冊の蘭書を手にいれた。その表題ページにはつぎのように記されている。

Grondbeginselen der Vroedkunde,

door

JOSEPH JACOB PLENCK:

Docter der Heelkunde, Hoogleeraar der

Ontleed-Heelen Verloskunde enz. te Weenen

Uit het Hoogduitsch vertaald,

door

C. H. BRINK:

HEELMEESTER te AMSTELDAM.

---

TE AMSTELDAM, Bij

J. B. ELWE,

1801

これを日本語に訳せば、

産科学の原理

ヨゼフ・ヤコブ・プレック著

ウィーンの外科医・解剖学・外科学・産科学教授

ドイツ語から訳す

シ・エチ・ブリンク

アムステルダムの外科医

となる。

三

これに続いて翻訳者の *Andreas Bonn* と *Everhard Pieter Swageman* の二人に対する献呈の辞を掲げ、次いで訳者の序文を四頁に亘って記している。

いま、それについて詳しく述べる余裕はないが、その要点は、産科学の重要性を説き、産科学のなお未発達のオランダにおいて、この学問が十分におこなわれることを期待している。そのために本書の発刊がすこしでも役立つならば幸いで、産科学の初歩に関する知識が一般に普及し、産科学校の設立、または医学校での産科学の確立に資することができるならばわたしの望みはまさに達せられたというべきであると、論じている。

これに続いて、目次を四頁載せ、二部に分けて記述し、一部を一頁、二部を三頁かけて記している。それによると一部はさらに四十一の章に、二部は百二十八の章に分けて論じられている。

一部と二部との区別は何によってつけられているかを調べてみると、一部は正常分娩、二部は異常分娩に関するものであることがわかる。つまり、異常分娩についての記述は正常分娩に関する記述よりもはるかに詳しいのである。

異常分娩に関する記述も証状についての事柄に最も重点が置かれ、診断に関しても相当程度の考慮が払われているのに対し、治療についての記述は簡単で、第二部の終りで九章に亘って述べられているのにすぎない。



そのなかには、異常分娩に際して用いられる各種の手術器具を挙げ、それぞれの用法を記述している。帝王切開術に関しても二部の最後の章で簡単に触れている。

#### 四

なお、右に続いて、巻末の二葉の挿絵の説明を記し、第一葉の六図、第二葉の五図に説明を試みている。

巻末の図葉の二枚はいずれも分娩に際して使用される道具や助産手術器具に関するもので、分娩椅子、分娩鉗子、穿頭器、骨鉗子等を図示している。

蘭訳本「産科学の原理」についての解説はこれで一応終るが、ここで注意しておきたいのは本書の刊行年度のことである。このものは、日本語版の原書をさがしあてる際に大いに参考となるものである。

本書では、この刊記に当るものは、表題頁の最下部に 1801 とあるだけで、その他の個所には全く見ることができない。さすれば、この本の原本であるドイツ語版は一八〇一年より前に出版されたことが考えられる。

#### 五

上述した諸点を総合して考えると、つぎのことが指摘される。ウィーンの外科医であり、解剖学・産科学教授 J. J.

PLENCK がドイツ語で著わした『産科学の原理』はアムステルダムの外科医 C. H. BRINK によってオランダ語に訳出され、一八〇一年にアムステルダムで出版された。

この蘭訳『産科学の原理』は翻訳者よりアムステルダムの解剖学・外科学・産科学教授の ANDREAS BONN とアムステルダムの外科医 EVERHARD PIETER SWAGERMAN の二人に対して献呈されている。

翻訳者はその序文のなかで、産科学の重要性を説き、オランダにおけるこの学問の普及・発展を期待し、本書の刊行が

その一助になることを望んでいる。

目次によれば、本文は二部に分けられ、第一部は正常分娩を、第二部は異常分娩を論じている。第一部はさらに四十一章に分けられ、産科学総論から、婦人の局所部分についての総論、骨盤についての解剖学的観察、婦人の軟部局処の解剖・妊娠子宮の解剖を論じてから産科学各論に及んでいる。各章の論調はすこぶる簡明で、冗長に渉ることをつとめてさけていることが明らかに看取される。

第二部、異常分娩についての記載は、百二十八章にもおよび、すこぶる細いが、各章の記述は第一部に見られるところと同じく、大いに簡明である。

症状、診断に関する記述に重点がおかれ、治療に関する記載は簡単で、第二部の終りの九章にわたって述べられているに過ぎない。また異状分娩に際して用いられる各種の手術器具を論じ、それぞれの用法が記されていて、巻末にはこれらの手術器具のある種類のものが図示されている。

## 六

上述したことから次の諸点が特に注意されるように考えられる。

一、『産婆術の原理』と題するプレんキの著述は始めから終りまで産科学に関することがらを記したもので、婦人科学に関する記載はすこしも見られない。

二、蘭訳本『産婆術の原理』はアムステルダムで一八〇一年に刊行された。手許にあるプレんキの伝記に附記されている著述目録によると、この頃プレんキが著わした産科書としては、『*Elementa artis obstetricae*』(1782)がある。

わたくしの考えでは、このもののドイツ語訳本がおそらく蘭訳本『産婆術の原理』の原本であろうと思われる。しかし、このラテン語文のプレんキの産科書のドイツ語訳本が出たものか、どうかは、この伝記の中には記されていないの

で、たしかなことは何とも言えない。

三、ひろく言われているように、船曳卓堂が訳述した『婦人病論』はプレんキの著述を翻訳したものであることは、右に述べたところから、それらしくないとわたくしは考えたい。このことについては、上述したところで十分であるように考えるが、念のために船曳卓堂の『婦人病論』の側からこの点について考証してみたい。

## 七

つぎに A. Hirsch の “Biographisches Lexikon der Ärzte” の Plenk の項で、挙げられている著述目録を調べてみると、産科学、または産婆術に関するものは、つぎの二つのものがあることが知られる。

その一つは “Elementa artis obstetriciae” と題するもので、ウィーンで一七八二年に出版されている。

他の一つは “Anfangsgründe der Hebammenkunst” と題するもので、ペストで一八〇八年に出版されたと記されている。

上述した二種の著書を手許のオランダ文の著書と比較して検討してみると、表題の上からは、いかにもドイツ語で書かれた後者の方、すなわち “Anfangsgründe der Hebammenkunst” がオランダ文の本の底本であるように思われる。

しかし、すでに記したようにオランダ文の本の発行されたのが一八〇一年で、アムステルダムで、ということが記されているところからすれば、一八〇八年にペストで発刊されたというドイツ語本の “Anfangsgründe der Hebammenkunst” が、このオランダ語版の底本ではないということがわかる。

従って、オランダ語版の『産婆術原理』の底本はどうやら一七八二年にウィーンで出版されたというラテン語版の “Elementa artis obstetriciae” であるらしい。らしいといって断定できないのは、これ以上の記載、つまりラテン語版のドイツ語訳本はいつ、どこで出たのか、さらにそのオランダ語重訳本の出版はいつ、どこでなされたのかについては、A. Hi-

rsch の “Biographisches Lexikon der hervorragenden Ärzte…” の Plencck の項に全く記されていないので、なんとも言うわけにはいかないのである。

## 八

それなら、プレんキの『婦人科提要』を訳述したものといわれている船曳卓堂の『婦人病論』（嘉永三年刊）の側からプレんキの婦人科書の実体をつきとめることはできないものかと考え、調べてみた。

周知のように、船曳卓堂の『婦人病論』は西洋婦人科書を訳述、刊行した日本で最初のものであるとされている。しかも、この本はプレんキの『婦人科提要』なるものを訳述したものであるという。主として産科のことを説き、婦人科的疾病を論ずるは僅かに全巻の三分一に過ぎず、とある。しかも、プレんキの『婦人科提要』と記されているだけで、その原書名は明らかにされていない。

前号で、『婦人病論』の解題を試みたときに述べたように、この本が依拠した本はプレんキの著書であるということと、そのオランダ語訳本の出版年が一八〇九年であることの二つの他は、全く知られていない。プレんキのなんとという表題の著書を訳述したものであるかは明記されていないが、訳述にあたって用いたオランダ語版の出版年度が一八〇九年であるということを考えあわすと、船曳卓堂の『婦人病論』の訳出した底本である、いうところのプレんキの『婦人科提要』とは、どうやら、Plencck の “Anfangsgründe der Hebeammenkunst” のことにあたるものであるらしい。

これもまた、確言することは控えることにするが、船曳卓堂の『婦人病論』が依拠した底本は、Plencck の “Anfangsgründe der Hebeammenkunst” のオランダ語版であると推定される。ただし、オランダ語版の表題を明示するには、資料が不足であるのは残念である。

結局、私の手許にある Plenc のオランダ語版 “Grondbeginselen der Vroedkunde” の底本はラテン語版の “Elementa artis obstetriciae” のドイツ語訳本であるらしく、また、船曳卓堂が『婦人病論』を訳出する際に用いた底本は、“Anfangsgründe der Hebekunsten” のオランダ語訳本であるらしい。

これらのことは、私のはじめの予想、つまり “Grondbeginselen der Vroedkunde” は『婦人病論』の翻訳底本ではあるまいか、という考えを一応否定したことになる。

言葉をかえれば、この両者の間には、直接のつながりはない、ということがいえそうである。

ただし、断定的のことをいうのは、あくまで、さし控えたい。なぜなら、そのためには資料が不十分であると考えるからである。

この上は、なんとかして、資料を十分にあつめて断定的のことを言いたいものである。

## 一〇

結論。最近、私が入手したオーストリーの医家 Joseph Jakob von Plenc の “Grondbeginselen der Hebekunsten” と、日本で西洋婦人科書を最初に翻訳、刊行した本といわれている船曳卓堂の『婦人病論』との、関連性を調べた。

そのために、まず、両書の解題をくわしく試み、それぞれの内容を明らかにした。

その結果、この両者は、私の予想に反して、直接的には関連性がないらしい、ことが判明した。ただし、断定的なことは、資料不足のため、あくまで保留したい。

## Plenck's "Grondbeginselen der Vroedkunde"

Ranzaburo OTORI

I recently bought "Grondbeginselen dre Hebeammenkunst" by Joseph Jakob von Plenck, a medical practitioner in Austria, and I studied the relationship between that and "Fujinbyo Ron" (On Women's Diseases) which is reported to be the first publication of Western gynecological book translated by Funabiki Takudo in Japan.

I investigated details of the bibliographical introductions of both books and the contents of each.

Unexpectedly, I found no direct relationship between them, but any decision regarding the relationship must be deferred for lack of data.

## 医家先哲追薦会について

小 川 鼎 三

日本医史学会の前身である私立奨進医会が明治廿五年（一八九二）から毎年三月四日に医家先哲追薦会を開いて、先哲を祭り医史学の講演会を催して、昭和廿四年（一九四九）まで五十八（七?）回に及んだことは注目すべき事実である。その第一回から第四十四回（昭和十年）までは毎会の記事がまとめられて、中外医事新報の第一二二八号（昭和十一年二月）に載っているのです。ここではその要点をいくつか拾いあげる。また去る八月十八日の第七十五回日本医史学会総会において赤松金芳氏が『毎年三月四日観臓記念に行われた「医家先哲追薦会」と富士川先生作歌琵琶「蘭学事始」について』と題して発表した。その抄録は日本医史学雑誌第二〇巻第三号（昭和四九年七月）に載っている。

私立奨進医会は明らかに富士川游の提唱によって結成されたものであり、さらにその源を求むれば、富士川游の父、富士川雪が安芸の沼田郡安村字長楽寺で医業を行なうかたわら、近傍の同志の医師を集めて、医道の振興や医学上の新知識の獲得と検討に努めて、その集まりを奨進医会と称したことにある。富士川游が広島医学校を明治二十年七月に卒業し、その年の秋に上京すると共に奨進医会は東京に本拠を移したものである。

いま山崎文庫の中に富士川游の編集ならびに発行として明治廿五年に出版の紙数三八ページの小冊子がある。題字「先

哲祭」は杉亨二（一八二八—一九一七）の筆である。表紙の裏ページに山崎佐が「昭和十三年十一月一日藤根常吉翁未亡人の好意により特に贈らる。既に散逸して他に保存殆どなきものの如し」と書いている。単に先哲祭とよばれた第一回推薦会の記録であり、はなはだ貴重な一冊である。

開卷第一枚目に呉秀三の「先哲諸子の靈を祭る文」が実にみごとな楷書の漢文で載っている。後に日本の精神病学の開拓者となる呉秀三は富士川游と同じく慶応元年の生れで、しかも同じ広島の人として親しい間柄であった。秀三が帝国大医学科大学を卒業したのは明治廿三年十一月であり、この文を作り先哲祭で朗読した廿五年三月四日には東大卒業後一年余りの青年医師であった。この若さは先哲祭を主催した富士川游と共通であった。呉秀三は学生時代から文学を嗜み、漢詩文を学んで、漢文を作るのに長じていた。

第一回先哲祭の記事の中で当時六五歳の杉亨二が昔を追憶して、自分は若いときに宇田川玄真の医範提綱を読んで、人体の構造を知り、その精妙なことに感服して蘭方医となる志を立てて少しはその学を修めたが、途中で他の道に転じたことを述べて、そのあとで医者のあるべき姿を説いている。第一回先哲祭の出席者は十九名であった。

\* \* \*

これに先だつて明治廿三年四月の初めに乙酉会主催の第一回日本医学会が東京で開かれたとき、富士川游は記録幹事の役目をつとめたが、その発会式が四月一日の午後二時から木挽町厚生会館にて行われた。全国より参会した者千七百人があった。その開会式の次第をみると、まず岩佐純の開会の辞、ついで石黒忠憲の会務報告があり、その報告の終りに石黒は「本邦文明ヲ来シタルモノヲ三期トス。第一期ハ仏氏（仏教の僧侶）、第二期ハ儒者之ヲ開キ、第三期ハ我医学者之ヲ開ケリ」と述べ、今日の開明は医学者が首唱先導したと述べた。

そのあとをうけて長与専齋が登壇して、これより先哲を祭る式を行なうとして、前野良沢、杉田玄白、桂川甫周、大槻玄沢、宇田川玄随、宇田川玄真の六人の名をあげ、その功績を大いに賞揚した。祭文朗読のあと蘭学創始について演説を



# 醫家先哲追薦會

明治廿六年三月四日  
上野不忍池弁天祠畔長醜亭  
開かれたる  
第一回先哲祭の  
盛會の  
写真

した。殊巧をこらした祭壇ではとくに前野良沢の遺墨を高い所に掲げてこれを神位に擬したのである。ついで松本順の演説のあと、長谷川泰が登壇して、前野良沢に贈位の件を政府に建白する動機を述べて満場一致の賛成を得た。それが実現して良沢に正四位が贈られたのは明治廿六年十二月廿七日であった。それを祝う会が私立奨進医会により明治廿七年一月十七日に神田明神の開花樓において催された。

筆者は明治廿三年の第一回日本医学会の先哲を祭る儀式が主催団体名が異なるとはいえ明治廿五年の第一回先哲祭の先駆をなしたとおもう。その第一回日本医学会の会場で陳列された多数の遺品の中で注目すべき数品をあげると、最も重要され神位に擬せられたのは前野良沢の遺墨扁額で東京本所花岡氏蔵のものであった。その遺墨が現在も残っているか知りたいとおもう。そのほか鵜齋先生遺物のターヘル・アナトミア（杉田氏蔵）も出品されたが、これは帰一作の有名な杉田玄白木像とともに関東大震災で焼失したのだろうか。

\* \* \*

奨進医会の第二回先哲祭は明治廿六年三月四日に上野不忍池弁天祠畔長醜亭で開かれたが、出席者は「無慮九十一名」の盛會であった。この回以後は伊藤圭介（一八〇三—一九〇一）の提唱により医家先哲追薦会（写真）と呼ばれることになった。この会合の次第は中外医事新報第三一二号に載っているので詳細を略するが、会場の正面床の間の中央に伊藤圭介の大書した「千秋垂盛徳突世承遺馨」の書幅をかかげ、その左右に先哲の肖像左右二十づつを掲げた。祭主磯部最信（明治卅一年歿、享年七十八）が先哲祭祝詞を朗読した。この第二回の特徴は第一回の方が洋方に偏していたのに反して、漢方の先哲をも祭ったことで

ある。「樓上正面の床には故有栖川一品親王の親筆に係る大己貴神少彦名神の御神号の軸物を掛け、その左に桂川国寧の自筆ヒボクラテスの肖像、右には多紀藍溪の自筆神農の像を掛け」とある。陳列品の中に前野良沢が中津侯より拝領した蘭書雲飛の巻があったことも注目される。

\* \* \*

奨進医会の先哲祭の会場は第二回以後第十一回（明治卅五年）までは毎回右の長配亭であったが、第十二回から第十四回（明治卅八年）までは上野公園の無極亭、その後は会場がいろいろと変った。その間で注目すべきは明治廿七年五月から奨進医会事務所（富士川游の自宅か）で毎月一回の集會が開かれたことで、これが現在も続いて行なわれる日本医史学会の例會の始まりといえるとおもう。また明治廿七年十二月に東大解剖学教授の田口和美（ウツミ）（明治卅七年歿、享年六十六）が奨進医會の初代会長になった。田口教授が二年間のドイツ留学を終えて帰国したのが明治廿二年であり、彼は東大解剖学第一講座の主任であり、医科大学教授陣の中で古参の人であった。

この田口和美が会長であった約十年間は医家先哲追薦會の内容が甚だ整っていたとおもう。例えば第五回（明治廿九年）はジェンナー種痘發明百年、シーボルト生誕百年を記念して、それらに関する演説がなされ、第六回（明治卅年）はモルトン麻醉法五十年記念として、それを中心に演題が選ばれたようである。第七回は小兒科、第八回は眼科、第九回は産科、第十回は皮膚病梅毒科を主としている。

第十一回（明治卅五年）は三月四日に長配亭にて祭典のみが行われ、演説會は耳鼻咽喉科を主題として第一回日本連合医学会の一部として四月六日に医科大学解剖学教室でなされたことが注目される。第十二回は衛生学を主題にして明治卅六年三月四日上野公園無極亭で行われた。そのとき田口会長は自ら衛生小志と題して演説したが、その翌卅七年二月に田口会長は病歿した。そのため本草学を主にした第十三回の集りは故會長田口和美追悼會を兼ねたのである。

そのあと明治四十三年三月に東大法医学教授の片山国嘉が第二代会長になるまでの数年間、奨進医會は會長が空席だっ

たようである。しかし実際には終始、富士川游が中心となり毎年三月四日に先哲医家追薦会が行われた。明治四十三年には第三回日本医学会が大阪で開かれたのでこの年の第十九回先哲医家追薦会は三月四日の分を三月三十日に延ばして京都帝大の尊攘堂で催された。この追薦会が東京以外で行われた最初である。片山の会長就任も大阪での日本医学会に対応したものとおもう。

\* \* \*

大正三年には奨進医会から日本医師協会が分離し発足した。後者は社会の変動にそなえて全国医師の地位を守り、業務を正当に執行できる道を講ずるためのもので、大正三年四月四日の発起人會では富士川游が本會創立の趣旨を説明している。奨進医会は医史学を研究し、医の倫理を講ずる會合となり、その役目がはっきりした。その後も相変わらず毎年三月四日の医家先哲追薦会は続いてゆく。

大正十年の第卅回追薦会は神田表猿菜町の明治會館で行なわれ、小塚原觀臟百五十年記念を兼ねた。おそらくこの會で觀臟記念碑を設立する相談があったかと推測する。翌十一年五月十日に南千住の回向院の本堂裏手にりっぱな觀臟記念碑ができ上り、その六月二日にその披露會が第卅一回追薦會と合せて行なわれた。この碑は奨進医會有志の設立であった。その後は第卅二回から第卅五回（大正十五年）まで回向院を會場として先哲追薦會が催された。追薦會は初めは神式の祭りであったのが、このころは仏式でなされたとおもう。第卅六回（昭和二年）と第卅七回は祭典が回向院でなされ、演説會は神田の多賀羅亭でなされている。

昭和二年（一九二七）の末に日本医史学会が創立されて初代理事長は呉秀三であった。第卅七回（昭和三年）以後は日本医史学会が先哲医家追薦會を開くことになり、昭和四年以後は医史学会の代表者が回向院に参詣し、講演會は麴町区山下町の中山文化研究所（東洋ビル第四階）で催された。そして、懇親晚餐會が同ビルの地下室のレストラン・ツクバで行なわれた。昭和七年三月に呉秀三が歿して、入沢達吉が医史学会の第二代理事長となった。昭和九年入沢理事長のとき医

史学会は日本医学会の第一分科会となった。この時から一般講演が初めて行なわれた。第四十四回は東洋ビル二階の大講堂で行なわれ、相良知安三十年忌を兼ねた。

第四十五回（昭和十一年）より第五十三回（昭和十九年）までは神田淡路町の東京医師会館で催された。その間、昭和十三年（第四十七回）は第十回日本医学会が京都で開かれたため、その第一分科会として第三高等学校で行なわれた。三浦梅園百五十年忌を記念していることも注目される。またその年十一月に入沢達吉が歿して、富士川游が第三代の日本医学会理事長となった。最初から奨進医学会の中心人物であり、半世紀にわたり医家先哲追薦会の事実上の主宰者であった富士川游がいつも表面にでないで晩年に初めて理事長となったのである。しかし二年後の昭和十五年十一月六日、富士川は病歿した（享年七十五歳半）。そのあと理事長は昭和十五年十一月より藤浪剛一、さらに昭和十七年十二月より山崎佐となる。第五十回（昭和十六年）は富士川游追悼の集りであった。

終戦の年、昭和二十年三月四日は伝染病史、細菌学史を主題とした講演会を開く予定であったが、B29空襲のため中止となった。しかし一部の役員が回向院に参拝したので、第五十四回の追薦会は成立したと考える。回向院はその六日後、三月十日の大空襲で全焼し、観臓記念碑もひどい破損をうけた。昭和二十一年は戦後の混乱中でだれか会員の中で回向院の焼跡に足を運んだものがあつたかどうか不明である。従つてその次の年、昭和廿二年に順天堂医科大学で行なわれたのを第五五回、翌廿三年同大学、さらに廿四年に東京医科歯科大学で行われた講演会を第五六、第五七回と数えて、これをもって医家先哲追薦会は終止符をうった。

昭和廿二年四月初めに第十二回日本医学会総会が大阪で開かれたとき、その第一分科会として日本医史学会総会が催された。また昭和廿六年に第十三回日本医学会総会が東京で開かれたときも、第一分科会として日本医史学会総会が東大工学部で催された。この二回分は先哲医家追薦会として数えられたかどうかは疑問である。

中外医事新報は昭和三年一月号（明治十三年の創刊から数えて第一一三一号）から日本医史学会の機関誌となり、昭和

十六年一月号（通巻第一二八七号）から日本医史学雑誌と改称した。型も従来のB5版からA5版に縮少した。戦局の拡大による物資不足のためであった。そして昭和廿年の一月号の原稿が印刷屋とともに戦災し、それ以後永いあいだ休刊の止むなきにいたった。この困難な時期に日本医史学会を理事長として守り続けた山崎佐は、ついに昭和廿八年七月に理事長のバトンを内山孝一に譲った。

内山理事長は門下の新鋭、石原明を主な相談役として、昭和廿九年三月廿八日に日本医史学会總會を開き、それを医家先哲追薦会を踏襲したものとして第五六回と銘うった。戦後の混乱中に何回追薦会が実行されたか不明確だったので、確かに行われたもののみをとり、少なめに見積ったものとおもう。また「日本医史学雑誌」は昭和十六年より同十九年まで毎年一卷がでたとなし、昭和廿九年三月に復刊に成功したものを第五巻第一号（通巻第一三三五号）と称したのである。

日本医史学会の總會はその後は毎年一回開かれて昭和四九年八月の洋学二百年記念の第七五回總會につづき、第七六回は昭和五十年四月、京都での日本医学会總會の第一分科会として大阪において行われる予定である。理事長は昭和卅三年四月から不肖小川鼎三が勤めている。昭和卅四年には医史学会は第十五回日本医学会のシンポジウムに参加したのみで總會は開かれず、この年に南千住の回向院境内に観臓記念碑が再建された。谷口吉郎の設計で、緒方富雄の撰文をもち、大正十一年創設のままの青銅浮き彫り板をはめ込み、黒御影と大谷石を用いた立派な記念碑である。日本医史学会が、日本医師会と日本医学会の援助を得て作ったものである。

昭和四九年に回向院はその前面の道路拡張のため全面的に改築され、観臓記念碑も移転して、新築の回向院の一階内壁を飾ることになった。きょう十月廿六日にその除幕式が行われたのである。前回と同じく設計は谷口吉郎、撰文は緒方富雄である。この記念碑こそは明治廿五年に出発し、半世紀あまり続いて第二次大戦後に終わった医家先哲追薦会の最も大切な遺産といえる。また日本医史学会の事務所には会の命名者伊藤圭介が雄渾な筆致で医家先哲追薦会の七字を横に大書した一軸が蔵されている。

\* \* \*

以上に付け加えて、奨進医会が蘭化講演を明治四十二年十月十七日に開き、大正五年十一月卅日まで五回前野良沢の命日（享和三年十月十七日）を期して講演会を行なったことも注意を要する。例えば英国におけるハーヴェイ講演の如きものという。蘭化講演は毎回講演者は一人に限って、演説内容は医史学と限らず、(一)独創的研究成績の報告、(二)専門学者の研究成績の報告、(三)碩徳大家の講演とあり、第一回蘭化講演は会場が東大法医学教室で京都帝大教授の藤浪鑑博士が「所謂片山病の研究」と題して演説し、聴衆はおよそ百名であり、甚だ盛会であったという（中外医事新報第七一一号）。その第四回講演は良沢の命日を陽曆に直した十一月卅日に東大法医学教室で行われ、小林晴治部が「肝臓ジストマの発育」と題して演説した（中外医事新報第八一〇号）、第五回は大正五年十一月卅日、理学博士藤井健次郎の「本邦地質時代における火山噴火がその当時の植物に及ぼせる影響に就て」の講演があった（中外医事新報第八八二号）。

\* \* \*

太平洋戦争後の混乱がおさまった昭和卅一年三月四日に蘭学事始記念会が日本医師会（当時の会長、小畑惟清）の主催、日本医史学会（理事長、内山孝一）、日本医事新報社（社長、梅沢彦次郎）の後援により開かれ、毎年行われて第七回（昭和廿七年三月五日）をもって終わっている。

筆者はその第二回るとき日本医師会館にて「杉田玄白の心境と事情」と題して、解体新書のできる経緯を述べたのであった（日本医師会雑誌第三七巻第六号）。

（昭和四十九年十月廿六日、回向院にて演説）

# 医史学関係論文目録

注 ゴシックは巻数、( )は号数、次の数字は頁数発行年の順で示す

## 原書

- 文明的な日本医師小考(九一〇) 布施昌一 日本医事新報 (一一九) 二七～二八、(一三〇) 一七～一八 一九七四  
 生化学者の科学運動—一九六〇年代(二) 中村禎里 生物学史研究 (二五) 二四～三二 一九七四

How and Why did Descartes Support the Theory of Blood Circulation? Teiri Nakamura Japanese Studies in the History of Science (一三) 七五～八〇 一九七四

- 日本の医療史 酒井シヅ 薬事新報 (七四二) 九五～九六、(七四三) 一一六～一二七、(七四六) 一七九～一八〇、(七四七) 二〇〇～二〇一、(七五〇) 二六三～二六四、(七五一) 二八四～二八五、(七五四) 三四七～三四八、(七五五) 三六八～三六九、(七五九) 四八三～四八四、(七六〇) 五〇四～五〇五、(七六三) 五六七～五六八、(七六四) 五八八～五八九、(七六七) 六五一～六五二、(七六八) 六七二～六七三、(七七二) 七三五～七三六、(七七二) 七五六～七五七、(七七九) 九〇六～九〇七、(七八一) 九八一～九八二、(七八四) 一〇四三～一〇四四、(七八五) 一〇六四～一〇六五、(七八八) 一一二七～一一二八、(七八九) 一一四五～一一四六 一九七四

医史学のすすめ 大島蘭三郎 Japan International Medical

Tribune 六(四三)七 一九七三

人間と病氣と医療と医学史の視角 中川米造 Modern Media

二〇(二)五六～七四 一九七四

## 古代

古代医療術の教訓 黒岩東五 健康医学(二四五)一 一九七四

## 四

咒禁師及び按摩師について(上) 新村 拓 日本医史学雑誌

二〇(四)六八～七四 一九七四

古代医療における蛭食治・湯治について 新村 拓 日本歴史

(三二八)二四～三二 一九七四

古事記における医学思想と医療 三木 毅 札幌医科大学医学

進学課程紀要 一四 七～一八 一九七三

律令医療制度の研究(三) — 典薬療官人の俸禄 — 奥富敬之

文科研究誌(三) (日本医科大学文科系研究室) 一九七四

「唐律令」および「養老律令」における有疾獄囚の待遇について

新村 拓 日本医史学雑誌 二〇(二)一三四～一四一 一九七四

「肉食五卒」について 新村 拓 古医学月報(二〇)四～五

一九七四

奈良時代の食生活 蔵田 蔵 健康開発(三八)一一～二〇

一九七四

平安時代の風病 服部敏良 古医学月報(三)五～四 一九七三

三

中世

絵巻物に描かれた日本の医療 樋口誠太郎 日本医史学雑誌

二〇(二)一五一〜一六三 一九七四

庶民史料にみる江戸時代の疾病 立川昭二 日本医史学雑誌

二〇(四)二五〜四七 一九七四

徳川幕府における医師の身分と職制について 久志本常孝 東京慈恵会医科大学雑誌八九(三)三二九〜三四一 一九七四

近代

近 代

独逸語を迎える頃の日本の医学 福島玄洞 医学のあゆみ 八

六(六)三三三〜三三七 一九七三

日本医学近代化の歩み

William Harvey「血液循環説」の受け入れ 阿知波五郎

Modern Medicine (二二二) 八六〜八九 一九七四

Ambroise Paré「外科技術」の受け入れ 阿知波五郎 Modern Medicine (二二四) 七六〜七九 一九七四

明治初年の英語医学辞書 阿知波五郎 Modern Medicine (二二五) 一〇五〜一〇八 一九七四

日本最初の解剖——山脇東洋 阿知波五郎 Modern Medicine (二二六) 一二四〜一二七 一九七四

蘭書から翻刻本刊行期・明治初期への胎動 阿知波五郎 Modern Medicine (二二七) 一〇〇〜一〇三 一九七四

Hermann Boerhaave 思想の受け入れ 阿知波五郎 Modern Medicine (二二八) 九八〜一〇三 一九七四

蘭学・洋学・明治初期医学の連なり洋学受容期の分類 阿知

波五郎 Modern Medicine (二二九) 一一四〜一二七 一九七四

四

解体新書(安永三年、一七七四年)の刊行 蘭学の創始 阿

知波五郎 Modern Medicine (三〇) 一一三〜一二七 一九

七四

蘭学啓蒙期 大槻玄沢(一七五七〜一八二七)を中心に 阿

知波五郎 Modern Medicine (三二) 一一三〜一二七 一

九七四

Lorenz Heister の受容 阿知波五郎 Modern Medicine (三二) 一一五〜一二八 一九七四

日本近代医学の芽生えと特質 賀川玄悦を中心として 阿知

波五郎 Modern Medicine (三四) 一一三〜一二七 一九

七四

江戸時代における西欧遺伝学の受容と紹介 矢部一郎 日本医

史学雑誌 二〇(二)一二五〜一三三 一九七四

明治三三年の医科用印刷物実価表 医人薬人 二二(六)一七

一九七四

現 代

戦後医療三〇年史 ペニシリン・ステロイド・心臓・脳外科・公

害病 黒川利雄他 Modern Medicine 三(一一)二二〜四

五 一九七四

インスリン発見五〇年の歩みと今後の展望 阿部正和 日本臨

床三二(七)二二五〜二二六 一九七三

医制百年 西洋医学と東洋医学 堀籠章史 Medical Techno-



logy 11 (四) 1119~1110 一九七四

座談会 戦後医療三〇年史 黒川利雄・広沢弘七郎・真下啓三

・大國真彦・重松逸造・浦田 卓 Modern Medicine (三四)

二二~四五 一九七四

戦後医療技術史年表作成の試み 佐藤三重子・上林茂暢 医史

研(医学史研究) (四一) 五一~五一七 一九七四

戦後百年とこれから—座談会— 武見太郎・藤野恒三郎・滝沢

正・佐分利輝彦 日本医事新報 (二六三七) 四三~四五 一九

七四

患者運動より見た戦後医療史—序論と問題提起— 長 宏

医学史研究 (四一) 五三八~五三九 一九七四

戦後医療技術史の特徴と課題をめぐって—医療史の技術史的側面

— 林 正秀 医学史研究 (四一) 五四一~五四三 一九七

四

医療社会事業のあゆみ 中島さつき 医学史研究 (四一) 五三

五~五三七 一九七四

戦前の無産者医療運動から学ぶこと—医療の課題と民医連二〇

年— 三谷和合 民医連医療 (二五) 一二~一七 一九七三

医療制度史

医制百年にあたって 曾田長宗・橋本正己 公衆衛生 三八(九)

四五二~四六三 一九七四

日本医療制度史(八四~九三) 菅谷 章 社会保障 二八

(七五五) 二〇~二二、(七五六) 四〇~四二、(七五七) 四〇

~四二、(七五八) 一八~一九、(七五九) 二〇~二二、(七六

〇) 一八~二二、(七六一) 一八~二二、(七六二) 二〇~二

一、(七六四) 一六~一八、(七六五) 四〇~四三 一九七四

英国NHS機構改革に関する史的考察 多田羅浩三 日本医

事新報 (二六一七) 八三~八六、(二六一八) 七九~八一、(二

六二〇) 八九~九二、(二六二二) 八九~九二、(二六二五) 八

八~九二、(二六二六) 八八~八九、(二六二七) 八五~八九、

(二六二八) 八九~九二、(二六三四) 八七~九〇 一九七四

入院看護科の歴史的考察 安田明正 社会保険旬報 (一一

五) 九~一一 一九七四

私の社会保障史 築 誠 社会保険 二四(一〇) 一八~二

一、二五(三) 一〇~一三、(四) 一二~一五、(六) 二二~二

五(七) 二二~二五 一九七三~四

医療経済思想の展開 日野秀逸・野村拓 健康会議 二五(二)

五一~五八、(四) 四四~五一、(五) 五〇~五九、(六) 五一

六〇、(八) 四一~四七、(九) 四九~五九、(一一) 四八~六

一、二六(一) 五二~五八、(二) 四五~五四、(三) 五〇~五

九、(四) 五二~六八 一九七三~四

占領体制下の医事行政 久下勝次 医療と人間と(四) 一七九

~一八六 一九七四

診療報酬の歴史 助川 仁 社会保障 二八(七六七) 一八~

一九、(七六八) 二〇~二二、(七六九) 四八~四九、(七七〇)

一九~二〇、(七七二) 二〇~二二、(七七三) 二〇~二二、

(七七三) 二〇~二二、(七七四) 二〇~二二、(七七五) 一六

~一八、(七七六) 三三~三九、(七七七) 二〇~二二、(七七

八) 四二~四三、(七七九) 一六~一七、(七八〇) 二〇二一、  
(七八二) 一六~一七、(七八三) 二〇~二二、(七八四) 二〇  
~二二、(七八五) 三四~三五、(七八六) 一六~一七、(七八  
七) 二〇~二二、(七八八) 一六~一七、(七九〇) 一六~一  
七、(七九二) 二〇~二二、(七九三) 四〇~四一、(七九三)  
二〇~二二 一九七四

医療保険史説

戦争と社会保険と敗戦と 布施昌一 ペン十字 六(四) 二  
四~二七、(五) 四〇~四三、(六) 三〇~三四 一九七四  
8・15敗戦と社会保障 布施昌一 ペン十字 六(八) 三四  
~三八、(一〇) 二二~二四、(一一) 二二~二五、(一二)  
一六~二〇 一九七四  
健康保険開始される 布施昌一 ペン十字 五(三) 三四~四  
〇、(四) 二五~三一、(五) 二六~三一、(六) 二四~三〇  
一九七三

医学教育

古医書からみた医学教育の変遷 米田正治 島根医学 五(二)  
一二五~一三八 一九七四  
千葉大学医学部と医史学 大島蘭三郎 千葉医学会雑誌 四九  
(三) 一四八 一九七三

明治初期の唐張医学史資料の二、三 名古屋大学医学部の始源と  
偉大な先人たち 吉川芳秋 保険診療 二八(一〇二八) 五  
八~六〇、(一〇二九) 五八~六〇、(一〇三〇) 九四~九六、  
一九七三

「医学第一号」 松永 勝 古医学月報(一一) 六~七 一九  
七四

ソビエトの医療技術者教育の歴史と現状 中村 実 日本放射  
線技師会雑誌 二一(一〇) 二八~三二 一九七四

大阪における医薬学校の発展 中室嘉祐 薬事日報(五〇七三)  
二八 一九七四

大分県病院兼医学校 明治一〇年(一八七七年)ごろの医学校

荒巻逸夫 大分県医師会会報(二一七) 八~一一、(二二八)  
一四~一七、(二二九) 二二~二五、(二三〇) 一六~一九、  
(二二二) 二五~二七、(二三三) 五~九、(二三三) 五~九、  
(二三四) 七~一〇、(二三五) 一五~一八、(二三六) 七~  
三、(二三七) 二七~三〇、(二三八) 一五~一八 一九七三  
済生学舎と東京女医学校について—女医養成を中心として—  
三上昭美 史学論集対外関係と政治文化、第Ⅲ 五一五~五四  
四 一九七四

医学史の上からみた日本医科大学 小川鼎三 日本医科大学雜  
誌 四〇(六) 三五六~三五九 一九七三

明治医学生ノート研究 太田甚之助ノート・一般原因論 望月  
学 古医学月報(八) 六~八、(九) 六~七 一九七四

広島医学校の学生ノート明治一六年から 太田典礼 広島医学  
二七(一) 九二~九四 一九七四

Imperialism and Medical Education in China John Z. Bowers  
Bulletin of the History of Medicine 四八(四) 四四九~四六  
四 一九七四

- 三重大学医学部の歴史 森田得三・吉田洋一 Drug & Medical News (四一六) 一九七四
- 私と鳥取大学医学部 村江通之 Drug & Medical News (四一五) 一九七四
- 信州大学医学部の歴史 赤羽治郎 Drug & Medical News (四一四) 一九七四
- 久留米大学医学部の歴史 王丸 勇 Drug & Medical News (四一三) 一九七四
- 名古屋市立大学医学部の歴史(とくに女子医専の発足をめぐって) 植松平馬 Drug & Medical News (四一一) 一九七四
- 岐阜大学医学部の歴史 館 正和 Drug & Medical News (四〇九) 一九七四
- 大阪大学医学部の歴史 曲直部寿夫 Drug & Medical News (四〇八) 一九七四
- 千葉大学医学部史話 松本 胖 Drug & Medical News (四〇七) 一九七四
- 岩手医科大学の歴史 吉田昌男 Drug & Medical News (四〇六) 一九七四
- 京都府立医科大学の歴史 鯖田豊之 Drug & Medical News (四〇五) 一九七四
- 熊本大学医学部のあゆみ 忽那将愛 Drug & Medical News (四〇四) 一九七四
- 群馬大学医学部の歴史 川合貞郎 Drug & Medical News (四〇三) 一九七四
- 長崎大学医学部の歴史 中西 啓 Drug & Medical News (四〇二) 一九七四
- 金沢大学医学部の歴史 津田進三 Drug & Medical News (四〇一) 一九七四
- 弘前大学医学部(青森医専)の歴史 佐藤光永 Drug & Medical News (四〇〇) 一九七四
- 横浜市立大学医学部の歴史 沖田 実 Drug & Medical News (三九九) 一九七四
- 名古屋大学医学部史話(こぼれ話) 吉川芳秋 Drug & Medical News (三九八) 一九七四
- 北海道大学医学部の歴史 高山坦三 Drug & Medical News (三九七) 一九七四
- 札幌医科大学の二五年 八十島信之助 Drug & Medical News (三九六) 一九七四
- 岡山大学医学部の歴史 中山 沃 Drug & Medical News (三九五) 一九七四
- 東京医科大学の歴史 原 三郎 Drug & Medical News (三九四) 一九七四
- 日本医科大学の歴史 橋本泰彦 Drug & Medical News (三九三) 一九七四
- 順天堂大学医学部の歴史 酒井シヅ Drug & Medical News (三九二) 一九七四
- 京都大学医学部の歴史 守屋 正 Drug & Medical News (三九〇) 一九七四

東京慈恵会医科大学の思い出 内山孝一 Drug & Medical News (三八九) 一九七四

東京大学医学部の歴史 大塚恭男 Drug & Medical News (三八八) 一九七四

慶応義塾大学医学部の歴史 大島蘭三郎 Drug & Medical News (三八七) 一九七四

病院史

浮浪者收容所記 浅草本願寺更生会 山本俊一 日本医事新報 (二六一二) 七〇〇七二、(二六一三) 六七〇六九、(二六一四) 七〇〇七二、(二六二〇) 七〇〇七四、(二六二五) 七〇〇七四、(二六三〇) 七二〇七四、(二六二七) 七二〇七四、(二六二八) 七二〇七四 一九七四

病院史のひとつま 国立病院再編成 尾村偉久 病院 三三二 (五) 六九、(六) 六九 一九七三

国立療養所の変遷 尾村偉久 病院 三二(七) 六九 一九七三

ある精薄施設の歴史△福祉▽の原像 木野村峰一、他 児童精神医学とその近接領域 一四(一) 四六〇五三 一九七三

わが国の私立病院の歴史的展望△私立病院のゆくえ▽ 酒井ンヅ 病院 三三(三) 二二〇二七 一九七四

戦後医療機関の変遷―「私的医療機関繁栄論」の背後で進行しているもの― 二木 立 医学史研究 (四三) 六二三〇六三〇 一九七四

オープンシステム徳山医師会病院の周辺 長田 昇 医学史研

究 (四二) 五八八〇五九三 一九七四

メーヨ・クリニック 榎 哲夫 クリニシャン 二一(一) 一〇九 一九七四

地方史

長崎医学の足跡 南蛮医学の伝来 中西 啓 東洋薬事報 一五(四) 一八〇二〇、(五) 一七〇二〇、(六) 六〇八、(七) 二〇〇三二、(八) 九〇二二、(九) 一〇〇二二、(一〇) 一八〇二二、(一一) 二二二〇二六 一九七四

長崎医学史ノート (三三二) 子の年の大風 (三) 中西 啓

長崎県医師会報 (三三六) 一一 一九七四

長崎医学史ノート (三三三) 中西 啓 長崎県医師会報 (三三三) 七) 一二 一九七四

長崎医学史ノート (三四) 杉田成卿の「医戒」 中西 啓 長崎県医師会報 (三三八)

長崎医学史ノート (三五) 谷中墓地角尾家墓碑 長崎県医師会報 (三三七) 一七 一九七四

長崎医学史ノート (三六) 「善那氏頌徳之記」付録 (一) 中西 啓 長崎県医師会報 (三四二) 一七 一九七四

長崎医学史ノート (三七) 「善那氏頌徳之記」付録 (二) 中西啓 長崎県医師会報 (三四三) 一〇 一九七四

長崎医学史ノート (三八) 「善那氏頌徳之記」付録 (三) 中西 啓 長崎県医師会報 (三四四) 四 一九七四

長崎医学史ノート (三九) 川本幸民塾生のこと 中西 啓 長崎県医師会報 (三四五) 九 一九七四

長崎医学史ノート(四一) 舍密学伝習見聞記(一) 中西 啓  
長崎医師会報(三四七) 一五 一九七四

一九世紀の新潟県下における人屍剖検事蹟の概略―知命堂病院病理解剖を中心として― 蒲原 宏 ガン新病誌(県立がんセンター新潟病院医誌) 一三(一) 九三〜九八 一九七三  
雲藩図書について 米田正治 日本医事新報(二六二七) 六六 一九七四

明治一九年刊行の「阪出譚話会報告」から 竹内庸夫 新香川(五月) 三七〜四〇、(六月) 三二〜三五、(七月) 三二〜三四、一九七二  
シーボルトが寄港した塩飽島造船所 竹内庸夫 新香川 三一〜三五 一九七二

徳島県眼科医学会小史 福島義一 日本の眼科(二四四) 二六二〜二六六 一九七四  
昔の古河市医師群とその周辺 遠藤 靖 古河医師会報(七) 一五〜一九 一九七四

古河と河口信伍 古河の医学史 川島恂二他 医人薬人 二二(三) 二二〜三〇 一九七三  
医界風土記 広島県・富士川游と芸備医学会 佐藤美実 日医ニュース(二九六) 一九七四

秋 日医ニュース(二九七) 一九七四  
医界風土記 愛知県・理博第一号医人伊藤圭介の長寿 吉川芳

ス(二九八) 一九七四  
医界風土記 京都府・京都と華岡青洲 宗田 一 日医ニュース(二九九) 一九七四

医界風土記 静岡県・沼津病院創設のいきさつ 土屋重朗 日医ニュース(二九九) 一九七四

医界風土記 愛知県・東三河地方の種痘に関して 安井 広 日医ニュース(三〇〇) 一九七四  
医界風土記 愛知県・施療医再生堂伊藤玄沢と平洲 吉川芳秋 日医ニュース(三〇一) 一九七四  
医界風土記 広島県・吉益東洞没後から洋学の勃興まで 江川 義雄 日医ニュース(三〇二) 一九七四  
医界風土記 宮城県・赤星研造のこと 村主 巖 日医ニュース(三〇四) 一九七四  
医界風土記 山形県・種痘の碑と遠山椿吉 杉浦守邦 日医ニュース(三〇五) 一九七四  
医界風土記 佐賀県・種痘・東大医学部・日本赤十字 織田五 二七 日医ニュース(三〇六) 一九七四  
医界風土記 北海道・一年で終った幻の札幌医学校 高山坦三 日医ニュース(三〇七) 一九七四  
医界風土記 愛知県・尾張いちつみや在々医師 竹内幹彦 日医ニュース(三〇八) 一九七四  
医界風土記 鹿児島県・種子島久時の疾病を中心として 河内 和夫 日医ニュース 一九七四  
医界風土記 愛媛県・二宮敬作、鎌田玄台 宮内孝夫 日医ニュース(三一〇) 一九七四  
医界風土記 島根県・石州の種痘 松本直樹 日医ニュース(三一二) 六 一九七四

医界風土記 岩手県・幕末の若者の意気 岩淵憲次郎 日医ニ

ユース(三二二) 一九七四

医界風土記 滋賀県・鬼才黒田麴廬 中神良太 日医ニユース

(三二四) 一九七四

医界風土記 山形県・上山出身の医人たち 宇留野勝弥 日医

ニユース(三一五) 一九七四

医界風土記 青森県・「解体新書」と津軽 松本明知 日医ニ

ユース(三二六) 一九七四

医界風土記 愛知県・蘭医シーボルト事件と熱田宮宿 吉川芳

秋 日医ニユース(三一七) 一九七四

医界風土記 神奈川県・丸善のはじまり 大滝紀雄 日医ニ

ユース(三一八) 一九七四

佐倉藩の西洋医学 篠丸頼彦 医海時報(六三二)三 一九七四

幕末多摩医療史雑考 新藤恵久 日本歯科医師会雑誌 二五

(二〇)一〇七〇~一〇七一 一九七三

小塚原と山谷との管見(抄) 関根正雄 日本医史学雑誌 二

〇(三)一七~一九 一九七四

北海道の法医学五〇年 錫谷 徹 北海道医学雑誌 四九(一)

一九~二二 一九七四

北海道の結核五〇年―臨床の部― 有末四郎 北海道医学雑誌

四九(一)一一~一八 一九七四

北海道臨床病理五〇年 西風脩・永井竜夫 北海道医学雑誌

四九(一)五~一〇 一九七四

北海道の腫瘍学五〇年―臨床の部― 和田武雄 北海道医学雑誌

誌 四九(一)一~四 一九七四

伝記(双伝)

小浜における杉田・中川家の新資料(抄) 田辺賀啓・河原朝

夫・小畑昭八郎 日本医史学雑誌 二〇(三)三一~三三 一

九七四

お医者山脈 徳川白布 X・レイ・ジャーナル 五(五二)二

六~二七、(五三)二六~二七、(五四)二八~二九、(五五)

二五~二六、(五六)二八~二九、(五七)二六~二七 一九七

三

六(六三)二六~二七、(六四)三〇~三一、(六五)二八~二

九、(六六)二六~二七、(六七)二六~二七、(六八)二六~

二七、(六九)二六~二七、(七〇)二六~二七 一九七四

土生玄碩と二宮桃亭 小都勇二 吉田郷土資料館叢書第Ⅲ集

二〇頁 一九七四

道庵と徳本 新藤恵久 中里介山研究(六)一~七 一九七四

小金井良精先生と Erwin von Beck 博士 鈴木 尚 人類学

雑誌 八二(一) 一九七四

玄白と良沢の人となり 大滝紀雄 人間の医学(四七)二九~

三一 一九七三

明治開化期の医人を語る 小川鼎三・石橋長英・原三郎・椿八

郎 医家芸術 一八(一一)、一六~二八、(一二) 一九七四

医家の系譜 伊良子道牛 漢・蘭兼用の外科子孫に朝廷医生む

中野 操 日経メデイカル 三(八)一二八~一二九 一九七

四

医家の系譜 江馬春齡美濃蘭学の名を世にとどろかす 青木一

郎 日経メディカル 三(一一)一四四〜一四五 一九七四

医家の系譜 甲斐士幹 代々日向延岡で地域医療に励む 中野

操 日経メディカル 三(六)一二八〜一二九 一九七四

医家の系譜 伴榮藩 一代でかちえた奥医師の座 松田博市

日経メディカル 三(七)一三六〜一三七 一九七四

近世伊勢の本草学者 松島 博 古医学月報(一一)五 一九七

四

明治初期のわが国医療制度の確立に貢献した人脈 岩佐純・相良

知守・長与専斎の事跡を中心にして 菅谷 章 公衆衛生

三八(九)四六四〜四六九 一九七四

岐阜県が生んだ蘭方医 青木一郎 医海時報(六二〇)三一

九七四

公衆衛生学人物山脈 長与専斎・森林太郎・後藤新平 田中正

四 日本公衆衛生雑誌 二〇(一〇付録)五四〜五八 一九七

三

京都における吉益東洞と門人たち 須羽源一 広島医学 二七

(二)八八〜九一 一九七四

安藤昌益と本居宣長 宮本 忍 胸部外科 二六(一)一〇

一九七三

フランス人医学者の横顔 フランス整形外科医 \* d' Aubigné 教

授と Julet 教授 弓削大四郎 日仏医学 一四(一〜二)八

〇〜八四 一九七三

緒方洪庵と福岡藩の医者達 奥村 武 西海時報(六三一)三

一九七四

越後の蘭方医森田兄弟について 長谷川一夫 日本医史学雑誌

二〇(三)四四〜五〇、(四)七六〜八一 一九七四

伴道与法眼榮藩の家系とその子孫 伴七三雄 日本医史学雑誌

二〇(四)八一〜八七 一九七四

栗山孝庵と杉田玄白及び小田野直武(抄) 田中助一 日本医

史学雑誌 二〇(三)一五〜一六 一九七四

伝記(個人)

網脇竜妙と看護 清水昭美 総合看護 八(二)六八〜八三

一九七三

医人安藤昌益 児玉栄一郎 日本細菌学雑誌 二九(三)五二

八〜五二九 一九七四

アレキサンドル伝補遺 今田見信 日本歯科医史学会々誌 二

(二)二六〜二七 一九七四

アリストテレスの遺伝理論とその意義(一) 石川 純 生物

学史研究(二五)一〜二 一九七四

アリストテレスの遺伝理論とその意義(二) 石川 純 生物

学史研究(二六)二二〜三三 一九七四

青山胤通先生と医局の思い出 高村庄太郎 医家芸術 一八

(一一)三〇〜三三 一九七四

海軍病院お雇い医師 W. Anderson 長門谷洋治 医学史研究

(四三)六三三〜六三三 一九七四

日本医人伝 浅田宗伯 酒井シヅ 日本医事新報ジュニア版

(一三八)二六〜二八 一九七四

古今医人伝(一〇) 石原喜久太郎 米田正治 島根県医師会  
 ニュース(三一〇) 二一~一八 一九七四  
 五〇歳で発起し西説「草木図説」を出版した美濃大垣の医家飯沼  
 慾齋翁 吉川芳秋 現代医学 二二(一) 一二七~一四八  
 一九七三  
 入沢達吉先生の思い出 鰐淵健之 医家芸術 一八(一) 三  
 八~三九 一九七四  
 池田玄丈翁の墓に詣す 竹内扁夫 香川県医師会誌 二四(一)  
 二二~二五  
 上田秋成(一) 岩橋小弥太 国学院雑誌 七五(一) 一九七  
 四  
 宇田川榕庵の『植学啓原』の原図について 矢部一郎 科学史  
 研究 一二(一〇八) 二一九~二二二 一九七三  
 宇田川榕庵と植物分類 矢部一郎 法政大学教養部紀要(二〇)  
 一二九~一四九 一九七四  
 上山百姓一撥宇留野春庵 宇留野勝弥 一九七四  
 宇留野春庵を偲ぶ 宇留野勝弥 日本医事新報(二六四) 六六  
 ~六八 一九七四  
 ベルツ門下江馬賤男とその周辺(上)(中)(下) 青木一郎  
 日本医事新報(二六一六) 六六~六八、(二六一七) 七〇~七  
 二、(二六一九) 七二~七四 一九七四  
 土佐国最初の女医野中婉女の話 古城九州男 日本医事新報  
 (二六〇七) 六五 一九七四  
 法眼奥先生の墓 比嘉良宗 日本医事新報(二六二一) 六五~

六七 一九七四  
 太田雄寧の事蹟をめぐって 川瀬 清 薬史学雑誌 八(一)  
 二) 一~六 一九七三  
 日本医人伝 荻原吟子 酒井シヅ 日本医事新報、ジュニア版  
 (二二二) 二五~二六 一九七四  
 オスラー博士の生涯  
 看護学校の第一回卒業式 日野原重明 *Medicina* 一一(一)  
 〇) 一三五~一三五五 一九七四  
 活発な学会活動と人知れぬ結婚式 日野原重明 *Medicina*  
 一一(一一) 一四九三~一四九五 一九七四  
 内科学テキスト執筆のころ(一八九〇~一八九二) 日野原  
 重明 *Medicina* 一一(七) 九五三~九五五 一九七四  
 五年ぶりの欧州旅行(一八八九~一八九〇) 日野原重明  
*Medicina* 一一(四) 五四九~五五一 一九七四  
 ボルチモアに赴任の年(一八八九) 日野原重明 *Medicina*  
 一一(一二) 二六九~二七一 一九七四  
 天心とその健康観 岡倉古志郎 医療と人間と(三) 六七~七  
 一 一九七三  
 竹孫(岡西為人)先生半生記由来 武田健一 漢方の臨床 二  
 一、(二) 四六~五一、(三) 四一~四六、(四) 四九~五二、  
 (五) 三六~四四、(六) 四二~五一、(八) 四九~五一、(九)  
 三四~三六、(一〇) 四五~四八 一九七四  
 「蘭学事始」の再発見者神田孝平 木下繁太郎 健康会議 二  
 六(八) 三八~四〇 一九七四



田原藩医萱生郁蔵と使西日録 竹内孝一 日本医事新報(二六  
一七)六三~六六、(二六一八)五四~五六、(二六二〇)六五  
~六八 一九七四

香月牛山先生の事績とその家系 難波恒雄 漢方の臨床 二一

(九)四九九~五一六 一九七四

香月牛山墓碑のこと 宮崎綾子 漢方の臨床 二一(六)三四  
~三八 一九七四

貝原益軒の学問と方法『大和本草』における儒学と科学—

辻 哲夫 思想(六〇五)五七~七〇 一九七四

医学の進歩になった人々 桂田富士郎 中山 沃 検査と技

術 二(七七)五〇~五二、(八)五〇~五二、(九)五〇~五二  
一九七四

蘭医「河口信任」のこと 川島恂二 古河医師会報(七)四五  
~五二 一九七四

ギヤルサン教授を偲ぶ 吉倉範光 日仏医学 一四(一~二)  
一~六 一九七三

名を残す医学の先達たち 北里柴三郎先生のこと 三橋 進  
Medical Digest 111(1) 1111~1116 一九七三

北里博士とベスト菌 森下 薫 医海時報(六二二)三 一九  
七四

呉秀三先生と周辺の人びと—とくに森鷗外および呉文聰との関係  
をめぐって— 岡田靖雄・吉岡真二・長谷川源助 医学史研

究(四一)五四四~五五〇 一九七四

大叔父隈川宗雄 大原嘗一郎 医家芸術 一八(一一)三四~

三五 一九七四

黒川良安と金沢医学館 加藤豊明 医海時報(六二二)三一  
九七四

黒川良安について 津田進三 石川郷土史学会々誌(七)八七  
九五 一九七四

孫の代で絶えた立齋の牛痘術へ医家の系譜—桑田立齋— 中野  
操 日経メディカル 三(四)一八八~一九九 一九七四

若き日の久保緒之吉先生—一通の書翰と父祖の系譜— 田中一  
弘 日本医事新報(二六〇二)六九~七〇 一九七四

満州コレラの防疫と北里柴三郎先生の偉業 黒川清之 日本医  
事新報(二六三五)六三~六六、(二六三六)七三~七四 一  
九七四

先師ケイズル伝 坂本 勇 日本獣医史学研究会報(五)一一  
~一五 一九七四

ロベルト・コッホの碑 渡辺宗治 日本医事新報(二六三九)  
六六~六七 一九七四

日本医人伝 佐藤尚中 酒井シヅ 日本医事新報ジュニア版  
(一三七)二七~二八

佐藤進伝 小川鼎三 順天堂医学 二〇(一)一〇一~一〇六  
(二)一三三~一三九、(三)三六一~三六八、(四)五四五~  
五五一 一九七四

相良知安 医制百年にちなんで 橋本正己 日医ニュース(三  
一〇)九 一九七四

相良知安という人 鍵山 栄 古医学月報(三)七 一九七三

相良知安という人 鍵山 栄 古医学月報(三)七 一九七三

日本医人伝 相良知安 酒井シヅ 日本医事新報ジュニア版

(一三二) 二九〇 一九七四

佐渡の奇人 司馬凌海 大滝紀雄 人間の医学(五七) 六三

六五 一九七三

シユパイツァーにみる援助の思想 笠原芳光 看護 二六(九)

四〇一 一九七四

日本医人伝 清水郁太郎 酒井シヅ 日本医事新報(一三三)

二五〇 一九七四

シールボルトの日本植物学上の記録 石山禎一 生物学史研究

(二五) 一三〇 一九七四

シールボルトと門人 緒方富雄 日本医史学雑誌 二〇(一) 一

〇三九 一九七四

シールボルトの処方とくにオクリカニクリなどのこと 小川鼎

三 日本医史学雑誌 二〇(一) 三九〇 四六 一九七四

画家の眼を開いたシールボルト 兼重 護 日本医史学雑誌 二

〇(一) 四六〇 五二 一九七四

シールボルトと長州 田中助一 日本医史学雑誌 二〇(一) 五

三〇五 一九七四

シールボルトの治療法 中野 操 日本医史学雑誌 二〇(一)

五九〇 六三 一九七四

蘭学史におけるシールボルトの役割 沼田次郎 日本医史学雑誌

二〇(一) 六四〇 七〇 一九七四

医師としてのシールボルト 山形敬一 日本医史学雑誌 二〇

(一) 七二〇 七五 一九七四

日本眼科史上のシールボルト 福島義一 日本医史学雑誌 二〇

(一) 七六〇 八五 一九七四

一資料から見た科学者シールボルト 矢部一郎 日本医史学雑誌

二〇(三) 二四九 一九七四

杉田玄白の人間観 宮本 忍 胸部外科 二六(五) 三四七

一九七三

医学博士杉村隆先生略歴と研究業績 武田科学振興財団 一九

七四

菅江真澄と珪肺へ新社会衛生史ノート 三浦豊彦 労働衛生

一五(五) 四五〇 四八 一九七四

建部清庵 杉靖三郎 健康医学(二二五) 六二〇 六八、(二二

六) 五四〇 五七 一九七二

建部清庵 杉靖三郎 健康医学(二二九) 六二〇 六五、(二三

三) 六二〇 六五、(二三五) 六二〇 六五、(二四〇) 六二〇 六五

(二四四) 七〇〇 七三、(二四六) 三二〇 三五 一九七四

高畑挺三先生のことわが国耳鼻咽喉科創始者の一人 後藤敏郎

耳鼻咽喉科展望 一七(三) 三九五〇 三九九 一九七四

名を残す医学の先達たち 高安右人のこと 高安 晃 Medical

Digest III(1) 二七〇 三一 一九七三

創学の師を語る 高本兼寛と東京慈恵医科大学 赤羽武夫

Medical News(一五八) 三二、(一五九) 三二、(一六〇) 三

二、(一六一) 三二、(一六二) 三二、(一六三) 三二 一九七

四

高野長英の医学思想 宮本 忍 胸部外科 二六(八) 五五八

一九七三

幕末の医人 高野長英 米田該典 漢方医薬(二九) 一六五

一九七四

心臓刺激伝導系発見者―田原淳先生の生誕百年を迎えて 今井

環 臨床と研究 五〇(六) 一一―一二 一九七三

高野六郎 結核予防会行政創業の人 近藤宏二 複十字(一一二)

一四―一八 一九七三

高木兼寛先生の想い出 榎木穂積 医家芸術 一八(一一) 四

二―四三 一九七四

医家の系譜 坪井信道 初の本格的内科診断学「診候大概」著す

青木一郎 日経メディカル 四(一一) 一三六―一三七 一九七

五

労働医学の創始者暉峻義等をおもう 田辺正忠 健康会議 二

五(七七) 四三―四五 一九七三

土肥慶蔵先生 北村包彦 医家芸術 一八(一一) 四〇―四一

一九七四

医学博士長石忠三先生略歴と研究業績 武田科学振興財団 一

九七四

ナイチンゲールに関する(二、三)の資料紹介と考察(Ⅱ) ナ

イチンゲールとナイチンゲール養成学校について 柴田寿子

看護教育 一五(二) 一一六―一二二 一九七四

灯をかかげた人々(一一五) 種痘輸入の功績者檜林宗建

山野光雄 健康保健 二七(九) 五六―六四 一九七三

中井木菟麿翁の業歴 羽倉敬尚 懷徳(四四) 一―一二 一九

七四

日本医人伝 長与專斎 酒井シツ 日本医事新報ジュニア版

(一三六) 一七―一八 一九七四

日本医人伝 長井長義 酒井シツ 日本医事新報ジュニア版

(一三五) 一七―一八 一九七四

医者としての Nicolaus Copernicus Wiold J. Rudowski 酒井

シツ 生体の科学 二五(五・六) 一〇九―一一七 一九七

四 海外医療の先駆(一) 野口英世 高木 功 日本の医療協力

(四六) 六 一九七三

「七新薬」の出版をたすけた浜口梧陵 吉川芳秋 医海時報

(六一五) 二 一九七四

奏佐八郎先生とベスト 春日忠善 診断と治療 六一(一一)

二〇四―二〇四三 一九七三

原南陽先生伝 石島 弘 水戸市医師会創立八二周年記念出版

一九七四

結核医原栄 小松良夫 医学史研究(四三) 六一五―六二〇

一九七四

琵琶湖畔の橋田邦彦先生の記念碑 内山孝一 日本医事新報

(二五九九) 六六―六七 一九七四

橋田邦彦先生との出会い―ゆれ動く心の軌跡― 金田光雄 日

本医事新報(二六〇〇) 七〇―七二 一九七四

パリに林研海の墓を訪ねる 大滝紀雄 日本医事新報(二六四

二) 六七―六八 一九七四

医学の進歩になった人々 奏佐八郎 中山 沃 検査と技術

二(四) 五〇〇五二、(五) 五〇〇五二、(六) 五〇〇五二、一  
九七四

鈴木教授の「医聖ヒポクラテースに関する二、三の疑問」を説  
みて(上)(下) 西山諭義 日本医事新報(二六四〇) 六

六〇六七(二六四一) 六九〇七〇 一九七四

医学史おぼえがき ヒポクラテースの周辺 梶田 昭 病体生理

(九) 五〇一〇 一九七四

ブリストリの酸素発見—一七七四年八月一日— 渡辺慶昭

蘭学資料研究会研究報告(二八九) 一〇一〇 一九七四

富士川游を語る 佐藤美実 広島医学 二八(一) 五〇七 一  
九七四

エルウィン・ベルツ Gerlard Vescovi 石橋長英・今井正共訳

日本新薬株式会社 一九七四

クロード・ベルナル 森 優 臨床と研究 五〇(八) 一  
三〇一四 一九七三

クロード・ベルナルと血管支配神経 森 優 臨床と研究

五〇(一〇) 一七〇一八 一九七三

宣教医ホブソンとその中国文医学書 吉田 寅 古医学月報

(八) 三五、(九) 三〇五 一九七四

曲直瀬道三ヤソ教入信についての事情 矢教道明 漢方の臨床

二一(三) 四七〇四八 一九七四

「前野良沢」寸考(抄) 末中哲夫 日本医史学雑誌 二〇

(三) 一六 一九七四

初代曲直瀬道三年譜と逸話補遺 矢教道明 漢方の臨床 二二

(一) 二〇〇三二 一九七四

日本医人伝 松山棟庵 酒井ンヅ 日本医事新報(一三四) 一

七〇一八 一九七四

マックブライド博士と私 藤岡俊健 日本獣医史学研究会報

(五) 二〇四 一九七四

三井元靄先生に関する覚書 竹内庸夫 香川県医師会誌 二四

(二) 一九二二 一九七二

森鷗外の小倉年譜・考証(考証篇) 1 小林安司 北九州大学

文学部紀要(一〇) 一九七四

「森鷗外の会」報告—昭和一二—一三年東北大学—資料— 医

学史研究(四三) 六三四〇六四七 一九七四

続・医師としての森鷗外(一)~(三) 伊達一男 日本医事新

報(二六〇〇) 六七〇六九、(二六〇五) 五八〇六〇、(二六〇

七) 七一〇七四 一九七四

鷗外と熊本 西山諭義 「鷗外」(一四) 四八〇六七 一九七

四人生の正師・森田正馬先生(上) 森田正馬生誕百年記念によ

せて 八木敏夫 生活の発見 一七(六) 二九〇三二 一九

七三

J・L・ヤンソン先生伝 坂本 勇 獣医畜産新報(六〇六)

一〇〇一四 一九七四

山極勝三郎先生 長沢米蔵 医家芸術 一八(一一) 三五〇三

七 一九七四

湯本求真先生の思い出 吉原浅吉 漢方の臨床 二一(一〇)

四九 一九七四

吉益東洞先生の功績 大塚敬節 漢方医薬 (三二) 二五四〜二

六二 一九七四

吉田龍藏 石田憲吾 広島医学 二七 (三) 三〇五〜三〇九

一九七四

学徒としての吉益東洞 西丸和義 広島医学 二七 (三) 一〜

一二 一九七四

結核になやんだ知名人 (一一) ランセル 岡西順二郎 複十字

(一一三) 九 一九七三

LINNAEUS・GAREVENーリンネウスの思想とその背景ー佐

藤達策 日本大学松戸歯科大学一般教育紀要 (二) 六〇〜六六

一九七四

仙台医学専門学校の魯迅 今泉君義 日本医事新報 (二六三八)

六七〜六八 一九七四

エルドリッチと父・六角謙吉 六角高雄 蘭学資料研究会研究

報告 (二八九) 一一〜二〇 一九七四

結核の予防・医療・行政につくした思い出の人 (一八) 渡辺

博・結核の研究・集団検診に貢献 鈴木邦夫 複十字 (一一

七) 六〜一〇 一九七四

解剖史

体貌観測の歴史的考察 西 大助 西医学 三六 (五) 三六〜

四一 一九七三

「解体新書」と解剖 小川鼎三・中尾善保 *Creata* (三三) 一一

六〜三〇 一九七四

ダビントの解剖遺稿 中川米造 科学の眼・自然科学と博物館

四一 (一) 一四〜一七 一九七四

解剖学実習と白菊会の役割 倉屋利一 ジュリスト 一五五〜

一六〇 一九七四

香川県における腑分け志願者の解剖記録ー「坂出譚話会報告」か

らー 竹内庸夫 香川県医師会誌 二七 (一) 二〇〜二三

一九七四

小塚原回向院内解体記念碑について 緒方富雄 蘭学資料研究

会研究報告 (二八八) 一〜九 一九七四

医師と献体ー渡辺淳一氏に寄すー 長門谷洋治 日本医事新報

(二六一四) 八九〜九〇 一九七四

△そのときどきに▽ 解体記念碑の移設・除幕 緒方富雄 医

学のおゆみ 九一 (六) 二六七 一九七四

解体新書出版後の利用 (抄) 石原 明 日本医史学雑誌 二

〇 (三) 二七〜二八 一九七四

いわゆるターヘル・アナトミアについて (その三) 序文 (抄)

酒井 恒 日本医史学雑誌 二〇 (三) 二三〜二四 一九七四

クルムス解剖書の脚注と「重訂解体新書」 (抄) 大島蘭三郎

日本医史学雑誌 二〇 (三) 二二 一九七四

八王子で発見された「解体新書」 (抄) 新藤恵久 日本医史

学雑誌 二〇 (三) 一一〜一三 一九七四

佐々木中沢の解剖と「解体新書」 (抄) 山形敏一 日本医史

学雑誌 二〇 (三) 九 一九七四

解体新書と越後の国 (抄) 蒲原 宏 日本医史学雑誌 二〇

(三) 七七八 一九七四

解体新書以前に翻訳、出版された西洋解剖書(抄) 酒井シツ

日本医史学雑誌 二〇(三) 一〇二 一九七四

解体新書訳業の語学的考察(抄) 佐藤良雄 日本医史学雑誌

二〇(三) 五〇七 一九七四

「解体新書」の「西説内科撰要」に及ぼした影響(抄) 大滝

紀雄 日本医史学雑誌 二〇(三) 三〇四 一九七四

『遠西医範』と『医範提綱』(一) 大島蘭三郎 日本医史学

雑誌 二〇(三) 三五〇 一九七四

「解体新書」出版二百年へてい談 緒方富雄・小川鼎三・大

島蘭三郎 日本医事新報(二六二〇) 四三〇 一九七四

日本近代化の起点となった「解体新書」日本近代史二百年説の要

点 謝世輝 古医学月報(一一) 一〇三 一九七四

公衆衛生史

新・社会衛生史ノート

雑誌「労働科学」の半世紀 三浦豊彦 労働衛生 一五(四)

一九七四

海女の生理学的研究のはじめ 三浦豊彦 労働衛生 一五

(六) 四五〇 一九七四

日本の高温作業場の変容 三浦豊彦 労働衛生 一五(七)

四五〇 一九七四

大原孫三郎と人絹・スフ工業の職業病 三浦豊彦 労働衛生

一五(八) 四五〇 一九七四

ミューズ事件・ボサリカ事件 三浦豊彦 労働衛生 一五

(一〇) 四五〇 一九七四

カットル氏原著「初学人身窮理」 三浦豊彦 労働衛生 一

五(一一) 四五〇 一九七四

橋南谿と珪肺 三浦豊彦 労働衛生 一五(一二) 四五〇 四

八 一九七四

社会の変革と健康 杉田暉道 経済と貿易(一一) 一〇九

一九七四

公害問題の先駆―後藤新平の「職業衛生法」― 大野木克彦

都市問題 六五(一) 七四〇 一九七四

皮膚科史

皮膚科学に貢献した医学者たち

色素性蕁麻疹 高橋吉定 臨床皮膚科 二八(一) 八〇〇 八

三、(三) 二四八 二五三、(四) 三二六 三三一、(五) 四

〇六 四一〇 一九七四

パジェット病 高橋吉定 臨床皮膚科 二八(六) 四八四 〇

四九〇 一九七四

連珠毛 高橋吉定 臨床皮膚科 二八(七) 五五五 五六二

一九七四

遺伝性表皮水泡症 高橋吉定 臨床皮膚科 二八(八・九)

六二六 六三八、(一〇) 七〇八 七二二、(一一) 七八一 〇

七八六 一九七四

急性限局性皮膚腺腫あるいはクインケ浮腫 高橋吉定 臨床

皮膚科 二八(一二) 八五五 八六一 一九七四

目でみる皮膚科の歴史

鹿の血 大矢全節 皮膚科の臨床 一六(一) 四四 一九七七  
四

Jacob Jordaeus (一五九三〜一六七八) の名画から拾う皮膚病

大矢全節 皮膚科の臨床 一六(二) 一三四 一九七四

娼婦 大矢全節 皮膚科の臨床 一六(三) 二〇六 一九七四

梅毒の晩歌 大矢全節 皮膚科の臨床 一六(四) 二六一 一九七四

病める幼児 大矢全節 皮膚科の臨床 一六(五) 三四三 一九七四

観たいという執念 大矢全節 皮膚科の臨床 一六(六) 四四五 一九七四

梅毒の守護神 大矢全節 皮膚科の臨床 一六(七) 五〇六 一九七四

草津の湯やお医者さまでも癒らない病 大矢全節 皮膚科の臨床 一六(八) 五九五 一九七四

アレルギーのバリ 大矢全節 皮膚科の臨床 一六(九) 六五五 一九七四

ローマ市を開いた双子 大矢全節 皮膚科の臨床 一六(一〇) 八八〇 一九七四

ライの守護神 大矢全節 皮膚科の臨床 一六(一一) 九八八 一九七四

ライ患者の浮彫 大矢全節 皮膚科の臨床 一六(一二) 一〇一七 一九七四

琉球政府時代の癩管理 犀川一夫 レブラ 四二(三) 一六五

外科史 一六八、一六九、一七二、一九七三

ヨーロッパにおけるカッピング療法古代より現代まで最も長く伝承された治療法 ウイリアム・プロックバンク 健康医学 (二四四) 一〇〇、一〇五 一九七四

西説内科撰要について 大滝紀雄 日本医史学雑誌 二〇(一) 一四二〜一五〇、(三) 二六八〜二七九 一九七四

形成外科事始—日本の形成外科が生まれるまで— 星栄一 外科 三六(一二) 一一九六〜一二〇五 一九七四

日本戦傷史 学統小史 中宮安夫 防衛衛生 二〇(九) 三四九〜三五五、(一二) 四八七〜四九七、二二(一) 一七〜二五、(二) 七一〜七三 一九七三〜四

日本戦傷史 兵法医学 中宮安夫 防衛衛生 二一(六) 二三九〜二四五、(七) 二九一〜二九七、(九) 三四九〜三五五、(二〇) 三八一〜三九一、(二二) 四一三〜四一八、(二二) 四三〜四四六 一九七四

軍陣医学 出月三郎 医海時報(六〇七) 三 一九七四

医科器械の歴史を語る 石山俊次他 医科器械学雑誌 四四 (一) 一〜一五 一九七四

産婦人科史 我妻 堯 大塚薬報(二七二) 三六〜三九 一九七四

避妊の歴史 我妻 堯 大塚薬報(二七二) 三六〜三九 一九七四

江戸時代産科学の母児相全への努力 杉立義一 京都医学会雑誌 一〇一七 一九七四

江

戸

時

代

産

科

学

の

母

児

相

全

へ

の

法 二四(一) 一三五〜一三七 一九七四

古代ギリシャ医学における不妊学思想 友吉唯夫 日本不妊学

会雑誌 一九(一)三〇〜三三 一九七四

江戸時代の産科医 酒井シヅ Oetara (三六) 二六 一九七四

精神病史

歴史的にみたわが国のアルコール中毒 王丸 勇 アルコール

研究 八(三) 一一三〜一一五 一九七三

沖繩シャーマニズムの歴史的考察 上江州敏夫 史正(三)

(立正大学日本史研究会誌) 一九七四

古医書にみられる精神身体医学 谷津三雄・山野博司・笹原広

重 日本歯科医史学会誌 二(二) 二八〜三一 一九七四

医学としての江戸時代精神病の治療 山田光胤 医海時報(六

一三) 三 一九七四

伝染病史および予防史

種痘法の昔と今 藤野恒三郎 診療と保険 一四(一一) 一一

八三〜一二八七、(一一) 一四二二〜一四二九 一九七二

歴史痘そう 横田万之助 感染症学雑誌 四七(一一) 四八三

四八五 一九七三

京都ジフテリア予防接種事件(昭和二三年)の実態と経過

安田 隆 健康会議 二六(六) 四二〜四四 一九七四

天然痘回想記 高野正彦 薬事新報(七四〇) 五三〜五四、

(七四二) 七四〜七五、(七四四) 一三七〜一三八、(七四五)

一五八〜一五九、(七四八) 二二二〜二二三、(七四九) 二四二

〜二四三、(七五二) 三〇五〜三〇六、(七五三) 三二六〜三二

七、(七五七) 四四一〜四四二、(七五八) 四六二〜四六三、

(七六一) 五二五〜五二六、(七六二) 一九七四

アイヌと痘瘡 辻見啓治 日本医事新報(二六二六) 六五〜六

六 一九七四

伝染性貧血病原史話 山根定吉 日本獣医史学研究会報(五)

六〇九 一九七四

豊浦郡矢玉浦虎列刺病概表―明治一九年のコレラ続行― 木下

繁太郎 医学史研究(四二) 五五九〜五七三 一九七四

安永時代の痘瘡治療 広藤成郎 薬局 二五(八) 一三三〜

一三三七 一九七四

東洋医学史

インド医学と中国医学の相違点と類似性について(抄) 伊藤

和洋 日本薬学会九四年会講演要旨集Ⅳ 九九 一九七四

西洋医学と東洋医学(沢田流開書から) 渡辺貞夫 現代医学

二二(一) 七三〜七四 一九七四

東洋医学の変遷と将来の展望 桑木崇秀 新薬と治療(一九〇)

五〇七 一九七四

医心方から学ぶものその一、二について 伊沢凡人 古医学月

報(二) 四〜五、(三) 六〜七 一九七三

医心方の復刻と解説 太田典礼 古医学月報(一) 五 一九七三

難経の成立について(抄) 丸山昌朗 日本東洋医学学会誌二四(四)

五一〇 一九七四

万病一毒論の今日的意義(第一報) 瘵証の臨床から(抄)

小川 新 日本東洋医学学会誌 二四(四) 五一〇 一九七四



瘀血をめぐって(抄) 矢数道明 日本東洋医学雑誌 二四

(四) 五一二 一九七四

神農皇帝は漢民族の祖か? 土本 重 漢方の臨床 二二(三)

五三〇五五 一九七四

素問と傷寒論の三陰三陽の名称について 藤木俊郎 漢方の臨

床 二一(四) 三〇六 一九七四

古代の日本医学と漢方医学との相違に就て 土本 重 漢方の

臨床 二一(四) 二五〇二八 一九七四

昭和四八年度漢方医界年表 矢数道明 漢方の臨床 二二(四)

二九〇三二 一九七四

温知荘雑筆

ごわち・ろくわう(牛黄・鹿黄?)のこと道三と三喜の機縁

矢数道明 漢方の臨床 二二(一一) 一九七四

レックリング・ハウゼン病多発性線維腫、日本最初の記録

矢数道明 漢方の臨床 二二(二) 三六〇三九 一九七四

道中灸用具 蒲原 宏 新潟県医師会報(二九五) 一九七四

GHQの医療政策と針灸漢方医療 鎌江真五 医学史研究(四

一) 五三九〇五四〇 一九七四

越前朝倉版「俗解八十一難経」の版木 岩治勇一 若越郷土研

究 一九(五)

中国における合作医療制度の成立と展開 守屋 洋 社会保障

二八(七八〇) 一六〇一六 一九七四

漢方の考え方孫文の食物観 木下繁太郎 健康会議 二五(一一)

二六〇三一 一九七三

王濂 唐朝の医書「外台秘要方」 蔡 宗傑 漢方医薬(二七)

一八四〇一八八 一九七三

石川先生が東京でなされた針灸の研究 代田文誌 医道の日本

三三(四) 一三〇一六 一九七四

アーユルヴェーダ(インド伝承医学) 幡井 勉 古医学月報

(五) 一〇三 一九七四

インドにおける東洋医学の歴史的考察 P・N・ブラドハン

日本農村医学会雑誌 二二(六) 六九九〇七〇〇 一九七四

スシュルタのこと 中野義照 アーユルヴェーダ研究(四) 四

八〇四九 一九七四

伊東教授訳ススルタ大医典について 針木正夫 アーユルヴェ

ーダ研究(四) 四六〇四七 一九七四

古係印度医学とのあい 杉田暉道 アーユルヴェーダ研究

(四) 四二〇四四 一九七四

名医ジューヴァカーその生い立ちと人間医学 善波 周 アーユ

ルヴェーダ研究(四) 三六〇三九 一九七四

スシュルタにみえる紺・〇とダンタシヤンクノ解釈について

杉本茂春 アーユルヴェーダ研究(四) 二八〇三五 一九七四

摩訶止観観病患境の医学的考察 奈倉道隆 アーユルヴェーダ

研究(四) 二一〇二七 一九七四

天台止観に基づく現代医学の問題点の考察 奈倉道隆 アーユ

ルヴェーダ研究(四) 一〇二〇 一九七四

アーユルヴェーダ入門

インド伝統医学への道 丸山 博 日本医事新報ジュニア版

(一三三) 一七〇一八 一九七四

衛生学実習の医学生への報告 丸山 博 日本医事新報ジュニア版(一三三) 一七〇一八 一九七四

N君とK君の書信に答える 丸山 博 日本医事新報ジュニア版(一三三) 一七〇一八 一九七四

科学と哲学と宗教と 丸山 博 日本医事新報ジュニア版(一三三) 一七〇一八 一九七四

インド医学の伝統を先覚者に学ぶ ジュニア版(一三五) 一五〇一六 一九七四

私たちのインド見聞記から 丸山 博 日本医事新報ジュニア版(一三六) 一五〇一六 一九七四

グジャラート・アヌルヴェーダ大学の紹介 丸山 博 日本医事新報ジュニア版(一三七) 二五〇二六 一九七四

アーヌルヴェーダ大学の教育と研究 丸山 博 日本医事新報ジュニア版(一三八) 二四〇二五 一九七四

古代インド医学における解剖学と生理学 ジャン・フィオリザ 上村勝彦訳 新薬と治療(一八五) 三三〇三三 一九七四

薬学史

加賀の本草学について 津田進三 漢方の臨床 二一(五) 二五〇二五 一九七四

江戸時代のオモト史 芦田 潔 植物と文化(一一二) 二〇二四 一九七四

小野蘭山『本草綱目啓蒙』覚書き 杉本つとむ 植物と文化(一一二) 一〇七〇一 一九七四

俳句の季語に投影している本草綱目の薬物文化 三浦三郎 日本医学雑誌 二〇(四) 五九〇六七 一九七四

明治時代の薬量符号 太田典礼 古医学月報(四)(五) 五〇四 一九七四

シールポルトの処方―とくにオクリカンクリなどのこと― 小川 鼎三 日本医学雑誌 二〇(一) 三九〇四五 一九七四

生薬今昔ばなし 長倉音蔵 漢方の臨床 二一(三) 三九〇四〇(四) 四七〇四八 一九七四

コウヤクの製造法 丑木幸男 群馬文化(一五二) 一九七四

近衛家旧蔵の古薬籠について 矢数道明 漢方の臨床 二一(七) 三七五〇三八五 一九七四

ランビキ 蒲原 宏 新潟県医師会報(二九二) 昭四九

竹山家真珠散看板 蒲原 宏 新潟県医師会報(二九六) 昭四九

四九

薬学分業論争の史的考察 多田羅浩三 医学史研究(四一) 五五一〇五五六(四二) 五九六〇五九九 一九七四

獣医学史

獣医関係巻物に関する研究 一長野県駒ヶ根笹古塚の安西流安贖巻物について 村井秀夫・松尾信一 村井秀夫退官記念論文 一九七四

米國戦史に現われた北ビルマ作戦の日本軍馬 逆瀬川貞幹 日本獣医学研究会報(五) 四〇六 一九七四

東京都獣医師会の生いたち 伊東孝七 日本獣医学研究会報(五) 一〇〇〇一 一九七四

牛乳の効用を説き阪川牛乳店を創始させた松本良順の生涯に及ぶ

小松純之助 獣医畜産新報(六二二) 二七〇-三〇〇 一九七四

享保一四年の蘭書和解「西説伯楽必携」について(抄) 坂本

勇 日本医史学雑誌 二〇(三) 二九〇-三一〇 一九七四

解体新書と家畜関係書について(抄) 松尾信一 日本医史学

雑誌(三) 一〇〇-一二二 一九七四

歯学史

解体新書発刊年時フランスに於いて陶歯創造に着手その後の経緯

について(抄) 瀬戸俊一 日本医史学雑誌 二〇(三) 二

五〇-二七 一九七四

虫歯の歴史 斉藤安彦 クリニッシアン 二一(一) 三五〇-四

四 一九七四

歯学概論の考え方―パネルディスカッション― 河村洋二郎・

中沢 勇・山田平太・正木 正 日本歯科医史学会誌 二

(二) 一〇〇-九 一九七四

わが国の口腔清掃の時代相 山田平太 日本歯科医史学会誌

二(二) 一〇〇-一二 一九七四

歯に関する江戸小咄 小川幹雄 日本歯科医史学会誌 二

(二) 一三 一九七四

お伽草紙に出てくる歯痛の日記 小川幹雄 日本歯科医史学会

々誌 二(二) 一四〇-一五 一九七四

歯科医ジョン・ヘンリー・ホリデーの数奇な生涯 大前義文

日本歯科医史学会々誌 二(二) 一六〇-二五 一九七四

明治時代の歯科教育における理科について 本間邦則・中原泉

日本歯科医史学会々誌 二(二) 三二 一九七四

シュルタに見える鉗鑷について 杉本茂春 日本歯科医史学

会々誌 二(二) 三三〇-三七 一九七四

ホセ・ド・バイヴァ・ポントの最初の女性歯科医達を描いている

古文獻と聖アポロニア 新藤恵久 日本歯科医史学会々誌

二(二) 三八〇-四二 一九七四

再度福島県郡山市において発見されたクラスプ応用の木床義歯な

らびに木床義歯の維持法についての考察 中沢 勇・平田幹

男・佐藤 裕 日本歯科医史学会々誌 二(二) 四三〇-四八

一九七四

シュルタにみえる鉗、鑷とダンタシャンクの解釈について

杉本茂春 医学史研究(四二) 五七八〇-五八一 一九七四

看護史

医療および保健衛生面における検査技術者の歴史 医療面におけ

る発展について 谷島清郎 日本医史学雑誌 二〇(四) 四

八〇-五八 一九七四

「吸いのみ」「湯たんぼ」「尿器」の採集を通して看護の変遷を

見る 佐川玲子他 大塚薬報(二六八) 三七〇-四〇 一九七

四

養護訓導前史 文部省学校看護婦 杉浦守邦 健康教育 二三

(八)、(九) 三八〇-四三、(一〇) 四二〇-四七、(一一) 四四〇-

四九、(一二) 四二〇-四八、(一四) 三三〇-三九

二四(一) 二六〇-三一、(二) 一七〇-二二、(四) 三九〇-四五、

(五) 五六〇-六〇、(六) 五〇〇-五六、(七) 六三〇-六七、(八)

六三〇六九、(九) 六八〇七三、(一〇) 四五〇四九 一九七二  
一九七三

近代日本の看護教育創業記 中里龍瑛 看護 二六(一) 八八

〇九三、(二) 五九〇六四、(三) 八六〇九〇、(四) 一〇三〇  
一〇八、(五) 九七〇〇〇、(六) 九七〇〇一 一九七四

保健婦規則発令以前の保健婦養成について 高橋政子 医学史  
研究(四二) 五八二〇五八四 一九七四

保健婦の戦後史—保健婦のサークル活動、土曜会の歩みを中心  
に— 木下安子 医学史研究(四二) 五八五〇五八七 一九

七四

#### 蘭学

舍密開宗が刊行されるまで 京極三朗 薬事日報(五〇二八)

六〇七 一九七四

オランダ航海表(抄) 大矢全節 日本医史学雑誌 二〇(三)

一五 一九七四

蘭学事始の研究(抄) 内山孝一 日本医史学雑誌 二〇(三)

一九〇二一 一九七四

江馬塾における「扶氏経験遺訓」 片桐一男 日本医史学雑誌

二〇(二) 一一七〇一二四、(三) 二五八〇二六七 一九七四

長与専斎手沢・竹山屯旧蔵 オランダ語眼科原書 蒲原 宏

新潟県医師会報(二九四) 一九七四

蘭学における実理と実用—杉田玄白の医学思想を中心にして—

佐藤昌介 科学史研究 一三(一一〇) 七四〇八四 一九七四

江馬家所蔵のオランダ語文法書について 斎藤 信 名古屋市

立大学教養部紀要人文社会研究 一八 八九〇一〇三 一九七  
四

大野藩洋学館旧蔵の蘭日辞書 付・大野藩蘭学者の単語帳 岩

治勇一 医海時報(六二九) 三、(六三〇) 三 一九七四

『本草綱目』における李時珍の近代植物学的寄与 森村謙一

科学史研究(一一二) 一六三〇一六五 一九七五

エンテレヒーと情報概念 米本昌平 生物学史研究(二六) 一

二〇二一 一九七四

遺伝子の物質的認識をめぐって(一九四〇—一九六九) 石館

三枝子 生物学史研究(二六) 一〇一一 一九七四

CH, DARWIN, J. HERSCHEL, AND "BACONIAN PRIN-

CIPLES" Fuyuko Egami Bulletin of the Tokyo Institute of

Technology(一二四) 五五〇六一 一九七四

R・ドドネウスの“CRVYDT-BOECK”とその翻訳—「鐸度混

鳥斯絵入」について— 杉本つとむ 植物と文化(二〇) 七

一〇八一 一九七四

R・ドドネウスの“CRVYDT-BOECK”とその翻訳—その二—

杉本つとむ 植物と文化(一一) 八三〇九一

—日本に渡来した西洋博物学のふるさと— 上野益三 植物

と文化(一〇) 四四〇五九 一九七四

—ロンドン— 上野益三 植物と文化(一一) 四九〇六四

一九七四

—大垣— 上野益三 植物と文化(一二) 九三〇一〇六

一九七四

わが国の祭礼民俗と植物 三浦三郎 植物と文化(一〇)二六

〇四三 一九七四

日本スイセンの渡来栽培史 釜江正巳 植物と文化(二〇)一

六〇二五 一九七四

「衆芳画譜」と「写生画帳」―博物趣味の殿様、松平頼恭公―

竹内庸夫 植物と文化(二二)二〇 一九七四

森野旧薬園の記 上野益三 関西自然科学(二六)二〇一

一九七四

一七〇一九世紀日本の生物学におけるライデンの歴史的意義(一)

上野益三 遺伝 二八(四)八八〇九二 一九七四

一七〇一九世紀日本の生物学におけるライデンの歴史的意義(二)

上野益三 遺伝 二八(五)五五〇六二 一九七四

畔田翠山がつくった腊葉帳 上野益三 Nature Study 二〇

(八)五〇八

解剖学的生物学の方法 中村禎里 思想(五九八)一〇一六

一九七四

一九世紀の生物学 鈴木善次 科学史研究 一二(二〇八)一

九三〇一九九 一九七三

医師会史および学会

全日本民医連二〇年の意義とこんごの課題へ医療の課題と民医連

二〇年 高橋 実 民医連医療(二五)二〇一〇 一九七

三

県連の歴史と課題(一)―神奈川県・兵庫県・岡山県民医連―

一九七三

岡田久・樋口好要・小野克正 民医連医療(二五)四七〇五八

山陰民医連のあゆみと課題へ県連の歴史と課題 上野 実

民医連医療(二七)六一〇六四 一九七三

民医連の二〇年 月刊「民医連資料」(三)四五五〇四八二

一九七三

毎年三月四日観臓記念に行われた「医家先哲追薦会」と富士川先

生作歌琵琶「蘭学創始」について(抄) 赤松金芳 日本医

史学雑誌 二〇(三)一三〇一四 一九七四

へそのときどきに

洋学二百年記念展がすんで(一) 緒方富雄 医学のあゆみ

九〇(九)七五九 一九七四

洋学二百年記念展がすんで(二) 緒方富雄 医学のあゆみ

九〇(一〇)八〇三 一九七四

洋学二百年記念展のこと 緒方富雄 医学のあゆみ 八九

(一〇)六〇四 一九七四

解体新書出版二百年、洋学二百年記念展 緒方富雄 医学の

あゆみ 八八(一二)四三六 一九七四

日本伝染病学会―半世紀のあゆみ― 熊谷謙三郎 日本臨床

三一(八)二六二五〇二六二八、(九)二八六四〇二八六七

一九七三

学会の歴史的背景・とくに教育機能にふれて 中川米造 医学

教育 五(二)八六〇八八 一九七四

「学会」の歴史的背景 大島蘭三郎 医学教育 五(二)八九

一九七四

「解体新書」出版二百年記念の行事 緒方富雄 古医学月報

(八) 一〇二 一九七四

長崎での日本医史学会総会 大島蘭三郎 古医学月報 (二) 一〇

二一九七三

ウエルカム医学史博物館をたずねて 小川鼎三 古医学月報

(二) 二〇四 一九七三

医学史料館への期待 長門谷洋治 古医学月報 (三) 一〇二

一九七三

ドイツ医史学会とゲルケ先生 大塚恭男 古医学月報 (二) 三

一九七三

戦後日本医師会史の時代区分 野村 拓 医学史研究 (四) 一

五三三〇五三三 一九七四

古河医師会設立の事情 松岡武保 古河医師会報 (七) 一三〇

一五 一九七四

古河市医師会の誕生まで 長島正文 古河医師会報 (七) 七〇

一〇 一九七四

学会印象記

第七五回医史学会および第一六回蘭学資料研究会 大滝紀雄

日本医事新報 (二六三二) 四九〇五一 一九七四

第二五回東洋医学会 松田邦夫 日本医事新報 (二六二五)

四六〇四八 一九七四

第一四回国際科学史会議見聞記 科学の実験二五 (二二) 八二

一〇八二八 一九七四

切手・書画にみる医学史

医学切手について 蓮見武爾 古医学月報 (二) 七、(四) 三

一九七三

近衛家旧蔵の古葉籠 矢数道明 医海時報 (六二二) 三 一九

七四

レンブラントの名画「トゥルプとデーマンの解剖学講義」

古川 明 日本医史学雑誌 二〇(四) 一〇二四 一九七四

伝探幽筆、神農、伏羲像 蒲原 宏 新潟県医師会報 (二八六)

一九七四

応斎筆白沢の図 蒲原 宏 新潟県医師会報 (二八五) 一九

七三

△そのときどきに▽

古医書の所蔵目録の発行 緒方富雄 医学のあゆみ 八八

(六) 二五六 一九七四

仁寿医学館の図 蒲原 宏 新潟県医師会報 (二九三) 一

九七四

もうひとつのヒポクラテス画像 緒方富雄 医学のあゆみ

九一(八) 三五七 一九七四

石川孟高のヒポクラテス画像 緒方富雄 蘭学資料研究会研究

報告 (二八九) 四五〇五二 一九七四

慶長年間の医家肖像二点の考案(施薬院全宗と・鷗軒宗虎)

小川鼎三 日本医史学雑誌 二〇(二) 一〇五〇一六 一九

七四

天明三年平次郎解剖図 蒲原 宏 新潟県医師会報 (二九七)

一九七四

中田瑞穂筆ヒボクラテス像 蒲原 宏 新潟県医師会報(二八

八) 一九七四

桂川国宝筆竹山甫祐命名字簡 蒲原 宏 新潟県医師会報(二

九〇) 一九七四

医師丸山元純の肖像 蒲原 宏 新潟県医師会報(二九一)

一九七四

その他

日本製古顕微鏡 蒲原 宏 新潟県医師会報(二八七) 一九

七四

磐舟文華博物館所蔵 江戸時代の日本式眼鏡 蒲原 宏 新潟

県医師会報(二八九) 一九七四

リウマチと医学用語 大高裕一 リウマチ 一四(二)六五

一九七四

ゴンドルセの遺訓 宮本 忍 胸部外科 二八(一)九 一九

七五

禅画十牛図が示すものと人間治療 窪倉精一 神奈川医学会雑

誌 一(一)一五~一八 一九七三

医学とギリシャ語 泉彪之助 日本医事新報(二六三〇) 六六

~六八 一九七四

ヒボクラテスの誓いと Moranography 落合京一郎 Ozeana

(三三) 三二~三四 一九七四

医師のゆくへ(一) 京都大学医学部卒業生の地域分布 中野

進他 京都医学会雑誌 三三(一) 一四五~一五二 一九七四

貝原益軒の養生訓と現代の養生訓 西丸和義 広島医学 二七

(五) 四一七~四二五 一九七四

美濃大垣の医家飯沼愨斎翁「平林荘所蔵諸品目録」について

吉川芳秋 現代医学 二一(二) 二六五~二六八 一九七三

修琴堂蔵書目録抄 大塚敬節 漢方の臨床 二一(二) 三~三

二 一九七四

医学史おぼえがき 魔法と科学と 梶田 昭 病体生理(〇〇)

一三~一九 一九七四

医師と患者—ローベルト・ゲルズニイの場合— 松田方一 医

学史研究(四二) 五七四~五七七 一九七四

医師くすしハ王朝点描V 藤枝ちえ 歴史研究(一六二) 五二

~五三 一九七四

人間と病氣と医療と 立川昭二 モダンメディア 二〇(一)

三四~三五 一九七四

医学と文学 立川昭二 モダンメディア 二〇(一) 一~三三

一九七四

文化財と医学 大鳥蘭三郎 月刊文化財(一三三) 一六~一八

一九七四

医者の発想—日本人の法則観— 中山 茂 思想(六〇三) 二

四~四四 一九七四

身体語彙の変化—「かうべ」「かしら」「あたま」「なびき」など—

宮地敦子 国語学(九四) 一~一五 一九七三

顔貌の異常のみわけかた 浪久利彦・今 哲二 現代医療 六

(一) 一~三 一九七四

江戸史蹟「道三橋」「道三堀」「道三河岸」などについて 矢数

道明 漢方の臨床 二二(三) 一二七～一三二 一九七四

病氣封じのまじない 菅沼晃次郎 民俗文化(二二九) 一九

七四

イングランド医学史散歩 蒲原 宏 *Minophagen Medical Re-*

*view* (一九) 三三三～三八 一九七四

イタリアの旅に拾う 小川鼎三 日伊医学(七) 三二～三五

一九七四

緒方洪庵の扶氏経験遺訓の板木 緒方富雄 *Ceena* (1111) 1

八～一九 一九七四

「東京医事新誌」明治初期の医学雑誌についての考察 近藤禧

禊男 医学図書館 二〇(二) 一四一～一五二 一九七三

「神経」という語の由来 小川鼎三 神経内科 一(一) 一五

五～一五六 一九七四

医学用語の歴史 大矢全節 医海時報(六一五) 三、(六一六)

三一 一九七四

神経学的疾患、症状および症候群の原著並びに古典的記述の目録

とそれらの歴史的注釈(英文) 豊倉康夫他 神経研究の進

歩 一八(二) 四一七～四三五 一九七四

麻酔史考 東と西 栗本宗治 医海時報(六〇四) 三 一九

七四

腎機能についての墨汁注入法による研究の伝統と創造 内山孝

一 医学のあゆみ 八八(一一) 四八六～四八八 一九七四

## 訃報

### 津崎孝道氏逝く

本学会の評議員を長らくつとめられ、学会の運営に積極的に意見を寄せられていた津崎孝道氏が去る九月八日午後七時四十五分、肺癌のため、入院中の川崎市多摩区長沢の聖マリアンナ病院で逝去された。享年八十一歳。

氏は医学史の面では、河口信任の『解屍篇』を集中的に研究された。その業績は朝鮮で京城大学に奉職中から発表され、近年も横浜市大の欧文誌に発表されていたことはよく知られている。

氏は明治二十七年に大分県に生まれ、大正六年京都医専を卒業、大正十五年から京城帝大の解剖学の教授となられ、戦後、引揚げてこられてから横浜市立大学の教授となられ、停年退職後の昭和三十六年からずっと日本歯科大学で教鞭をとられた。

## 文部省科学研究費補助金(学術定期刊行物)の交付

本年度の文部省科学研究費補助金三十六万円が本誌の刊行に交付される旨、このたび文部省より通知された。



日本医史学会例会記事

六月例会 六月二十八日(土)

於東京大学医学部総合中央館(医学図書館)

- 一、明治前の外国医師と日本の医学 緒方 富雄
- 二、ミユルレルと東京医学校 小川 鼎三

ミユルレル銅像復原除幕式を挙行

七月例会 七月二十六日(土)

於慶応大学医学部解剖学教室講堂

- 一、パレの生地をたずねて 大村 敏郎
- 二、肺循環の発見とセルブエート 大島 智夫

—十六世紀における医学と神学

九月例会 九月二十七日(土)

於順天堂大学医学部九号館一番教室

- 一、「植学啓原」の原図について 矢部 一郎
- 二、アーユルヴェーダの原典「ススルタ本集」について 鈴木 正夫

書評

大島蘭三郎 近世医学史から

わが国において歴史学に対する関心は最近かなり高まりつつある。しかしわが国の医学にも大きな影響を及ぼした近世以降の西洋医学史について、邦文で書かれたものはきわめて少ないという

のが現状である。

雑誌「日本医事新報」はとくに医学生用として「ジュニア版」というのを月刊で発行している。大島先生は同誌に十年近くパレケルズから、現代までの西洋医学史を各分野別に系統的に平易な筆で説いてこられた。

正式な医史学講座がなく従ってその講義もないに等しいというのが大勢のわが国にあって、この連載は医学生にとっても十分関心を引くものであったろうし、考えてみれば我々自身、自由に欧文医学史書を読みこなせる一部の人を除いて、西洋医学史についての知識はかなり限られた、断片的なものであった。中には自分では知っているはずであったものが、全くまちがった理解であったことを本書により初めてわかったということも一・二にとどまらない。本書は著者もいよう近世以降の西洋医学史の完全なテキストブックではなく、いわばその上巻といった感があるが、なおかつこれにより西洋医学史の流れを知ることができ、これらのわが国への影響についても知ることができる。

本書はつぎの七章より成る。①近代解剖学の起源 ②近代病理学の発展 ③近代臨床医学の起源と発展 ④十九世紀の臨床医学 ⑤熱帯病 ⑥栄養と代謝 ⑦心臓の機能と疾患。いま試みに第三章についてみるにパラケルズ、パレ、シデナム、ブルハーベ、ハラーとウィーン学派について述べたあとイギリス医学—エジンバラ学派、初期のアメリカ医学と続く。そして第四章ではアメリカ医学の発展、麻酔法の発見、防腐法、メーヨー・クリニック、脳神経外科学(以下略)となっている。かつて西洋医学の

大きな流れとしてライデン→エジンバラ→フライデルフイアがあることを阿知波五郎氏の著書などにより知ることができたが、本書で改めてこれを実感することができ、とくにアメリカで近代医学が育って行く課程などはまことに感銘深いものがある。

本書は本文がA五判、三八三頁、横書きであるが、多数の写真が入れられてあること、人名がすべて原名(横文字)で記されている(日本人を除く)こと、主要人の生没年が記されていること、巻末に詳細な人名、事項、単行本、論文、雑誌名索引があることなどより辞典的な機能も果すと思われる。人名索引には八七〇名余があげられている(うち日本人二一名)

わが国で唯一といつてよい、生涯を医史学に投じてこられた大鳥蘭三郎先生が、ご専門の蘭学史から一步進めて、そのうちくわをわかりやすい筆致で我々に披露して下さったことを多としたい。同時にこの企画を行なった日本医事新報社、これを出版した形成社の努力をもたえたい。

(A判、四三八頁、昭和五十年発行、形成社、四、八〇〇円)

#### 服部敏良著「王朝貴族の病状診断」

長門谷 洋治

医史学の研究に欠くことができない重要なものの一つに、文献があることはいうまでもない。その文献とても各種のものがあり、必ずしも医家の書きのこしたものが、価値あるものとは限らない。日本の場合についていえば、平安時代に多くの公家が書いた日記の類、たとえば『御堂関白記』、『小右記』、『左経記』、『権記』等があり、また一方では『栄花物語』、『大鏡』等

の歴史物語がある。これ等のものは当時の政治・社会のことをうかがい知る上に重要な資料であるばかりでなく、医史学的に考えてもまたきわめて多くの重要な素材を内蔵している。

このことは日本の医史学の先達である富士川游博士が早くから指摘されて来たところであるが、これまで余り深い研究がなされていなかった。このたび、医史学者としても令名の高い服部敏良医・文学博士がこの点に着眼され、周到、かつ、詳細な考証を試みられたことはまさにその人を得たという感が深い。それ等の研究を一本にまとめ、『王朝貴族の病状診断』と題して歴史書専門の出版社吉川弘文館より出版されたことは、何よりのことと敬意を表するとともに、私共にとりまことにありがたいことといわなければならない。

参考までに、目次によって、内容の一端を示せば、疾病の解説と病状の診断の二篇に大きく分け、疾病の解説篇をさらに、日記物語と疾病、仮名書状と疾病、との二章にし、風病、寸白、飲水病、ものけ等がいかに記載されているかを説明している。

第二篇の病状の診断では、歴代天皇の病状王朝貴族の病状、の二章に分け、冷泉、円融、花山、三条、白河、堀河の各天皇、藤原氏の代々、后妃女院、その他の人々、がかかった病状の診断を試みている。

(本文二三七頁 発行所 吉川弘文館定価 一五〇〇円)

大島 蘭三郎

#### 芳賀徹著「封建の異端杉田玄白」

芳賀徹氏著「杉田玄白の一篇は小学館発行のシリーズもの、

「人物日本の歴史」のうちの第十五卷「封建の異端」の中で、とり扱われているものである。この巻には杉田玄白のほか、平賀源内、頼山陽、平田篤胤、大塩平八郎、渡辺華山等が集録されている。

比較文学を専攻されている芳賀氏は玄白の主要な著書をたくみに引用しながら、玄白もまたこの時代の異端者の一人であったことを暗に強調されている。ことに『後見草』や『野叟独語』の中で述べられている玄白の政治、社会に対する真情を細かに分析して玄白の異端性を指摘されようとしている。その論旨はまことに明快で、首肯できる点もすくなくないが、『後見草』、『野叟独語』に見られる玄白の言説によって、玄白を異端者呼ばわりをすることには、いささか同意しかねる。

それにもかかわらず、この点を除けば、玄白の生涯、生活に関する描写はなかなか活き活きとしていて、思わず魅入りられたように読ましてしまう。さすが比較文学者だけあって、その叙述はきわめて明快である。読み物としても正に適切である。

(本文二六三頁 発行所 小学館 定価 一、二五〇円)

大鳥 蘭三郎

### 新刊紹介

レオポルド・ミュルレル著 石橋長英・小川鼎三・今井正共訳  
「東京医学」

本書は明治四年に來日し、日本に四年間滞在して、今日の日本

の医学教育制度の基礎を作った著者が、帰国したのち一二年してから、日本での想い出を綴ったものである。

原文は *Deutsche Rundschau* の第五七巻に三七頁にわたって載るが、その全文を翻訳したのは今回がはじめてである。というのは、かつて入沢達吉がその一部を訳し、中外医事新報第二二〇〇号に載せたが、そこでは、著者が関係者の無能ぶりをこっぴどくやつつけているところが省かれていた。

今回のこの出版は、東大構内にかけて存在したミュルレルの銅像が盗難にあい、コンクリート像を置いてあったのを復元した機会に出版されたが、貴重な文献を容易に読める形にしてくれた訳者諸氏に感謝する。

(刊者 日本国際医学協会。発行所 ヘキスト・ジャパン株式会社 B 六版 八四頁)

本書を希望される方は送料七〇円を同封の上日本医史学会事務所まで申込み下さい。(S)

Gerhard Vescovi 著 石橋長英・今井正共訳 「日本医学の開拓者—エルウィン・ベルツ」

ベルツに関する著書は、有名な「ベルツの日記」のほか、ショットレンダの「エルウィン・フォン・ベルツ」、小川鼎三の「ベルツ伝」、鹿島卯女の「ベルツ花」などいくつかの著作があるが、本書はこれまでに利用されたことのないメモや書簡、それに生地ビーチィヒハイムでの記録も参考にして書かれたものである。グ Labia の写真も珍らしいものが入り、巻末にはベルツの遺言書が全文公開されている。しかも、原著者が述べているように近代

な感覚でベルツを扱えようとしているのが随所にみられ、ベルツ研究者には欠くことのできない本になっている。(S)

(編集発行者 日本新薬株式会社 B六版 一四八頁 定価一、〇〇〇円)

中沢渥・原隆昭編著「ノーベル賞に輝く人々へ生理・医学賞」

ノーベル賞を得た人々の業績集がいままで日本で出版されていなかったことが不思議であったが、今回、ノーベル賞の創設された一九〇一年の受賞エミール・フォン・ベリリングから一九六二年のモリス・ウィルキンスまでの受賞者の業績が本書にまとめられた。この企画はある業界紙に定期的に掲載するために始めたものであったので、紙数に制限があったが、要領よくまとめ、読み易い読物にしてある。また、必ず肖像の入っているものもありがたい。(S)

(発行所 北里書房 電〇三一二六一―五八二五 発売元 蒼海出版 B5版 一八四頁 定価 二八〇〇円)

土屋重朗著「近代日本造船事始」

「静岡県の医史と医家伝」の著者でもある土屋氏が造船事始の本を著わしたことに一瞬驚きながら頁を繰っていくうちに、何故これを書こうと思いついたかよくわかった。主人公の肥田浜五郎は伊豆の八幡野村の医師肥田春安の五男に生れ、蘭学を伊東玄朴、川本幸民などに学び、幕末には勝海舟と共に海軍伝習所に学び、咸臨丸の機関長として渡米した人である。明治維新後もいろいろな方面で活躍した人であるのに、その人の名はもう人々からほとんど忘れ去られようとしている。それを父春安を調べている

うちに知った著者はのめり込むように浜五郎を調べ出したのであった。それをまとめ上げたのが本著である。これは幕末に蘭学を学んだ人がどのような生涯をたどったかを示した例でもある。医学には直接、関係はないが、少なくとも浜五郎をはじめは蘭方を学んだであろうから全然関係がなくてもない。(S)

(発行所 新人物往来社 A五判 二九〇頁 定価一、二〇〇円)

### 中西啓「長崎のオランダ医たち」

長崎の医学史といえは中西啓氏の名前がまずでてくるくらい、この方面の権威者である同氏が久びさに本書を出した。

七人の「オランダ」医を並べて、洋学の日本伝来を語った本であるが、まず、アルメイダに始まる。つまり、ポルトガルのキリスト教伝来から説き起しているのだ。つづいて、沢野忠庵、ケンベル、ツェンベリー、シーボルト、ポンペ、ボードウィンとつなげて、日本での洋学の受容の歴史を医学を中心に述べている。氏は医学にとどまらず、郷土史家としてその背景も深く知るだけに、その歴史を立体的に述べて、他に見られない本にしている。(岩波新書)

蒲原 宏 「解体新書と越後の国」(第二十卷三号) 正誤表

頁	段	行	誤	正
二〇五	下	九	祖父	曾祖父
〃	〃	十	祖父	祖父
二〇六	上	十一	父	祖父

日本医史学雑誌二十一卷総目録

原 著

佐々木中沢と佐々城朴安—文政壬午女囚解剖をめぐって

山形 敏一……………二九

蘭館長ニーマンと長崎留學生……………

酒井 シヅ……………一〇〇—一〇六

濟生学舎初期の学舎規則……………

前川久太郎……………九〇—九七

小絵馬信仰の現状……………

相見 三郎……………二六—三九

解体記念碑とそのうつりかわり……………

緒方 富雄……………三〇—四〇

ススルタ大医典訳業について……………

鈴木 正夫……………五〇—六〇

西説内科撰要について(六)……………

大滝 紀雄……………六〇—七〇

越後の蘭方医森田兄弟について(三)……………

長谷川一夫……………七〇—八三

咒禁師及び按摩師について(下) 日本古代医療史の研

究(二)……………新村 拓……………八三—八六

解体新書について……………

小川 鼎三……………一〇〇—一〇六

解体新書出版から二〇〇年……………緒方 富雄……………一〇七—一〇

越後の蘭方医森田兄弟について(四)……………長谷川一夫……………一八—一八五

江戸時代における異常気象とインフルエンザ……………立川 昭二……………一九〇—一九七

宮城県における明治初期の医学教育と横山謙介……………山形 敏一……………二〇八—二一七

「医師の誓詞」について……………三木 栄……………二二八—二三三

中世における祈禱と医療……………樋口誠太郎……………三三四—三三六

『遠西医範』と『医範提綱』(二)……………大鳥蘭三郎……………三三七—三四一

西説内科撰要について(七)……………大滝 紀雄……………三四二—三四三

諸官橋及び諸使医師—日本古代医療史の研究(三二)……………新村 拓……………三五〇—三六三

日本学校保健史……………杉浦 守邦……………三六三—三六九

『シュメール百科』(『厚生新編』)・『植学啓源』……………矢部 一郎……………三七〇—三三〇

『植学独語』の関連……………前川久太郎……………三三〇—三四五

奥医師保見家累代の記録および四代保見隆敬の肖像写真……………福島 義一……………三四六—三五二

シーボルト事件と土生玄碩將軍家紋服贈与について……………大鳥蘭三郎……………三五三—三六〇

ブレッキの『産婆術原理』(蘭訳本)について……………小川 鼎三……………三六一—三三八

医家先哲追薦会について……………John Z. Bowers and Akiko Kobayashi Bowers……………三六六—三三三

The History of the South Manchuria Medical College of the South Manchurian Railway……………竹内 孝一……………三〇〇—三〇九

資料……………浅井家文書(その二)……………緒方 富雄……………三二〇—三二九

寄 書……………解体新書にゆかりある人の署名(記念板)の署名の出所……………富士川游撰「杏林遺芳」について……………緒方 富雄……………三三一—三三九

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

第七十六回 日本医史学会総会

特別講演

日本学校保健史……………杉浦 守邦…二七〇～二八〇

日本細菌学小史……………藤野恒三郎…二八〇～二九〇

会長講演

大阪にある蘭学史跡……………中野 操…二九〇～三〇〇

一般口演

古代インドにおける胎児発育の諸説

……………杉田暉道・中田直道…二六〇～二六六

地蔵三部経と民衆の治病希求……………関根 正雄…二八〇～二九〇

明治二年版行された民間お産指導書「安産仙翁邦言教諭」  
について……………玉手 英典…二〇〇～二〇三

刺青史の資料……………大矢 全節…二二〇～二二三

徳川時代の鉦山の珪肺……………三浦 豊彦…二二〇～二二三

日本放射線医学史と技術史の構成私案について  
……………今市 正義…二二〇～二二三

中国中世における医者<sup>の</sup>地位について……………山本 徳子…二二〇～二二三

「医師の誓詞」について……………三木 栄一…二二〇～二二三

ニコラス・トウルプとその医学業績……………古川 明…二二〇～二二三

麻酔の初期発展とくぐり John Brown と Thomas Beddoes  
について……………栗本 宗治…二二〇～二二三

X線による消化管運動の研究者キャノン教授  
……………中山 沃…二二〇～二二三

土生玄碩のシーボルト散瞳薬伝授に関する一考察  
……………福島 義一…二二〇～二二三

江戸時代の腊葉について……………矢部 一郎…二二〇～二二三

最近見出した若干の資料について(京都の医学史展に際  
して)……………杉立 義一…二二〇～二二三

一気留滞論と万病一毒論……………大塚 恭男…二二〇～二二三

小浜藩における林野家(小石元俊の祖)の事蹟について  
……………田辺 賀啓…二二〇～二二三

本木庄太夫の医学……………小川鼎三・酒井シヅ…二二〇～二二三

いわゆるターヘル・アナトミア(一七三四)の相違について  
……………酒井 恒…二二〇～二二三

コンスブルック内科訳書について……………阿知波五郎…二二〇～二二三

ブレンキの婦人病論の原書とその日本語訳書との比較検討  
……………大島蘭三郎…二二〇～二二三

宇田川榛齋著「内外要論」について……………大滝 紀雄…二二〇～二二三

江馬元恭「泰西熱病集訳」について……………安井 広…二二〇～二二三

緒方洪庵の書翰二通……………岩治 勇一…二二〇～二二三

林洞海の晩年……………土屋 重朗…二二〇～二二三

「貌氏成形手術図譜」と小山内建……………星 栄一…二二〇～二二三

宮城県における明治初期の医学教育と横山謙介  
……………山形 敏一…二二〇～二二三

吉田頭三(一八四八・四・八～一九二四・三・一)のこと  
……………丸山 博…二二〇～二二三

本邦海軍軍医制度史序説……………長門谷洋治…二二〇～二二三

例会記事

「本草綱目」と俳句の歳時記……………三浦 三郎…六九  
 明治初期の医学教育……………太田 典礼…六九  
 祈禱と医療……………樋口誠太郎…六九  
 初代曲直瀬道三の没年号……………矢数 道明…八九〇  
 近世医書の刊行発禁本の二、三……………羽倉 敬尚…八九〇  
 中川家の肖像画について……………緒方 富雄…八九〇  
 解体記念碑とそのうつりかわり……………緒方 富雄…八九〇  
 回向院の縁起について……………水野 了仙(回向院住職)…八九〇  
 回向院出土の江戸時代人骨……………河越 逸作…八九〇  
 医家先哲追薦会について……………小川 鼎三…八九〇  
 山谷、吉原、小塚原……………関根 正雄…八九〇  
 和蘭全軀内外分合図について……………酒井 シヅ…八九〇  
 中国の麻酔剤「洋金花」とわが華岡青洲の麻沸湯……………吉田 一郎…八九〇  
 プリーストリーの酸素発見 一七七四年八月一日……………渡辺 慶昭…三〇八  
 エルドリッチと父六角謙吉……………六角 高雄…三〇八  
 幕末の陸軍軍楽……………升本清・若林勅滋・ヤン・デ・フリス…三〇八  
 石川孟高のヒボクラテス画像……………緒方 富雄…三〇八  
 腹帯について……………蔵方 宏昌…三〇八  
 江戸期における陰間(男娼)の生態とその使用薬剤について……………三浦 三郎…三〇八

社会の変革と健康観の変遷……………杉田 暉道…三〇八  
 桂川家旧蔵の木造人頭模型に関する疑問の解決……………緒方 富雄…三〇八

森鷗外と呉秀三……………富士川英郎…三〇九  
 最近刊行された拙著「前野良沢」について……………小川 鼎三…三〇九

木造人頭模型の原型に関するイギリスよりの回答……………緒方 富雄…三〇九  
 医師免許制度の変遷……………酒井 シヅ…三〇九

本邦海軍軍医制度史序説……………長門谷洋治…三〇九  
 明治以前の外国医師と日本の医学……………緒方 富雄…三〇九

ミュレルと東京医学校……………小川 鼎三…三〇九  
 パレの生地をたずねて……………大村 敏郎…三〇九  
 肺循環の発見とセルヴェート——十六世紀における医学と神学……………大島 智夫…三〇九

「植学啓源」の原因について……………矢部 一郎…三〇九  
 アーユルヴェエダの原典「ススルタ本集」について……………鈴木 正夫…三〇九

書評

杉本つとむ訳・解説、杉田玄白著『蘭学事始』——鎖国

の中の青春群像……………九五〇〜九七〇

George Rosen 著、小栗史朗訳『公衆衛生の歴史』……………九七〇〜九八〇

藤野恒三郎著『日本近代医学の歩み』……………九八〇〜一〇〇〇

青木一郎編著『坪井信道詩文及書翰集』……………一〇〇〇〜一〇〇三





## 日本医史学会々則

第一条 本会は日本医史学会と称する。

第二条 本会は医史を研究しその普及をはかることを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

一、年一回、総会を開く。

二、本会の機関誌として『日本医史学雑誌』を発行し、これを会員にわかす。

三、随時、地方会、例会を開き、研究発表、展覧などを行なう。

四、日本の医史学界を代表して内外関係学術団体との連絡協力をはかる。

五、その他の事業。

第四条 本会の主旨に賛成しその目的達成に協力しようとするものは、理事または評議員の紹介を経て会員となることができる。

第五条 会員は会費として年額三〇〇〇円を前納する。入

会者は一〇〇〇円を納入する。ただし外国に居住

する会員は年額一五ドルとする。

会員は研究発表および本会の事業に参加することができる。

本会に名誉会員と賛助（維持）会員をおくことができる。名誉会員は本会の事業に多大の貢献した者を評議員会の議をへて推せんする。賛助会員は本会の趣旨に賛同し、年額一万円以上を収める者とし評議員会の議をへて推せんする。

## 第六条

本会に次の役員をおく。

一、役員は理事長、会長、理事、監事、幹事とする。

二、理事長は一名とし理事会で互選し本学会を代表する。

三、会長は年一回の総会を主催し、その任期は総会終了の日までとする。

会長は理事会の推せんにより理事長が委嘱する。

四、理事は若干名とし、理事長を補佐し会務の遂行にあたる。

理事、監事は評議員の中より評議員会の推せんにより理事長が委嘱する。

五、本会の実務を処理するため、常任理事二名、

幹事若干名をおく。常任理事は理事より、幹事は会員より理事長が任命する。

六、役員任期は二年とし重任を妨げない。(ただし会長を除く)

以上の役員は総会の承認を得るものとする。

第七條 評議員は若干名とし、普通会员の中より理事会の推薦により総会で決める。

評議員会は本会の重要な事項を議決する。任期は役員に準ずる。

第八條 本会の事務所は順天堂大学医学部医史学研究室内

(東京都文京区本郷二の一の一)に置く。

第九條 本会は理事長の承認により支部または地方会を設けることができる。

第十條 会則の変更は総会の承諾を要する。

### 『日本医史学雑誌』投稿規定

発行期日 年四回(一月、四月、七月、十月)末日とする。

投稿資格 原則として本会々員に限る。

原稿形式 原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表

題、著者名のつぎに欧文表題、ローマ字著者名

を記し、本文の終りに欧文抄録を添えること。

原稿は二百字詰または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序の決定は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

#### 著者負担

表題、著者名、本文(表、図版等を除く)で五印刷ページ(四百字原稿用紙で大体十二枚)ま

では無料とし、それを越えた分は実費を著者の負担とする。但し欧文原著においては三印刷ページまでを無料とする。図表の製版代は実費を徴収する。

#### 校 正

原著については初校を著者校正とし、二校以後は編集部にて行なう。

#### 別 刷

別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

#### 原稿送り先

東京都文京区本郷二丁目一の一、順天堂大学医学部医史学研究室内 日本医史学会

#### 編集委員

大島蘭三郎、大塚恭男、蔵方安昌、酒井シヅ、樋口誠

太郎、室賀昭三、矢部一郎、矢数圭堂

#### 編集顧問

小川鼎三、A・W・ピーターソン

日本医史学会役員氏名(五十音順)

理事長 小川 鼎三  
 会長 高瀬 武平  
 常任理事 石原 明 大鳥蘭三郎  
 会計監事 宗田 一  
 理事 阿知波五郎 石川 光昭

幹事 赤松 金芳 阿知波五郎 石川 光昭  
 今田 見信 内山 孝一 大塚 敬節  
 大矢 全節 緒方 富雄 蒲原 宏  
 佐藤 美実 杉 靖三郎 鈴木 正夫  
 鈴木 勝 宗田 一 津崎 孝道  
 戸近太郎 中野 操 三木 栄  
 矢数 道明 吉岡 博人 和田 正系

大塚 恭男 酒井 シヅ 杉田 暉道  
 谷津 三雄

日本医史学会評議員氏名(五十音順)

赤松 金芳 安芸 基雄 阿知波五郎  
 青木 一郎 石原 明 石田 憲吾  
 石川 光昭 石原 力 今市 正義  
 今田 見信 岩治 勇一 内山 孝一  
 大鳥蘭三郎 大塚 敬節 大塚 恭男  
 玉丸 勇 大矢 全節 緒方 富雄  
 小川 鼎三 大滝 宏 片桐 一男  
 川島 恂二 蒲原 紀雄 久志本常孝  
 榊原悠紀太郎 酒井 シヅ 酒井 恒  
 佐藤 美実 清水藤太郎 杉 靖三郎  
 杉田 暉道 鈴木 正夫 鈴木 勝

鈴木 宜民 瀬戸 俊一 関根 正雄  
 宗田 一 高木圭二郎 高瀬 武平  
 高山 担三 田中 助一 津田 進三  
 筒井 正弘 土屋 重朗 戸近太郎  
 中泉 行正 中川 米造 中沢 修  
 中西 啓 中山 沃 長門谷洋治  
 中野 操 服部 敏良 巴陵 宣祐  
 福島 義一 藤野恒三郎 本間 邦則  
 富士川英郎 古川 三朗 丸山 博  
 松木 明知 三浦 豊彦 三木 栄  
 三廻 俊一 谷津 三雄 山形 敏一  
 矢数 道明 山下 喜明 山田 光胤  
 安井 広 吉岡 博人 和田 正系  
 以上

編集後記

今日は八月一日、太平洋戦争敗戦記念日です。B-29の焼夷弾に焼けただかのは、陽を頭上にいただきながら終戦の放送を聞いたから、もう三十年という時間がたちました。本当に月日たつのは早いものです。昭和二十年八月一日に生れた人がもう三十歳になるのです。町を歩いている若い人は全く戦争を知らず、戦争の悲惨さなど全く理解することが出来ないやうです。日本経済はこの三十年間にめざましい復興を示し、経済大国などと言っていいました。露呈し、いかに日本の経済力の基礎が脆弱なものであるかを骨の髄まで味わされ、それ以後の日本国民はインフレと不況の海

にただよう、舵も帆もない小舟となつてしまいました。この三十年間、国民の平均年齢がのびるなど医学も大きな進歩をとげましたが、その反面サリドマイド、スモンをはじめ、いくつもの大きな難しい問題をかかえこむことになりました。医は仁術といわれた昔と異なり、医は算術といわれるようになり、医師に対する患者の不信がさげられるようになり、医師に対する裁判の数も増加して来ました。医師、医学に対して世間の批判がきびしさを加えて行くことは必ずと思われまます。われわれは今後ますます自己と自分の医学をみがいて行かなければならないと思ひます。(室賀昭三)

昭和五十年十月二十五日 印刷  
 昭和五十年十月三十日 発行

日本医史学雑誌

第二十一巻 四号  
 編集者代表 大鳥 蘭 三郎

発行者 日本医史学会  
 代表 小川 鼎三  
 東京都文京区本郷二丁目  
 順天堂大学医学部医史学  
 研究室内

製作協力者 金原出版株式会社  
 日本医学文化保存会  
 振替 東京 一五二五〇番

印刷社 三報社印刷株式会社  
 一四 東京都江東区亀戸

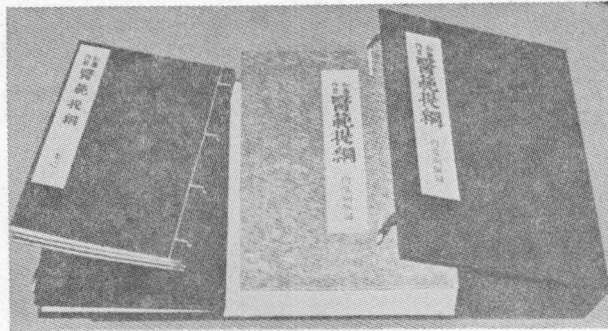
〒一四 東京都江東区亀戸

## ● 解 説

順天堂大学教授 小川 鼎三

宇田川玄真（一七六九—一八三四）の著「和蘭内景医範提綱」は文化二年（一八〇五）の出版で、十九世紀の前半、西洋医学に志をもつ日本人が、おそらく誰でもがまず繙いた一書であったとおもう。解剖学を主とするが、生理学、病理学をも合せ説いていて、西洋医学の精髓を明快、簡略に紹介した傑作である。三年後の文化五年にその付図として「内象銅版図」が刊行された。これは亜欧堂田善の作である。日本で最初の銅版解剖図として名高い。おそらくこの付図は当時でも高価であったと推測する。

玄真は西洋の解剖書数種から訳しとつて遠西医範三十巻をつくったが、膨大なので、その綱要をまとめて医範提綱と名づけ、この提綱をテキストにして門人に西洋医学の大体を講義した。門人の諏訪俊士徳がそれを筆記し整理して、医範提綱三冊本ができたのである。玄真が用いた西洋解剖書の著者としてフランカルツ、パルヘイン、ヘルヘイン、インスロウの名が挙げられている。医範提綱は日本の医学に大きい影響をあたえたが、その一つの現われとして、「臍」や「腺」の字が初めて玄真の創始した国字として登場している。



和蘭内景  
**医範提綱**

和蘭内景  
**医範提綱**

**全三卷**

**内象銅版図**

**全一冊**

限定版 三〇〇部  
頒価 三八、〇〇〇円

売捌所／株式会社金原商店  
製作所／財団法人日本医学文化保存会

- (Middlesex, England: Penguin Books, 1960); Hugh Borton, *Japan's Modern Century* (New York: Ronald Press, 1955); and Chitoshi Yanaga, *Japan since Perry* (New York: McGraw Hill, 1949).
18. Carl F. Nathan, *Plague Prevention and politics in Manchuria, 1910-31* (Cambridge: Harvard East Monographs, 1967); Wu Lien-ten, *Plague Fighter: The Autobiography of a Modern Chinese Physician* (Cambridge: W. Heffer, 1959); and W.H. Jefferys and J. L. Maxwell, *The Diseases of China* (London: John Bale Sons and Danielson, 1910).
  19. Bernard E. Read and Liu Ju-Chiang, *Chinese Medicinal Plants from the Pen Ts'ao Kang Mu A.D. 1596: A Botanical, Chemical, and Pharmacological Reference List* (Peking: Peking National Historical Bulletin, 1936). For Read's full bibliography on the Chinese materia medica, see Joseph Needham, *Science and Civilization in China*, vol. 1 (Cambridge: Cambridge Univeesity Press, 1961), pp. 290-91.
  20. M. Tsurumi, "Public Hygiene in Manchuria and Mongolia", introduction, *The Light of Manchuria* (1 February 1921), p. 1.
  21. "South Manchuria Medical College", in *The Light of Manchuria* (Mukden: Manchurian Enlightening Society, 1 November 1921), pp. 42-50.
  22. The *senmon-gakko* approach was also followed by the Japanese when they acquired colleges in Taiwan and Korea. The schools were later raised to imperial universities. See Y. Kusama, "Medical Education in Japan", *Journal of Medical Education* (1956), 31: 393-98.
  32. John Young, *The Research Activities of the South Manchurian Railway Company, 1907-1945* (New York: The East Asia Institute, Columbia University, 1966).
  24. Personal communication, Kyoto, Japan. (1962).

## References

1. Gendaishi Shiryo, Mantetsu (current history materials, Manchurian Railway) (Mimizu Shobo., 1966).
2. Hokushi Keizai Chosasho Shiryo Mokuroku, Dai-jugo-hen, Chiri, Bunka Kyoiku, Shukyo, Sūgaku, Rigaku, Igaku, "Gokuhi" [Index data on the Economic Research Institute of Northern China, 15th book., geography, cultural education, religion, mathematics, physical sciences, medicine, "confidential".] (Mantetsu February 1941, report as of December 1940).
3. (Torajiro Naito) Jiji-ron, Shina Kyoiku dan [topics on education in China], October 1920 (reprinted in Naito Konan Zenshu, vol. 5, 1972).
4. (Torajai Naito) Jiji-ron, Shina ni okeru gaijin no kyōiku setsubi [educational system in China], January 1921 (reprinted in Naito Konan Zenshu, vol. 5, 1972).
5. Manshu Ikadaigaku Daiikkai Tōmō Junkai Shinryo Hōkoku, report of the First East Mongolian Travelling Clinical Survey (Mantetsu Eiseika, 1923).
6. Manshu Ikadaigaku Nijugonen-shi [Twenty-five years of the South Manchuria Medical College] (Genji Kuroda, ed., Manshu Ikadaigaku, Mukden, 1936).
7. Mantetsu Sanjunen-shi [Thirty years of the South Manchuria Railway Company] (Dairen, 1937).
8. Rockefeller Kikin, Fukyo-Dantai no Shina ni okeru Igaku-jigyo, Minami Manshu Tetsudo Kabushiki-Kaisha, Sōmu-bu Koho-Kyoku (Contributions to medical work in China by Rockefeller and other missionaries, the South Manchuria Railway Company, Administrative Division, Public Relations Office, November 1915).
9. Saizaburō Shinobu, *Kagakuteki Seijika no Shogai* (Tokyo: Hakubun-kan, 1941).
10. *Gotō Shimpei* (Tokyo: Hokai, 1941): 6.
11. The major archives are in the historical section of the medical library of Kyoto University, Kyoto, Japan.
12. Namman Igaku-do Junen-shi [Ten years of South Manchuria Medical College] (September 12, 1922, Namman Insatsusha, Namman Igaku-do, Rikizo Ishimoto, Mukden, Manchuria).
13. Dugald Christie, *Thirty Years in Mukden, 1883-1913: Being the Experiences and Recollections of Dugald Christie, D.M.G.*, edited by his wife (London: Constable, 1914).
14. S. Kubota and T. Okanishi, *Folia Pharmacorum Sinicorum: List of Collection of Chinese Materia Medica* (Mukden, 1931).
15. Professor Yasu Kuno, "Ueber die Schweissekretion des Menschen," *Transactions of the Fourth Congress, Far Eastern Association of Tropical Medicine* (Weltevreden, Java: Javasche Boekhandel en Drukkerij, 1921), vol. 2, pp. 260-70; Kuno, "Ein Apparat für die Bestimmung der Schweissekretien," *Fourth Congress*, vol. 2, pp. 271-73; and "Manshu Ikadaigakk Hojinkai," *Hojin*, November 1964, no. 7 (special number to honor Professor Kuno).
16. Ling Chi Hong in *Educational Review*, April, 1910, p. 8.
17. Thomas S. Logan, Inc., comp., *Manchuria, Land of Opportunities* (New York: Thomas S. Logan, Inc., 1922); Owen Lattimore, *Manchuria, Cradle of Conflict* (New York: Macmillan, 1932); Richard Story, *A History of Modern Japan*

An astute and perspective observer, Grant was deeply impressed with the program of the railway. The central laboratory had identified fifty-one usable products from soy beans; the soya products ranged from bread and cheese to hay, ink, and explosives. The collieries were tapping the thickest bituminous seams in the world, the maximum production from which was 16,000 tons a day. There were steel works to use the coal, as well as agricultural experiment stations, research bureaus, and a chain of hotels.

Grant described the work of the health department of the railway:

Its chief activities are control of communicable diseases, school hygiene, and industrial hygiene. The work in school hygiene would compare favorably with similar activities in any country (*Ibid.*).

In the fall of 1930 Knud Faber, professor of medicine at Copenhagen, surveyed Chinese medical schools on a mission for the League of Nations. His comments on South Manchuria Medical College were highly commendable:

It has also a high standard with excellent laboratories and class-rooms for premedical and preclinical training and a large hospital for clinical training (*Report on Medical Schools in China*, League of Nations Health Committee, 1931, p. 13).

### **Summary**

During the fourteen years of its existence there were 421 graduates from *Namman Igakudo*. After the school was upgraded to *Manshu Ikadaigaku* in 1922 there were 1,181 graduates until the college closed in 1946, having graduated nineteen classes between 1928 and 1946.

There were over 500 graduates from *Igaku Senmon-bu* between 1929 and 1945.

After its founding in 1911, South Manchuria Medical College soon became a leading center of medical education and research for both Japan and China. It attracted a distinguished Japanese faculty because of its excellent research facilities and the lure of Manchuria.

### **An Excellent Medical College**

The impressions of visitors were uniformly laudatory. E.V. Cowdry, head of anatomy at PUMC, appraised the school in 1920:

The Japanese Medical School in Mukden is unquestionably one of the best medical institutions in China. Its strength lies in its full time staff. It publishes a volume of researches each year which will bear careful study (Cowdry, "Anatomy in China", *Anatomical Record* 20 (1920-21): 35.

He also commented on the general position of Japanese medical education:

In view of the further consideration that a large number of Chinese physicians have received their training in Japan, it is not surprising that the Japanese exercise considerable influence in medical education (*Ibid.*)

Cowdry was particularly impressed with the facilities for anatomy:

The anatomy laboratories...are housed in a plain but substantial building and are fully equipped with everything necessary for teaching and research (*Ibid.*, p. 42).

He judged that only the University of Hong Kong, Aurora University in Shanghai, and his own institution in Peking had similar facilities for anatomy.

At a time when other medical schools in China, including Cowdry's own, faced grave shortages of cadavers, the situation in Mukden was exemplary:

To the best of my knowledge only the Japanese Medical School at Mukden and the University of Hong Kong have a sufficient and regular supply of bodies on which they can rely (*Ibid.*, p. 45).

Cowdry noted that teaching time in anatomy was equally divided between lectures and the dissecting room.

In a survey of medical education in China in 1917, E.M. Merrins held up the South Manchuria Medical College as the best staffed school in China. At that time there were 133 students enrolled with twenty nine full professors, three assistant professors, and eight lecturers (Merrins, "Medical Education in China", *The Chinese Recorder* 48 (1917): 497-506).

John B. Grant, M.D., professor of public health at Peking Union Medical College, visited Manchuria in 1923 and described the railway's extensive medical resources of 2,269 beds and 137 doctors as "all well equipped, costing the railway 1,920,857,000 yen above receipts" (*PUMC Weekly Newsletter* 4, no. 1, February 6, 1923, p. 4).



cation in Japanese *senmon-gakko*.

As Japan's medical programs in Manchuria expanded, a Japanese sponsored Manchurian Medical Association (*Manshu Igakukai*) was founded at Mukden, July 11, 1908. One year later, 1909, the *Journal of Oriental Medicine* was first published as a report of the annual meeting of the association. In 1911 the name of the association was changed to South Manchurian Medical Association and the decision was made to establish the *Namman Igakukai Zasshi* (*South Manchurian Medical Association Journal*) as a quarterly; the first number was published in May 1912. It later became a monthly journal.

In 1923 the principal hospital in Dairen began to publish the *Journal of Oriental Medicine* based on studies by its scientific departments. Two years later it was merged with *Namman Igakukai Zasshi* as *Manshu Igaku Zasshi* (*Manchurian Medical Journal*). In 1929 the first number was published in English.

### **Impact of World War II**

During World War II *Manshu Ikadaigaku* continued to operate but naturally with increasing difficulties as communication and transportation between the home islands and Mukden became increasingly difficult. The seventeenth graduation as a university was held in March 1945.

In the month following the surrender of Imperial Japan on September 2, 1945, the Chinese-Russian treaty called for the transfer of the railway and the medical college to the Railway Bureau of the Chosun Railway Company, which was jointly sponsored by China and Russia with trustees from both countries and a Chinese president. The name of the school was changed to *Tetsuro Ika Daigaku*.

In March 1946 Russia withdrew from Mukden so that her allies, the school Chinese Communists, could take power and the college became *Mukden Tetsuro Igakuin*. The following August the school was renamed *Shinyo Igakuin*, with a faculty that was part Chinese and part European.

In March 1948 all of the faculty were Chinese and the name of the school became *Chukyo Gun-i Daigaku*, Communist China Military Medical University.

and Kotaro Shiino from anatomy visited Peking. This program brought together the two leading medical research institutions in China. Yasu Kuno who lectured on the physiology of the pericardium, was the first visiting professor from Mukden, and Charles W. Young, who lectured on the work of his Kala-azar Field Studies Unit, the first from PUMC. The following year, W.W. Cort of the China Hookworm Commission of the International Health Board of the Rockefeller Foundation came to Mukden, and Sadaichi Masuda went to Peking.

Members of the medical staff of the German hospital at Tsingtao also visited the college periodically.

### **Toa (East Asia) Medical Institute**

Studies on Chinese traditional medicine were initiated by Genji Kuroda, professor of physiology. An extensive collection of ancient Chinese medical texts was established with some six thousand books transferred to the school from the library of the railway in Dairen. A two-volume "Study on Chinese Medical Books of the So Period" was published.

### **Pharmacy School, Yakugaku Senmonbu**

A pharmacy school, *Yakugaku Senmonbu*, was founded in 1936, with Taizo Yamashita from the preparatory school as director. There were innumerable herbalists practicing Chinese traditional medicine and prescribing native materials, but essentially no persons trained in pharmacy. In addition to meeting the need for pharmacists trained in modern medicine, the school had active research on the cultivation and the pharmacology of Chinese medicinal plants.

### **Other Japanese Medical Programs in Manchuria**

In addition to the railway programs, other Japanese medical activities included the Japanese Red Cross which operated thirteen hospitals in Manchuria and Mongolia for sick, poor Chinese. There were special hospitals for women and for patients with communicable diseases at Dairen and at Port Arthur. Finally, of the relative handful of Chinese physicians practicing in Manchuria, the vast majority had received their medical edu-

to prevent goitre.

A specific form of myocardial degeneration appeared in the Kokuzan district in 1935, north of Chichiharu and the plague bacillus was suspected as the etiological agent, because of the prevalence of the disease. A cooperative study by the faculty of medicine, the Hygiene Institute in Dairen, the Welfare Ministry, and the Japanese Army identified the causative agent as carbon monoxide from *ondoru* heaters rather than the plague bacillus.

### **Medical Expeditions in Manchuria and Mongolia**

In line with the declared policy of the SMR to carry out research on broad problems in Manchuria and Mongolia, beginning in 1923 expeditions of faculty and students studied medical and public health problems in the region. The First East Mongolian Medical Expedition, in the summer of that year, was led by Professor Seikō Kubota of the Department of Pharmacology and included an instructor, two medical students, and a technician. A major public health problem in Mongolia was the lack of a safe and adequate water supply; they described the drinking water as "a mud" (*Manshu Ikadaigaku Dai-ikkai Tōmō Junkai Shinryo Hōkoku*, 1923, *Mantetsu Eisei-ka*, pp. 22-26). With simple materials they developed an effective distillation apparatus for converting the "mud" to a safe drinking water. They also instructed the peasants in the selection of a proper site for a well and how to protect it against contamination.

Ninety percent of the population was estimated to have venereal disease, with gonorrhoea more frequent than syphilis; they were surprised to find that the incidence in the lamas approached that in laymen. There was a high incidence of homosexuality, and the lamas sold the idols from the temple to pay for prostitutes. In most of the patients syphilis was in the tertiary stage because no therapy was available. Prostitution was rampant and fornication was practiced openly on the streets. Trachoma was widespread.

### **Exchange Program with Peking Union Medical College**

An exchange professor program was established with Peking Union Medical College in January 1922 when Professors Seikō Kubota from pharmacology

## Public Health

A variety of research programs on public health in Manchuria and Mongolia were developed. Several of these were led by Unichi Miura, professor of public health. In one project, Miura analyzed the epidemiology of tuberculosis and other infectious diseases among Japanese in Manchuria. Based on his studies using an experimental abode in which temperature and ventilation could be controlled, he suggested that living in filthy, poorly ventilated, crowded, one-room huts during the long and severe Manchurian winters was a major factor in the high incidence of disease.

Professor Miura was also concerned with the health problems of the Japanese farmers who had come to Manchuria as pioneers. They usually resided in huts with inadequate clothing and food. Miura and his assistants developed model homes, cold-weather clothing, and diets for the peasants who were crucial to the success of Japan's Manchurian venture. In September 1940 the program was upgraded to become the Agricultural Workers Medical Institute.

Miura showed that the frequency of malnutrition among the people of Mongolia was related to the almost total absence of meat, fruit, and vegetables from their diets; they subsisted on small rations of cereal grains.

The wretched state of maternal and child health in Mongolia was evaluated by Professor Shinozuka. Half of the children in Mongolia died before the age of three years and the average life span was less than twenty years.

Professor Kentaro Hideo of the Department of Pathology and his associates found that 21 per cent of the stools of reportedly healthy laborers contained the cysts of *Entamoeba Histolytica* and they exhibited symptoms of amoebic dysentery. There was also a high incidence of other intestinal parasites such as *Ankylostoma Duodenale* and *Fasciola Hepatica*. Kala-azar was common.

The prevalence of endemic goitre in the area stretching from Peking to Shotoku drew the studies of Professors Takamori of the Department of Internal Medicine and Kubo of the Department of Otolaryngology. They identified one area around the city of Nekka where over 50 percent of the inhabitants had goitre and confirmed that iodine deficiency in their diets was the cause. Takamori and Kubo established a program for iodination of salt and fertilizer in the region and encouraged the ingestion of seaweed

1964) was published to recognize this distinction.

### **Studies on the Chinese Materia Medica**

Seikō Kubota and Tameto Okanishi of the Department of Pharmacology collected and classified over seventeen hundred specimens of the materia medica of Manchuria, China, Korea, Japan, and India, with financial support from the Scholarship Foundation of the South Manchuria Railway Company.

In January 1931 Kubota and Okanishi published a report from their ten-year study of the Chinese materia medica (*Folia Pharmacorum Sinicorum, List of Collection of Chinese Materia Medica*, Department of Pharmacology, Manchuria Medical College, by S. Kubota and T. Okanishi, Mukden, China, 1931). In a prefatory note they stated that the Chinese materia medica had recently aroused the interest of investigators whose studies had been botanical while pharmacological studies and clinical trials had been neglected.

The monograph includes an extensive description of the therapeutic indications of a variety of plants. Infusions from the dried penis of the bull, deer, horse, and monkey--especially the bull and the horse--were recommended for the treatment of syphilis. Deer penis would enhance virility while monkey penis was recommended for the treatment of asthma. Pulverized crab shell was indicated for the treatment of eye diseases. Pulverized pebbles were beneficial in the treatment of a variety of female diseases, especially gonorrhoea.

Other animal products used in the Chinese pharmacopoeia included gall bladder from the dog, raccoon, bear, and pig, of which the gall bladder of the bear was the most valuable. The newt, *imori*, was a potent medication, but only if the head, tail, and bones had been removed since they were considered to be poisonous.

The text is divided into eighty-eight pages on plants, six pages on metallic drugs, and seven pages on animal sources with their pharmaceutical properties.

The collections of Kubota and Okanishi and those of Bernard E. Read of the Peking Union Medical College were the major studies on the massive Chinese materia.

ing in the local area—*genchi kaigyō*. Admission was limited to sixty students.

### Research and Scholarship

The lure of Manchuria as a new frontier and excellent research opportunities because of generous support from the railway attracted an excellent faculty. Yasu Kuno was probably the most distinguished scientist to serve at Mukden. Born in 1882, after studying at an *Igaku senmon-gakko* in Aichi prefecture, he selected physiology for his career. Although practically every Japanese going overseas for training went to German laboratories, Kuno chose to also work with Ernest Henry Starling at University College, London, from 1913 to 1915, in part because of Starling's renown and in part because Kuno wished to learn English. After his return to Japan, Kuno joined the faculty at Mukden, where he remained until 1925. It was at Mukden that he carried out his classical studies on sweat production and control. He developed a perspiration chamber, a perspirometer, and tiny glass capillary pipettes with which he could measure the amount of water discharged by a specific area of the skin and from individual glands in a given time. He proved that sweating is an intermittent process due to periodic contractions of the muscle fibers of the sweat glands. He differentiated between generalized temperature-produced sweating and psychological tension-produced sweating of the hands and feet. These and other studies using the Kuno chamber established him as the world's leading authority on perspiration and Japan's most distinguished physiologist and medical statesman. Kuno was later to say that these epochal studies would only have been possible at Mukden (Kuno, Y., "On the Occasion of Receiving the Award for Cultural Merit," *Hojin* 7, November 1964, pp. 6-7, *Manshu Ikadaigaku Hojinkai*).

Kuno returned to Japan in 1935 and taught physiology at Nagoya University and at Kyoto. In 1941 he was awarded *Teikoku Gakushi-in Onshi-shō*, an Imperial Scholar Prize, for his scientific contributions. In 1949 Kuno was elected to membership in *Nippon Gakushi-in* (Japan Academy). His highest accolade came on Culture Day, November 3, 1963, the anniversary of the birthday of Emperor Meiji, when he received Japan's highest intellectual recognition, *Bunka-kunshō*, the Order for Cultural Merit, from Emperor Hirohito. A special number of *Manshu Ika-daigaku Hojinkai* (#7 *Hojin*, November

In October of that year the college celebrated its tenth anniversary with impressive ceremonies that were attended by, among many others, George E. Vincent, president of the Rockefeller Foundation, who had come to the Orient for the dedication of the Peking Union Medical College (PUMC); Dr. Wu Lien-teh, founder and director of the North Manchurian Plague Prevention Service; and President Araki of the Kyoto Imperial University.

Plans were then initiated to upgrade the college to the level of an imperial university, and in May 1922 Ordinance #468 designated it as *Manshu Ikadaigaku*, with I. Inaba, a former director of the college and superintendent of the hospital, as its president. The new educational program consisted of a principal, or medical school, course of four years and a postgraduate course for the *Igaku Hakase* degree. The medical school curriculum was similar to that of other Japanese university medical faculties with a long course in anatomy and histology, followed by shorter courses in medical chemistry and physiology in the first year. The second year included pathology, microbiology, pharmacology, and public health. The third year was assigned to lectures on all of the clinical subjects with an occasional opportunity for the student to perform a superficial examination of a patient. In the final year, the student spent two hours a day in the outpatient clinic and the remainder of the time at lectures and ward rounds.

A two-year premedical course patterned on the numbered higher schools in Japan was established as *Mandai Yoka*, Manchurian University Preparatory School. It was later extended to three years. This made *Manshu Ikadaigaku* and PUMC the only medical schools in China requiring three years of premedical studies. In August 1922 fifty-seven Japanese and three Chinese were admitted to the new premedical course.

The shorter *senmon-gakko* program was redesignated *Igaku senmon-bu*, since it was now associated with a university-level medical school, with the exclusive purpose of training Chinese in "practical" medicine.

In May 1928 the fourteenth and last class graduated from *Namman Igakudo Senmon-Gakko*, and in March 1929 the first classes graduated from *Manshu Ikadaigaku* and from *Igaku Senmon-bu*.

The *senmon-bu* was closed in January 1931, but reopened two years later, in January 1933. under a new ordinance restricting the graduates to practic-

Their clubs included ice skating, literary arts, archery, tennis, baseball, soccer, *kendo*, *judo*, *kado*, *shodo*, and *sumo*.

The annual tuition fee was 30 *yen* gold. Students who entered military service were given an automatic leave of absence and were exempted from tuition on their return to the college. There was a generous scholarship program for both Chinese and Japanese students.

The faculty was exclusively Japanese, save for two teachers of German.

Over a period of time, five other Japanese-sponsored medical schools were opened in Manchuria: Shinkyo Ikadaigaku, Harbin Ikadaigaku, Hokuan Igakuin, Toan Igakuin, and Manchurian Army Medical School (Teruo Sano, former librarian, South Manchuria Medical College, July 7, 1972: personal communication).

In Notice, #33, dated February, 15, 1912, the college was officially recognized by *Monbushō*, the Ministry of Education, in Tokyo. The academic calendar followed that of other Japanese schools: the school year began in April and ended in March, and was divided into three terms.

The first students to be admitted under the sponsorship of the provincial government in Manchuria enrolled in 1913; in the same year the first Chinese students were admitted to the principal course from the preparatory course. (The preparatory course for Chinese students was transferred to the South Manchuria Middle School for Boys in 1961.) The first graduates with the degree, *Igakushi*, received their diplomas from the new director of the college, Moto Yamada, on October 10, 1914.

In May 1915 a school of nursing with a two-year curriculum for Japanese was established. A separate course for Chinese nursing students was opened in 1921 with an enrollment of fifteen girls in the first class. The railway also sponsored two-year nurse's training programs in its hospitals in Dairen, Mukden, Fushun, and Antung. In addition, the hospital in Dairen had a training course for Japanese and Chinese midwives.

### **Upgraded to an Imperial University**

The rise in prestige of the South Manchuria Medical College was signalled on August 27, 1921, when the Japanese Anatomical Association, *Nippon Kaibo Gakkai*, held its annual meeting in Mukden.



for in that period presidents of imperial universities were usually appointed directly by *Monbushō*, the Ministry of Education, without consultation with the faculty.

The first classrooms of the new college at Mukden were in an abandoned plague hospital, until a new building was completed in 1914. A teaching hospital was constructed by the railway between 1910 and 1915.

Entrance examinations were held in Mukden and in various cities in Japan, including Tokyo, Kyoto, Sendai, and Fukuoka—a branch admissions office had been opened in Tokyo. Japanese students also enrolled from Korea and from Taiwan. The majority of the students came from Japanese families in Manchuria, however.

There were two programs: a “principal” course for Japanese, to which the first twenty students were admitted on October 10, 1911. The entrance requirements were graduation from middle school and successful completion of the entrance examinations. The second curriculum was a “preparatory” course at South Manchuria Middle School Fengtien (Mukden) to prepare Chinese for the study of medicine at South Manchuria Medical College. The two-year curriculum of the preparatory course included ethics, Japanese, Chinese, mathematics, natural history, physics, chemistry, sketching, and gymnastics. Chinese students who had successfully completed the preparatory course and could speak and write Japanese fluently were admitted to the study of medicine (Table 1).

In addition to annual examinations there was an examination before graduation which covered all of the basic sciences, medicine, and surgery.

The students were housed in a dormitory that belonged to the college.

Table 1. Curriculum: Principal Courses

First year: Chemistry, physics, anatomy, physiology, medicochemistry.

Second year: Anatomy, physiology, medico-chemistry, pathology, pharmacology, bacteriology, interclinique, medicine, surgery.

Third year: Medicine, surgery, pediatrics, ophthalmology, obstetrics-gynecology.

Fourth year: Medicine, surgery, pediatrics, ophthalmology, psychiatry, hygiene, dermatology, otorhinolaryngology.

---

Note: German was taught in all four years; gymnastics was required throughout the curriculum; and Chinese or Chinese classics and ethics were also required courses.

(From Namman Igakudo Junenshi, 1921, pp. 36-37)

War (1894-95), when he served with distinction as chief inspector of military hygiene. As a result, in 1901 he was selected by General Gentarō Kodama to serve as chief civil administrator in Taiwan, where he established an enlightened and comprehensive public health program.

In 1906 Gotō was made a baron and appointed president of the South Manchurian Railway Company. He immediately began to create major programs in medicine and public health "based on his belief that the development of Manchuria should rest on the improvement of public health and hygiene" (Miura, Unichi, 1968, p. 63). Two years later he was elevated to the presidency of the railway board and made minister of communications.

Shimpei Gotō selected Mukden instead of Dairen as the location of the college because of "the central location of Mukden both politically and geographically" (*The Light of Manchuria*, 1921, p. 44).

On May, 20, 1911, the South Manchurian Railway submitted a request to the Totokufu Kantoshu Hygeine Office to establish a medical school as a *senmon gakko* that would at a later date become a university. The request was approved on June 7, 1911, and on June 15 the South Manchuria Medical College (*Namman-igaku-do*) was officially founded by Imperial Ordinance # 320.

His Excellency Viceroy Chao-er Shun of Manchuria became honorary president of the new *Namman-igaku-do*, and Kenji Kawanishi, superintendent of the General Railway Hospital in Dairen, was appointed as director.

Medical schools and colleges in Japan at that time were divided into two domains: those in the northeast were controlled and staffed by faculty of Tokyo Imperial University, while those in the southwest had a similar relationship with Kyoto Imperial University. *Namman-igaku-do* related to Kyoto Imperial University.

The Kyoto relationship proved to be especially beneficial to the new college because of the deep interest in it of Torasaburo Araki, president of the university from 1915 to 1929. Araki stands as one of the dominant figures in the history of Kyoto University. After serving as professor of medical chemistry and dean of the medical faculty for twelve years, he became president and his tenure in that office was the longest in the history of the institution. He was only the second president to be elected from the faculty,

“the scourge of Manchuria as in all of China” (Christie, p. 46). A major epidemic of cholera in 1919 took 10,000 lives, 4,500 in the city of Harbin alone (Lien-teh Wu, J.W. Chun, R. Pollitzer, and C.Y. Wu, *Cholera, A Manual for the Medical Profession in China*, National Quarantine Service, 2 Peking Road, Shanghai, China, 1934). Typhus fever and typhoid fever were present. Osteomalacia covered almost all of Manchuria in a broad band (Maxwell, “Osteomalacia in China”, *China Medical Journal*, 37, no. 8, August 1923: 625-42). Active syphilis was found in at least 15 percent of the patients in general hospitals, and in 30 percent of the troops. Malnutrition was commonplace.

The medical problems of Manchuria drew worldwide attention in 1910-11 when a devastating epidemic of pneumonic plague, spreading from North Manchuria, took 60,000 lives.

A plague conference with representatives from ten countries was convened in Mukden on April 3 to 28, 1911, with Baron Shibasaburo Kitasato, Japan's leading medical scientist and the first to identify the plague bacillus in 1910, in attendance.

The people of Manchuria were completely ignorant of public health practices. According to Christie: “A man swallows the prescription along with the pill or crunches a clinical thermometer before he can be stopped” (*Thirty Years in Mukden. 1883-1913*, p. 40). It was anxiety over safeguarding the health of their employees that contributed to the decision to establish a medical college.

### **Shimpei Gotō**

The major force in the development of Japan's extensive programs in medicine and public health was a physician and surgeon, Shimpei Gotō (1857-1929), the first president of the railway company. A native of Iwate prefecture and a descendant of the famous *Rangakusha*, Chōei Takano, Gotō studied at Fukushima Byoin Igakusho, a medical school attached to the Sukagawa Prefectural Hospital. After graduation he earned the doctor of medicine degree in Germany; on his return to Japan he was appointed director of the public health bureau in the home ministry, Naimusho. Gotō's first major achievement in an illustrious career came during the Sino-Japanese

herself to have proprietary rights. Attempts by the two nations to reach a satisfactory solution failed.

This was the background against which Japan attacked Russia at Port Arthur on February 8, 1904; war was officially declared two days later. Most of the fierce fighting was in South Manchuria. With Japan's victory over Russia, the Portsmouth Treaty of September 5, 1905, restored Manchuria to the exclusive administration of China. The South Manchurian Railway and its holdings were transferred to Japan, which thereby became a major power in China.

On June 7, 1907, a Japanese Imperial Ordinance established the South Manchurian Railway Company (*Minami Manshū Tetsudō Kabushiki Kaisha*, generally known as *Mantetsu*) as a joint holding corporation of the government and private enterprise, with headquarters in Dairen. The railway opened up the richest part of China, heretofore undeveloped. Half of the original capital came from the government in Tokyo, and from the beginning it dominated the company, appointing its principal officers, controlling its financial operations, and reviewing all official actions.

One of the railway's more important activities was a program of research in China proper, established by Professor Santaro Okamatsu, which fell into three categories: socioeconomic; natural sciences and technology; and business and statistical.

As with other large Japanese corporations, the railway operated its own medical care programs and had hospitals in the seventeen major communities along its right-of-way, the largest being in Dairen, followed by Mukden and Fushun. They were staffed by Chinese doctors, the majority of whom had been trained in Japan. Although primarily for railway employees the hospitals also cared for the people of Manchuria. The railway also established a Hygiene Institute in Dairen, with hygiene officers stationed in principal cities along the railway such as Changchun, Fushun, and Antung; isolation hospitals in Dairen and Port Arthur.

### **Medical Problems in Manchuria**

Manchuria was filled with massive medical and public health problems. Tuberculosis was described by Dugald Christie at the Mukden Hospital as

population, food supply, land transport, and military prowess could be overcome by building a Trans-Siberian railway to establish Russian landpower and launch an ambitious expansionist policy in the Far East. Construction of the railway was begun in 1891 and completed in 1903.

In 1896 Russia and China signed a secret treaty of alliance under which the Russo-Chinese Bank was to build the Chinese Eastern Railway across Manchuria. In 1898 Russia obtained a twenty-five-year lease of the southern tip of the Kwantung Peninsula, including the port of Dairen and the Port Arthur naval base, and the authority to connect these ports with the Chinese Eastern Railway and to build a South Manchurian Railway (SMR).

China's late-nineteenth-century policy of avoiding foreign-financed and foreign-operated railways had been wrecked in the imperialist rush of 1898.

Foreign controlled lines--Russian and Japanese in Manchuria, German in Shantung and French in Yunnan had now become tools of economic imperialism, preliminary to opening mines, extracting resources, and exploiting markets (Fairbanks et al., 1973, p. 737).

Russia's primary target in the Orient was Manchuria, a land of vast untapped natural resources. She was encouraged in this by France, with whom she had established an alliance, and by Germany.

Meanwhile, Japanese and Chinese conflicting claims on Korea resulted in the Sino-Japanese War, 1894-95, in which Japan scored a dramatic and overwhelming victory. Japan advanced rapidly as an economic and military power, assisted in part by a large indemnity from that war. Japan also had her eye on Manchuria, not only for its natural resources, but as a fortress against China to the south and Russia to the north. After China's defeat, Britain concluded that Japan was the country most likely to offer resistance to Russian advances, and an Anglo-Japanese alliance was signed on January 30, 1902.

Meanwhile, Russia took advantage of the preoccupation of the Western powers with the Boxer Rebellion and proceeded to absorb Manchuria; troops poured in and when the rebellion was over Russia held most of the region. Russia's strategy in Manchuria became increasingly aggressive, calling for the occupation of parts of Korea, a country over which Japan considered

# THE HISTORY OF THE SOUTH MANCHURIA MEDICAL COLLEGE OF THE SOUTH MANCHURIAN RAILWAY

John Z. Bowers, M.D., Sc.D., L.H.D.\*  
and Akiko Kobayashi Bowers\*\*

The South Manchurian Railway established the South Manchuria Medical College (Namman-Igaku-do) in Mukden, Manchuria, on June, 7, 1911. It soon became one of the leading medical schools in the Japanese empire, as well as a leader among the American, British, Chinese, French, and German schools in China.

After the Boxer Rebellion in 1900, the foreign powers established medical schools as part of their imperialist drive in China. The major effort of the British was in Hong Kong where the Hong Kong College of Medicine for Chinese was opened in 1887. It became the Faculty of Medicine of the newly founded University of Hong Kong in 1912.

The major French effort was at Aurora University in Shanghai, where a medical school was established in 1913.

A medical school, which became known as *Tung-chi*, or Paulun, Medical School, was established in Shanghai under German sponsorship in 1906.

Early American efforts were led by missionaries and by American universities. The major American program was the Peking Union Medical College established in 1917 by the Rockefeller Foundation.

The Russians made no significant efforts in the area of medical education.

## **Background of the South Manchurian Railway**

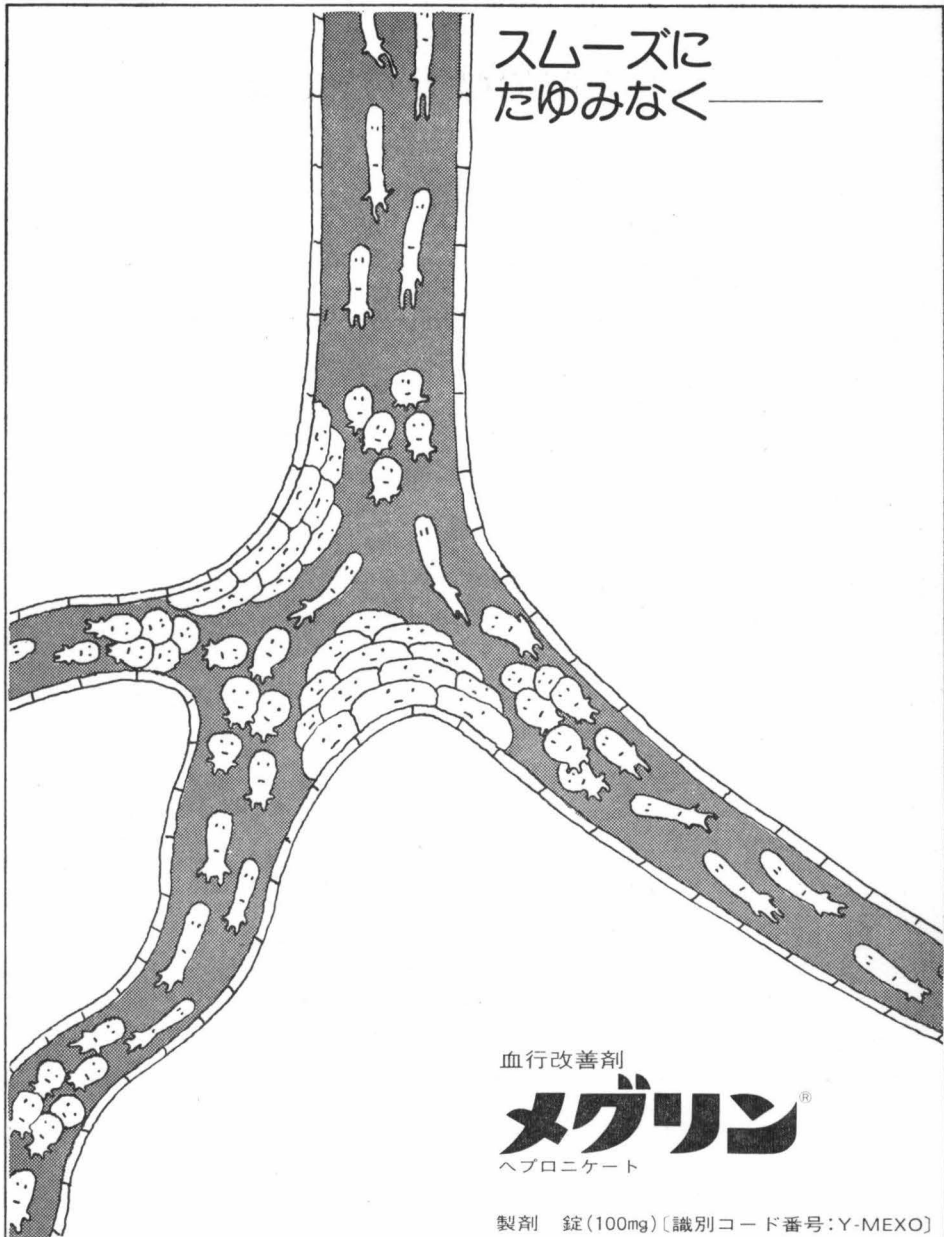
In 1866 Tsar Alexander III concluded that all Russian weaknesses in

---

\* President of the Josiah Macy, Jr. Foundation, One Rockefeller Plaza New York, New York 10020.

\*\* We express our appreciation to President Michtio Okamoto for making available the archives of Namman-Igaku-do at Kyota university.

スムーズに  
たゆみなく——



血行改善剤

**メグリン**<sup>®</sup>

ヘプロニケート

製剤 錠(100mg)〔識別コード番号:Y-MEXO〕

包装 PTP 1000錠 3000錠

バラ 1000錠

〈健保適用〉

●〈使用上の注意〉等については現品説明書をご参照ください



吉富製薬

大阪市東区平野町3-35

# NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the  
Japan Society of Medical History

---

Vol. 21. No. 4

Oct. 1975

---

## CONTENTS

### Articles

The Relation between "Chomel's the Algemeen Wordenboek" and  
"Shokugakukeigen", "Shokugakudokugo" .....Ichiro YABE... ( 1 )

Antecedents of Four Generations of Doctors Yasumi, Shogunal  
Patrimonial Physicians and Photograph of Ryukei Yasumi in  
Edo-period..... Kyutaro MAEKAWA... ( 15 )

Siebold's affair and Genseki HABU.....Giichi FUKUSHIMA... ( 30 )

Plenck's "Grondbeginselen der Vroedkunde  
.....Ranzaburo OTORI... ( 36 )

The History of "Ikasentetsu-tsuisenkai" (The Meeting of posthumous  
praise of great physicians) .....Teizo OGAWA... ( 45 )

The History of the South Manchuria Medical College of the  
South Manchrian Railway  
.....John Z. Bowers and Akiko Kobayashi Bowers..... ( 1 )

**Miscellaneous** ..... ( 53 )

---

The Japan Society of Medical History  
Department of Medical History  
Juntendo University, School of Medicine  
Hongo 2-1-1. Bunkyo-Ku, Tokyo